小樽商科大学

エバーグリーン講座

30 周年記念誌

国立大学法人
小樽商科大学

公益社団法人
緑丘会

30th anniversary

小樽商科大学
エバーグリーン講座
30 周年記念誌 / 目次

Contents

01 …… 目次

02 …… 巻頭言

03 …… 特別寄稿

10 …… 記念大会 基調講演およびパネルディスカッションの記録

18 …… 講師からのメッセージ

40 …… 「小樽商科大学のキャリア教育とエバーグリーン講座のいま」

59 …… 講師一覧（卒業年度順）

69 …… 講師一覧（開催年度順）

78 …… エバーグリーン講座実行委員より

巻頭言 Introduction

エバーグリーン講座 30 周年記念誌発刊にあたって

エバーグリーン講座実行委員長　　小椋 俊秀

エバーグリーン講座は、緑丘会の全面的な支援のもと、実社会で活躍する幅広い世代の卒業生を特別講師として迎え、人生の先輩として自らの経験を語ることにより、現役学生に卒業後のビジョンや学生時代になすべきことのヒントを与える連続講義です。

開始当初は単位認定もなかったため講義に出席する学生も少なかったそうですが、その後、正式に単位認定される授業となり、近年は後期の水曜日に「総合科目Ⅲ(エバーグリーン講座)」として開講され、1 年生から 4 年生までの 300 名前後の学生が履修しています。

オリエンテーションを除く 14 講義のうち、1 講は卒業 50 周年を迎える年次による寄贈講座、またもう 1 講は 20 代の卒業生によるパネルディスカッション「U30（アンダーサーティ)」を予定し、残る 12 講義がエバーグリーン実行委員会で年代などのバランスを考慮したうえでご依頼した講師による講座となっております。なお過去の講義の内容はフェイスブックページ (www.facebook.com/oucevergreen/) でご紹介していますので、ぜひご覧ください。

さて、昭和 62 年から始まった本講座は平成 29 年度で 30 周年を迎え、平成 29 年 11 月 7 日には「エバーグリーン講座開講 30 周年記念大会・祝賀懇親会」を開催いたしました。

記念大会の様子は本誌にて別途紹介しておりますが、祝賀懇親会は 80 名ほどの卒業生の参加でニュー三幸小樽本店にて行われました。舟本秀夫前エバーグリーン講座担当副理事長・現実行委員会相談役の乾杯で始まり、来賓の光合金製作所株式会社の井上一郎会長、そして各年代を代表して、青木匡光氏（S33 卒)、津山廣行氏（S40 卒)、合場直人氏（S52 卒)、中井令氏（H1 卒)、佐藤絵美氏（H12 卒) にスピーチをいただきました。校歌やエールで盛り上がった後は、山田二郎エバーグリーン講座担当副理事長・札幌支部長からの今後もチーム・エバーグリーンとして一致団結していこうとの決意表明でお開きとなりました。

この井上会長のスピーチ時に、記念大会で商大生はもっと海外に広く目を向けろと熱いメッセージをいただいた高木晃一様が倒れ、意識不明の状態で小樽市立病院に救急車で運ばれました。病院の ICU で意識が回復し、翌日には神奈川のご家族とも面会されたのですが、後日ご家族より訃報をいただきました。ご冥福を心よりお祈りいたします。

エバーグリーン開講 30 周年を迎えた平成 29 年度より、エバーグリーン実行委員会は緑丘会札幌支部の支部長直轄の組織として正式に位置づけられました。委員会では毎年、大学とも調整のうえ夏休み前に講師の検討・選出を行い、講師への依頼・日程調整などを経て開催を迎え、各講義日には委員が分担して講義参観するということを行っています。平成 29 年度はこれに加え 30 周年記念行事という委員会が初めて経験する行事を行うことになり、大学、緑丘会本部、札幌支部事務局のご協力のもと、30 周年記念行事を執り行うことができましたが、こちらが気づかぬうちにご迷惑などをおかけしたことも多々あったかと思います。不慣れな事とはいえ、この場をお借りしてお詫びを申し上げます。また本記念誌は当初平成 29 年度内の発刊を予定し原稿を頂きましたが、発刊が大幅に遅くなりましたこと、重ねて深くお詫びいたします。

30 周年行事を通じて、エバーグリーン講座創設に携わった第 1 世代の方々の想い、それを制度化し組織的な運用体制を築くのに携わった第 2 世代の方々の想いを強く受け止めました。小樽商大が、北に一星あり、日本に小樽商大ありといわれ続けられる存在となるよう、我々エバーグリーン実行委員会も皆様のご協力を仰ぎながら尽力できればと思います。

どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

特別寄稿 01

エバーグリーン講座30周年に寄せて

小樽商科大学学長　　和田 健夫

エバーグリーン講座30周年まことにおめでとうございます。

1987年（昭和62年）7月に6名のOBの方々（宮崎光彬、小原芳春、青木匡光、青木鎮夫、大谷芳弘、青木雅明の各氏）の発案で始まった講座が、かくも長きにわたって存続できたのは、その後のOB・OG、本学の教職員の方々の熱意と強い意思の賜であり、深い敬意と感謝の念を捧げる次第であります。

OG・OBによるオムニバス形式の講義は、今では多くの大学で行われておりますが、エバーグリーン講座は、その先見性、授業科目としての明確な位置づけ、確立した成績評価システム、同窓会・大学の連携による運営体制の点で、他大学の模範となりうる誇るべき取組であります。

講座開設の当初の趣旨は、本学の学生に、経営・ビジネスの実務上の課題を伝えることにあったと窺っております。複数の教員のゼミや専門科目の講義の一部を借りて行う、いわば試行的・実験的な12年の期間を経て、1999年（平成11年）に、2年前の教育課程改革により新設された科目「総合科目Ⅱ」として、いわゆる単位化されるに至りました。山田家正学長、山本眞樹夫学生部長の時代でした。

特定のテーマのもとに多様な視点・分野から複数の講師が講義をする「総合科目」には副題がつけられますが、最初の2年間は、「エバーグリーン講座」の名称は用いられず、講義名は「総合科目Ⅱ（二十一世紀の日本）」（平成11年）、「同（新世紀への挑戦）」（平成12年）というものでした。そして、現在のカリキュラムを作った2001年（平成13年）の教育課程改革により、平成13年には「総合科目Ⅲ（エバーグリーン講座）」となり、その後はこの呼び名が定着いたしました。

単位化によりエバーグリーン講座はその性格を変えました。本来「総合科目」は、1年次から受講できる教養教育のための科目で、入学直後の学生に社会の諸問題に目を開かせ、学問への興味を引き出すことを目的としています。従って、専門教育を目的としてスタートしたエバーグリーン講座でありましたが、単位化と同時に教養教育の視点が入り込むことになりました。さらに加えて、講師陣を、年齢、男女のバランスを考えて選ぶようになったこともあって、OB・OGに、大学時代の学びや現在の仕事・職業への思いも語っていただく機会が増え、エバーグリーン講座は、本学の学生（とくに一年次学生）に、将来のキャリアへの展望をもたせる、いわゆるキャリア教育としての性格を強める結果となっています。この傾向は、他大学でもみられるところですが、本学は全国の大学に先駆けて取り入れたと自負しております。私自身は、これがエバーグリーン講座の本来の姿であると考えています。

30年の歴史のなかで、教壇に立たれたOB・OGの方々は延べ360人余。講師の職歴・肩書きや講義の内容を伺っておりますと、小樽商科大学がいかに多様な人材を世に送り出してきたかということを改めて実感いたします。このすばらしい取組が今後も継続されることを願ってやみません。

特別寄稿 02

「大学の現在価値は卒業生の思いと満足度のΣ（総和）である」

公益財団法人緑丘会理事長　　島崎 憲明

エバグリーン講座開講 30 周年の記念すべき節目を迎えるにあたり、関係各位の今までのご尽力に深く感謝するとともに、心よりお慶び申し上げます。同窓会が大学との協働により歴史を積みかねてきた実務講座は、聴講された学生諸君に卒業後の実務社会をナビゲートするという意味で、その役割は大変貴重であったと思います。現在まで 300 名を超える同窓生が講師を務め、実務経験を踏まえた先輩からの語りが「実学の小樽商大」を象徴する講座との評価をいただいているのは、講師を務めた一人として大変誇らしく思うところであります。

私は一昨年から公益社団法人緑丘会理事長を務め 3 年目に入っておりますが、卒業後初めて同窓会活動に参加したのは、1999 年 12 月（平成 11 年 12 月）開講のエバグリーン講座の講師を務めた時で、それは 1969 年の卒業以来 30 年ぶりの母校訪問でもありました。我々の在学時代に比べ、校舎は近代的建物に変わり、学生数が 2 倍ほどに増え、女子学生の多さにも驚きました。講演内容は「グローバル連結経営の深化による企業価値創造と求められる人的資源」で、当時進めていた事業のグローバル展開と人材について話をしました。

私はその後 2 回にわたって学生諸君に話をする機会がありました。第 2 回目が 2005 年 10 月の就職ガイダンスで「緑丘の後輩へのメッセージ」と題して、第 3 回目は緑丘会理事長に就任した年、2015 年 12 月に「緑丘の後輩へのメッセージ②～これからの働き方、職業の選択について」と題してお話しました。これら 3 回の講演に共通するキーワードは、「小樽から全国、世界に羽ばたいてほしい」、「就職では一人でも多く本州に出てきて欲しい」ということでした。母校の置かれている状況は、国からの予算削減など大学運営は大変厳しい環境にあるなど、昔とは随分と変わってきているようですが、母校の社会的使命は今も昔も変わらないはずです。北の小都市にある日本最小の国立大学が存在し続ける意味は、グローバル人材を育成し世に送り出すことが変わらぬ使命だと思います。

私は長年、会計関係の方々とお付き合いがありますが、仕事仲間に「小樽商大は会計の名門ですね」とよく言われます。私が主計部長を務めていた時の会計監査法人の理事長は先輩であったし、税務担当だったころにお世話になった公益社団法人日本租税研究協会会長も先輩でした。また、数多くの同窓生が上場企業の経理部長や CFO として活躍してきたからこそそのような評価になったのだと思います。「北に一星あり、小なれどその輝光強し」という言葉は、同窓生が社会に出た後も母校に誇りを持ち、育ててくれたことへの感謝の気持ちを忘れず、それぞれの分野で活躍することに支えられているので

はないでしょうか。

小樽商大で学んで本当に良かったと思うことはいくつもありますが、その一つが大学の教育そのものが社会に出て役に立ち、受けた教育レベルの高さを機会あるごとに感じ、それを誇りにもてたことだと思います。その一例ですが、在学時代に 2 人のノーベル経済学賞受賞学者の著書を原書講読した経験は、今でも母校を語る時の誇りです。経済概論でのサミュエルソン著「経済学（Economics: An Introductory Analysis）」、卒業論文で使ったミュルダール著「Asian Drama: An Inquiry into the Poverty of Nations」の 2 冊との出会いは今でも忘れることはありません。経済概論では、講義のあまりのレベルの高さに驚き打ちのめされましたが、これは大学での学問との衝撃的な出会いでもありました。卒論は「インドの経済発展と人的資源開発」がテーマでしたが、その後の会社生活を経て現在に至るまで、「企業の成長と人材の育成」は、私の経営思考や組織運営の基になっています。

同窓会活動は同窓生の絆を深める場であるとともに、母校や後輩諸君への支援という 2 つの側面があります。同窓生の皆様が母校で学んだことへの恩返しとして、それぞれの方ができる範囲で、大学や後輩に対して物心両面でのサポートをお願いできればと思っております。

特別寄稿 03

エバーグリーン講座 30 周年に寄せて ～緑丘会への御礼を兼ねて～

小樽商科大学名誉教授　元学長　山田　家正

このたび、エバーグリーン講座が開講 30 周年を迎えましたことは誠に嬉しい限りです。この機会に、本講座をここまで育てて下さった緑丘会、幹事の皆様、講師を務めて下さった卒業生の皆様など歴代の関係各位に心から御礼を申し上げます。

本講座は、同窓生の現役ビジネスマンによる学生向け講座として緑丘会が 1987（昭和 62）年に開講して下さったのが始まりでした。その後、年ごとにこの講座の重要度が増し、1999（平成 11）年には総合科目の中に正規科目として位置づけられ単位化するまでに充実しました。

実社会で活躍された卒業生の皆様から貴重なお話を伺える機会を学生達に与えて頂き本当に有難いことでした。今後もご苦労があろうかと思いますが、何卒継続して下さいますようお願い致します。学生達は、卒業後いつの日にかこのエバーグリーン講座の講師として母校に帰る機会を持ちたいとの夢を持つことでしょう。

緑丘会の皆様にはこのエバーグリーン講座の実施をはじめ種々の事業実施に際して本当にお世話になりました。この紙面をお借りして改めて御礼を申し上げたいと存じます。私は 1992（平成 4）年から 2002（平成 14）年まで学長を務めました。現在は国立大学も法人化され、私の在任中とは少し変わってきたかもしれませんが、当時は新たな事業を始めるための予算獲得は非常に難しいことでした。その事業をどうしてもスタートさせたいと考えた際、緑丘会に財政的な支援をお願いしたことが少なからずありました。

国立大学は私が学長に就任する少し前から大学改革の流れが加速しつつありました。私が併設短期大学部の部長をしていた時に、夜間３年制の短期大学部を４年制夜間主コースに改組しました。この時の経験から、税金で運営される国立大学、とりわけ小樽商大のような社会科学系単科大学では、教員の研究実績や質の高い人材の育成という本来の役割に加え、大学自体が社会貢献を果たし地域社会に不可欠な大学であるという評価がないと、将来の存続が危ういとの危機感を抱きました。

学長就任後、私は本学卒業生の皆様はじめ道経連や小樽・札幌の経済界の方々など、社会の第一線で活躍される方々から多くの建設的なご意見やご支援を頂きました。その結果の一つは 1997（平成 9）年の札幌サテライトの設置という形で結実しました。これは緑丘会に後援会助成金の増額をお願いして実現しました。このサテライトは地域の活性化につながる教官等の研究プロジェクトの拠点にも活用されるとともに、社会人大学院生の教育の場としても活用され、やがてビジネス創造センターの設置、さらには後の

専門職大学院アントレプレナーシップの創設にも繋がりました。ビジネス創造センターは 2000（平成 12）年から国立大学として最初のビジネス支援組織になり、いくつかの起業に携わりました。専門職大学院アントレプレナーシップ専攻は 2004（平成 16）年、国立大学法人移行と同時に設置され、東京以北初めてのビジネススクールとなりました。

このように、私が経験した大学改革の流れの節目にはいつも緑丘会から物心両面のご支援を頂いて参りました。今でもその関係は変わらないものと思っております。

これからの国立大学は法人化されたとはいえ、財政的にはますます厳しくなることでしょう。しかも、少子化に伴う大学進学者数の減少という現実もあります。将来、どのような状況になろうとも小樽商大にとって緑丘会によるご支援は必要不可欠なものと確信しております。

エバーグリーン講座３０周年記念のお集まりに出席するようお誘いを頂きましたが、都合でどうしても出席できません。お許し下さい。盛会であることを祈念致しております。緑丘会の皆様、エバーグリーン講座が今後も学生達へ知的刺激を与えて下さいますよう、そして小樽商大へ変わらぬご支援を下さいますようお願い申し上げます。

特別寄稿 04

エバーグリーン講座 30 周年を心から祝福したい

昭和 33 年卒　　青木 匡光

エバーグリーン講座 30 周年を心から祝福したい。講座立ち上げにいささかつながりある一人として、今日まで見事に継続していることに感慨無量である。30 年前当時の藤井榮一学長をわたしのヒューマンハーバーサロンにお招きした。その折に参加されたのは、緑丘会運営の中心軸として活躍されていた金垣英雄先輩（S13）、青木鎮夫さん（S35）、青木雅明さん（S37）である。藤井学長には、数多くの素晴らしい緑丘人を輩出しているがその見識と生きた知恵とを学生たちに伝えないのはもったいないので、特別講座を開講したらどうかと参加者全員で提言した。この提言を受けて学長は早速に学内意見をまとめてくださり、「エバーグリーン講座」という名称で特別講座が実現することになった。

わたしの講義の思い出だが、第一回の講座では「情報時代の企業人」というテーマで話した。そして 10 数年後にはエバーグリーン講座の積年の実績が文部科学省に高く評価されて単位の認可があり、併せて講師料も支給されるようになった。それまでは旅費は緑丘会に補助されたものの大学からは講義記念ペナントの贈呈があるだけで、熱い母校愛に燃えた講師陣による手弁当の協力であった。そんな折にわたしの二回目の講義「21 世紀を生きぬく魅力ある人間性づくり」があり、出版したばかりの拙著「自信のない人が成功する法」（PHP）を知的みやげとして数百名の受講生全員に進呈して喜ばれた。単位が取得できるようになってからは受講生の数が格段に増えて好ましい状況になってきた。三回目は 25 周年講師として招かれて「“香りある人になるために”―自立へのステップを踏み出そう―」というテーマで講義した。初回のエバーグリーン講座、文部科学省の単位認可時そして 25 周年という節目に三度も出番を与えられたのは光栄でありとても嬉しかった。

わたしの講義内容で一貫して底流にあるのは“人間を創る”ことである。社会に出て自立して生きていくバネが培われたみずからの体験と重ね合わせながら、小さな大学の出身者がどうすれば世の中で埋没せずに存在感を打ち出せるようになるかを、わかり易く伝えてきた。とりわけ記念講義では、これからは自分らしい生き方を求める人間が主役の時代。みずから仕掛けて行動するように心がけて人生を楽しむことだ。自立して生きていくには豊かな人間財産を増やしていくことが何より大切だ。そのためには人を惹きつけるような人間の香りが必要で、その香りをどう身につけていけばよいのかを具体的に語りかけてみた。例えば、自分の存在感を示すために在学中に得意な分野での奨学論文や企業・各種団体が企画する知的コンペに挑戦し、入選して客観的評価を獲得していく。さらには徒歩や自転車で旅を仕掛ける行動力、あるいは学びでも遊びでも何かについてナンバーワンを目指してエネルギーを燃やすなどして、みずからの活力に自信

をつけてみる。要は、大学で何をやったのか何にのめりこんだのか、そのテーマをしっかり身につけてアピールできることが肝要なのであると。

幸いなことに、「緑丘」には脈々として受け継いできた立派な伝統があり、学びと遊びと自然を通して魅力ある人間性を育むのにたいへん恵まれた環境がある。しかも、社会のいろんな分野で活躍する人材が豊富であるのだから今後もタテ（卒業年次）ヨコ（同期）ナナメ（部活サークル）の OB ネットワークをさらに深く活用することで貴重な人材発掘に努めてほしい。「先輩にあんな人がいる。ぜひわたしも」と後輩が続いてくれるような、そんなヒューマンインパクトある人材がエバーグリーン講座に出講されて、人の心をゆさぶる新しいタイプの“緑丘人を創る”よき道しるべになっていただきたいと切に思う。

特別寄稿 05

『エバーグリーン講座』30 周年に思う

昭和 35 年卒　　青木 鎮夫

☆はじめに

新しいことを始めるには勇気と決断が必要だが、それが走り始めてからは忍耐と執念が不可欠だと思う。この講座を 30 年も支え続けた力のなかみは、主として緑丘会員諸氏の強い母校愛を基盤とした沢山の方々のご尽力であったことを感じ、それに深甚の敬意と感謝を捧げると共に、この講座の末長き発展的継続を願う次第である。

以下にこの講座をスタートさせた時の発案・企画と初期の運営に携わった一人として、その背景や経緯を記述したいと思う。

☆『学園の沈滞』の認識が発端

母校の沈滞が緑丘会の中で広く話題になったのはいつ頃のことであったか定かではない。ある時期に限れた話題であったか、かなり古くから延々と涯しなく繰り返されて来たテーマなのかも判然としない。

ただ、戦後の学制改革で単科大学に昇格した以降に学んだ同窓生たちよりも、戦前・戦中の卒業生たちの方に『沈滞論』が強かったようにも思える。

『最近の学生は卒業時に緑丘会への入会を拒む者が出て来た』、『緑丘会の新年会などの行事には若い会員が出て来ない』などの現象から、大学当局への不満や時代の風潮に染まっておとなしくなった学生たちの覇気欠落などが、先輩たちの憂いと憤懣を招いていたようだ。

われわれ（昭和 30 年代の卒業生で、緑丘会のお手伝いに当たっていた数名）が、先輩のお声がかりで、上京された藤井学長を囲む懇談会に招ばれたのも、『沈滞打破』のために緑丘会で出来ることは何か―を学長も交えて話し合ってみようという主旨であった。

長時間に及んだ懇談の中で出席者一同が『曙光』だと感じて集中して行ったテーマは、『開かれた大学』をめざして企業を中心とした実社会の情報を学生に伝えるために、同窓の実業人を母校の教壇へ送り込めないか―であった。

早速にプロジェクトチームが結成され、前述したわれわれがメンバーに決まった。

☆『エバーグリーン講座』の企画承認まで

年が改まって昭和 62 年、大急ぎで作成して緑丘会理事会に提示した企画書の頭部は『同窓生による寄

贈講座（エバーグリーン講座・仮称）企画案』。

1、趣旨。有為な実業人の育成をめざす大学の目的に同窓生として協力するという基本的立場に立って、（中略）理論と実践を統合的に理解する機会を作って行く。（以下略）

理事会からは積極的に支援する旨の報告があり、学校側も協力を約して下さった上、新年度のカリキュラム編成と文部省（当時）への説明のため、講座の組立を早急に―との催促があった。

そうなると第一回の講座の統一テーマと講師の選定・依頼という作業に入らねばならない。殊に、講師の人選については一大困難にぶつかった。4 年間の在学中に名前を覚えて話をする機会を得られる先輩後輩の層は上下各３年位が限度で、殊に後輩の卒業後の進路や状況については殆ど知らない。クラブ・ゼミ・出身校や郷里・企業内外の人脈等々あらゆるルートを探る汗みどろの作業だったが、どうにか人選と出講日の調整を終えた時には学校が指定した日程が目前に迫っていた。

☆『エバーグリーン講座』開講―結び

目新しさと学校側の周到な準備によって、昭和６２年７月２２日、第一回の講座は開講できた。

新しい校舎の階段式大講堂に集まってくれた２００名ほどの男女学生たちは興味深げに聴講してくれたが、われわれ側は僅かな安堵プラス『果して・・・・』という心配・不安を抱いて、呆と佇むばかりだった。

あれから３０年。すべてがうまく運んだ訳ではないが、大学が『単位化』を実現して下さった頃から着実な充実・進化への道程に入ったと言えよう。文字通り『継続は力なり』を実感している。

冒頭の謝辞に重ねて母校・緑丘会就中講師をつとめて下さった各位に心からの敬意と感謝を申し述べて結びとする。

基調講演

「『エバーグリーン講座』30 周年に思う」

青木鎮夫（昭和 35 年卒業）

1988（昭和 63）年度にエバーグリーン講座がどのように始まったのか。発起人のひとりを務めた私からお話ししましょう。ちなみに発起人には3人の青木がいました。私のほかに、青木雅明君と青木匡光君です。私と青木雅明君とのつきあいは商大の入学式の次の日からはじまりましたから、もう 60 年以上になります。かつて彼はある週刊誌に、小樽商科大学の同窓会組織は全国的に見てもさながら唯一無二のもので、活動に熱をあげる「緑丘病患者がたくさんいる」と書いたことがありました。まさにその通りだと思います。

しかし振り返ってみれば、卒業したころ私が緑丘会に抱いていた印象は、なんだか老人クラブの集まりみたいなものだろうかなどというレベルの、実に不届きなものでした。けれどもそんな意識を一変させることが起こりました。卒業して少し経ったころ、在学中に私も活動したグリークラブ（ 男声合唱団 ）が東京公演を行うことになり、先輩としてサポート役を務めたのです。当時東銀座にあった緑丘会東京支部の事務所に佐々木周一理事長を訪ねました。グリークラブとは何かね？ といった話からはじまったのですが、佐々木さんはすぐ協力を約束してくださり、運動部と同じ扱いで5万円の支援をいただきました。そのうえ各方面への声がけなどもお願いできたので、感激しました。そしてコンサートの冒頭でご挨拶いただけないかとお願いしたところ、それもまた快諾していただき、用意していた叩き台の原稿を受け取ってくださいました。佐々木さんはそのとき、緑丘人にとって母校のために何かできることは、本当にうれしいことなんだよ、とおっしゃった。帰りには若造の私をわざわざエレベーターの前まで送ってくださったことを昨日のことのようにおぼえています。「なるほど、緑丘会というところは実にすごいところだ」—。そのとき緑丘会の意味を実感しました。

そんなことがあってほどなく、1970 年代半ばに、中田乙一さん（三菱地所社長）や岡田春夫さん（衆議院議員）という小樽高等商業学校時代の大先輩たちが、緑丘会で中国訪問団を組織しようと計画を立てられました。なんとしても参加したいと思い、私も 15 名ほどの一団に加えていただきました。このとき諸先輩たちにとても親しくしていただき、以来緑丘会の仕事をいろいろ頼まれるようになります。もとより断る理由もありません。つまり私もすっかり「緑丘病患者」の一員になってしまったのです。

そして 80 年代半ばころから諸先輩のあいだで、どうも最近の母校は沈滞気味じゃないか、俺たちのころはこんなもんじゃかなったぞ、といった声が上がるようになりました。私自身はそうだろうか、とあまり実感はなかったのですが、大先輩たちの目からはそう見えたのですね。大学が象牙の塔と化してしまって、建学の基盤であるところの高度な実学とは少しちがった針路を取っているのじゃないか。もっと経済社会の実際の風を入れた方が良い、というわけです。

当時の藤井榮一学長が東京にいらっしゃるとき、そのことを議題にして懇談会が持たれました。そのとき、実社会で活躍している OB たちが学生たちにビジネス界の生の風を入れてはどうか、という話が出ました。学長も、同窓会がそこまで考えてくれるのはたいへんありがたい、と賛成してくださいました。じゃあさっそく具体化させよう。青木君頼んだよ、となってしまいました。当時私は緑丘会常務理事でした。

ならばじっくり取り組むか、と思っていたのですが、学長の方から来期のカリキュラムに取り入れたいので早くしてほしい、と注文が入り、緑丘会や学内に諮るために急いで企画書をまとめました。まとめながらも実は私は一方で、同窓会というものが果たしてここまでやるものだろうか、と何度も反芻したのも事実です。誰かが誰かを支援する場合、世の中にはパトロンとスポンサーのふたつがあります。パトロンは、金を出すが口は出さない。対してスポンサーは、金を出して口も出す。緑丘会は、パトロンに徹して勇み足のようなことをすべきではないのではないか。そんなことをずいぶん考えたのです。しかし会も学長もゴーサインを出したのですから、やるしかありません。

さて講座のタイトルはどうするか? 私は思いつきで、「(仮称) エバーグリーン講座」としておきました。あくまで仮称です。いろんな方と相談を重ねて講師の候補を決めてひとりひとり交渉を進め、1988 (昭和 63) 年の春から講座はなんとかはじまりました。名前は、仮称のはずだった「エバーグリーン講座」。それが今日まで、なんと 30 年も続いてしまった。夢中で取り組んだものがこんなに長く認められて面映ゆい気持ち、というのが正直なところです。私が運営の中心にいたのは、スタートしてから5年目くらいまでした。そのあとは仲間にバトンタッチしてしまって、そのことで少し負い目もあったのですが、皆さんが一生懸命続けてくれたおかげで今日があります。ただただ感謝申し上げます。

人口減と少子化、国際競争の激化など、日本の大学をめぐる情勢は、いま大きな変化の潮流に洗われていると思います。カリキュラムのことや法制度のことなど、具体的にはいまの私に論じる材料はありませんが、私が捉えるに日本の大学は、研究を中心にした総合大学と、戦後たくさん作られた専門に特化した地方の大学、そして地域に根ざして教育を軸にした大学と、3つくらいに分けられるのかと思います。北海道の大学はいずれひとつに大きく統合されるべきだ、といった極論もありました。では小樽商科大学、そしてエバーグリーン講座はこれからどうあるべきでしょうか?

おかげさまで今日のエバーグリーン講座はカリキュラムに深く織り込まれ、学生諸君、そして学内外にその主旨が広く認知されています。そして特筆すべきは、講師の人選から交渉、講義の準備と終わった後に学生に出してもらうレポートまで、コンスタントに持続できるしっかりとした体制があることです。すばらしいことです。自分がグリークラブ出身ということもあり、これからのエバーグリーン講座に対しては、こう思います。大学側と学生、そして緑丘会。この三者がさらに上手にハーモニーを作り上げていけば良いだろう、と。緑丘会の現副理事長である山田二郎さんはグリークラブの後輩でもありますが、合唱ではひとりひとりが自分の役割をきっちりと果たしながら、自分の声をまわりと活かしあって豊かなハーモニーをこしらえていきます。エバーグリーン講座のこれからの運営についても、これが大切なことだと思います。これからの 30 年、そして 50 年と、時代が求めることに応え、中味をさらに成熟させていきながら、着実に発展を重ねていっていただきたい。それが、口火を切った人間としての心からの願いです。また現役学生諸君も、この講座を通してなるほど小樽商科大学とはそういう大学なのかと、どうぞ認識を深めてください。そして商大での学生生活は、自分のためであると同時に仲間のためであり、そして大学や同窓会、あるいは地域のためにもあるのだと意識していただければ大きな喜びです。

エバーグリーン講座 開講 30 周年記念大会（平成 29 年 11 月 7 日／ 470 講義室）

「エバーグリーン講座が伝える小樽商科大学の DNA」

パネリスト／野村　文吾 氏（昭和 63 年卒）
堤　千夏子 氏（昭和 63 年卒）
塚原　敏夫 氏（平成 2 年卒）
歌原　邦芳 氏（平成 7 年卒）
斎川　貴代 氏（平成 16 年卒）

モデレータ／大津　晶（社会情報学科准教授）

大津／本日は近年のエバーグリーン講座に登壇していただいた５人の皆さんに来ていただきました。まず自己紹介と、そのとき話した内容などについてお話しください。

野村／帯広に本社を置く十勝バス（株）を経営しています。2代目を務めた明治 39 年生まれの祖父が小樽高商出身でして、私が商大に入学したときとても喜んでくれたことが忘れられません。今日ここにいる私を、祖父も喜んでくれていると思います。私の講義では、自分の学生時代のことをたくさん話した記憶があります。

堤／私も野村さんとおなじ昭和 63 年の卒業です。国立研究開発法人日本医療研究開発機構というところで広報の仕事をしていますが、これまでに５回転職しました。講義ではそんな経験をもとに話をしました。講義中は、自分たちのころよりずいぶんおとなしい雰囲気だなぁと思ったのですが、あとで書かれたレポートを見せていただくと、みなさんとても熱心にちゃんと聞いてくださっていたことがわかり、感激しました。ちなみに私は来年（2018 年）の年明けから６回目の転職で日本銀行で広報の仕事をすることになっています。

塚原／堤さんには数で負けてしまいましたが（笑）、私も４回転職しました。はじめに入ったのが野村證券（株）でしたが、いろんな縁に導かれて転職をして、今年の春に、島崎憲明緑丘会理事長をはじめとする皆さんに支援をいただきながら、道北の上川町に上川大雪酒造（株）という日本酒の蔵、「緑丘蔵」を立ち上げました。講義では、転職と日本酒蔵の立ち上げについて話しました。

歌原／私は松尾ジンギスカン（株式会社マツオ）の常務取締役を務めています。登壇したのは６年前の 11 月 29 日で、「イイ肉の日」でした（笑）。私は、「創業者が孫に教えた繁盛法則」というテーマでお話しました。そのころ弊社は東京銀座に出店したのでそのことを軸に、若い時代に積極的に挑戦してみよう、と呼びかける内容でした。

斎川／私は十勝の浦幌から商大に来ました。卒業後はまず（株）リクルートで営業の仕事をしました。それから東京の IT 企業に転職をして、12 年ほど経ちました。現在は北米と南米の IT 開発を進める仕事をしています。そして実は私には裏の顔がありまして、一般社団法人ちゃぶ台返し女子アクション！という運動の代表理事をしています。最初に就職するときに私は、一生仕事をしていきたいと思いました。しかし結婚したとたん家事の負担がほぼ百％私にかかってきて、このままではやっていられないゾ！（笑）と思って仲間と声を上げたのでした。講義で記憶に残っていることは、良くも悪くも商大生は素直で少しおとなしいな、ということ。仕事で会うことも多い東京の学生さんの承認欲求の強さに比べると、印象的でした。

大津／皆さんにお聞きします。学生時代から今日まで、先輩たちから学んだこと、受け継いだこと、そして後輩たちに伝えていきたいことはどのようなものですか？

野村／大手ホテルチェーンで会社勤めをしていた私が十勝バスに入社して、やがて経営に取り組んだのは、実は父がもう会社を畳むと決めたあとでした。そこからさまざまな困難が連続したのですが、社員といっしょにひとつひとつ乗り越え、なんとか建て直すことができました。いまでは全国のローカルバスのビジネスモデルのひとつとして認知されるまでになっています。越えられないような壁を前にしても怯まずに進めたのは、ひとえに商大が鍛えてくれた人間力だったと思います。困難に耐える忍耐力と、どんなときも前へ前へと進む挑戦する気持ち。こうした力の基盤はまちがいなく部活やゼミの仲間とのあいだで鍛えられたものでした。

歌原／私の学生生活はアメリカンフットボール部とともにありました。アメフトでは、ダミーに突進して思い切りタックルを仕掛ける練習があるのですが、新人はみな、怖いので目をそらしたりつぶってしまいます。私は先輩から、まっすぐ見てぶつかれ！と繰り返したたき込まれました。実はその方が安全で効果的なのです。卒業して、それはビジネス社会でも同じなんだ、と痛感しました。当時は、ジンギスカンという北海道料理にはもう伸びしろがなくて、ゆっくり廃れていくものだというイメージがあったのです。しかし、「たかがジンギスカン、されどジンギスカン」です。私は新しいジンギスカン像を作りたくて、銀座に出店するという大きな挑戦に出ました。このままではじり貧かもしれないという難局を、まっすぐ見すえてぶつかっていったのです。「困難に目をそらすな」—。言葉では理解していたことですが、ビジネスの現場で腹に落ちたことでした。いまでは東京に3店を展開することができました。

斎川／私の場合は、海外に飛び出していった先輩たちの学びに大きな刺激を受けました。自分も在学中にぜったいに海外に行きたいと思い、アイスランドに留学することができました。がんばっている先輩たちを見て、私も追いかけたくなったのです。本当に自分がやりたいことを見つけたときには、迷わず思い切って飛び込んでみる。そんな精神はいまの私の仕事にも生きています。

塚原／私はエバーグリーン講座 30 周年の年の最後の登壇者でした（2017 年 1 月 25 日）。「縁から生まれる仕事」というテーマで話をしたのですが、この「縁」の中心には小樽商科大学と緑丘会があります。私は4回転職しましたが、どれも自分から行動を起こしたものではありません。一般に転職のタイミングは、ライフサイクルに左右されます。結婚した、子どもが生まれた、家を建てた。そんなときに転職する人はあまりいません。しかし私は、そのときの縁を優先させました。そして講義でも強調したのですが、それまでの人的なネットワークをリセットするような転職なら、オススメできません。転職後の世界がそれまでのネットワークにつながっているのなら、いろんなチャンスが待っていると思います。緑丘会の島崎憲明理事長に私が最初にお目にかかったのは、野村證券に勤めていた時代でした。当時住友商事の代表取締役副社長だった島崎さんにまず手紙を差し上げたのですが、秘書の方の段階で止められたようです。それでもめげずに手紙を出し続けると、秘書の方が、この人は小樽商科大学の後輩のようですと言ってくれたのでしょう。島崎さんは、「後輩なら会わなければならないな」と時間を作ってくださいました。そこからつながりはどんどん強くなっていって、いっしょに酒蔵を立ち上げるまでになりました。私がエバーグリーン講座に出たのが 2017 年1月。10 月に地鎮祭、11 月着工で今年（2017 年）4月に竣工。5月に酒造免許が下りて最初の仕込みをして、秋に酒ができました。1年前にいまの私たちの姿を予測できた人はいないと思います。それもこれも、緑丘会のつながりのなせる技でした。

堤／ 1910（明治 43）年小樽高等商業学校として創立された小樽商科大学は、戦前から幅広い産業界に多くの人材を輩出してきました。現在の私たちは、優秀な先輩たちの築いてきた伝統の上にいることを意識したいと、いつも思っています。現役学生の皆さんにもそこを強調したいと思います。私は日本オラクル（株）で働いた時期があったのですが、同社を立ち上げた大先輩佐野力さんとも、商大卒業ということでほかの社員よりも親しく言葉を交わしていただけました。私は現在緑丘会の会報「緑丘」の編集に携わっています。仲間や先輩たちとよく話すのが、このところ若い OBOG の入会が減っていること。年会費 5 千円が高いと思われているとも思います。でも声を大にして言いたいのは、会員になると、絶対に5千円以上の価値が末長く得られるということです。本州でも緑丘会支部（仙台・東京・京阪神）はいろいろな催しを行っていますが、ひとりで顔を出してみても必ず温かく迎えられるでしょう。仕事で、あるいは人生のことで、先輩たちは必ずあなたの力になってくれます。私もそうしてキャリアを積んできました。緑丘会ではほんとうにたくさんのことが学べる。現役の皆さんに、そのことを伝えたいと思います。

大津／ここで会場からも、これまでの話を受けてご意見をいただきたいと思います。いかがでしょう？

（会場から）

柏崎俊雄／私は 1966（昭和 41）年卒業ですが、東京からひとりで小樽に来て商大に入りました。最初の夏に夏期講座があり、いまでも強く印象に残っているのです。一橋大学の中山伊知郎先生や朝日新聞の笠信太郎さんなどが、胸がどきどきするような素晴らしい講義をしてくださいました。小樽商科大学というのはすごい大学だと心から思いました。それは通常の講義とはちがう機会なのでよけいにそう感じたのですが、今思えばそうした非日常の体験を学生たちに提供できるのが、大学の外部にある緑丘会だとも思います。

大津／現在エバーグリーン講座を運営する緑丘会の実行委員会の皆さまには、卒業 50 周年を記念した寄付講座もいただいていて、商大卒業生に限らずに、広い視野からハイレベルの講師をお招きいただいています。その源流のひとつが、当時の夏期講座にあったわけですね。

（会場から）
高木晃一／エバーグリーン講座には私自身４度も登壇させていただき、緑丘会の広がりや価値を十分に知っています。しかしここではあえて逆のことも言っておきたい。それは、いうまでもなく、同窓会の内側で仲良く集まっているだけではダメだということです。同窓生が全国に広がっているといっても、商大の規模は、良くも悪くもほんとうに小さい。そこに充足してしまっては、生まれるビジネスはちっぽけなものかもしれません。現役学生に強く言いたいのは、君たちのライバルは東京の学生に留まらず、世界のさまざまな国の若者なのです。君たちは彼らと競い、あるいは理解し合い協働してこれからの世界を動かしていきます。そこでは、単に語学が達者だから、会計の知識があるから、というだけではまったく不十分です。決め手になるのは、ひとりの人間としての魅力や価値にほかなりません。そのことを強調しておきたいと思います。

大津／組織の前に、まず個人が広い視野と自分の足でしっかりと立っていなければならないのだし、そういう人間が集まってこそ強い組織が機能するわけですね。パネリストの皆さんに戻って、エバーグリーン講座のこれからについてご意見をお聞かせください。
斎川／いまカナダで仕事をしている商大出身の私の友人がいるのですが、そういうネットワークを活かして、海外と同時に結ばれた講義もできるのではないでしょうか。それから、現在もフェイスブックが機能していますが、講師と受講する学生たちがシェアできるコミュニティがさらに活発になっていけば、新たな学びや発信の仕組みが生まれていくと思います。
歌原／そうですね。緑丘会の先輩たちの中には、男女や年齢を問わず、海の向こうに渡って果敢なチャレンジをつづけている方がたくさんいます。チャレンジする精神が商大生に共通した資質だと思います。なんといっても小樽は、まちの成り立ちからして「外を向いた港町」です。世界で勝負して、ある人はサケのようにまた帰ってくる。海外で活躍している人たちをもっと結んだり、講義に呼べれば良いかもしれませんね。
塚原／学生時代までの僕たちは、これができたら次はこれができるぞ、と導かれて育ってきました。つまり卵があって、そこからニワトリが生まれてくるわけです。でもビジネスの世界ではそうはいかない。成功した人は「ニワトリと卵の問題」をクリアした人たちなのです。自分のことで恐縮ですが、酒蔵を立ち上げるにはまずお金を集めることが第一歩でした。でもいくら価値ある酒を造りたいと言っても、酒造免許を持たない会社に出資する人はいません。でも会社と設備と人がいなければ免許を申請することもできない。この矛盾をどう解決するか。エバーグリーン講座では、学生たちをこうした次元の世界に導くこともできると思います。
堤／ネット社会ですから、気持ちがあれば遠くの人同士ですぐにつながることができる。一方で、私は以前科学振興の仕事をしていましたが、例えば誰もが気軽に実際に集って専門的な知見が学べるサイエンスカフェという手法があります。卒業したあとでも、大学を離れてさらにもっとつながりやすい場を作ることも有効ですね。
大津／小樽と本州の緑丘会でも昨今いろんな勉強会の動きがあります。そうした広がりが重要ですね。
野村／堤さんの話を僕なりに受けて、あえてアナログの話をします。ネット環境を活用した広がりとつながりはもちろん大切です。でもそれは人と人が目を見て結ぶコミュニケーションが基盤にあっていっそう発展するものだと思います。大きすぎない緑丘会は、顔を会わせてコミュニケーションを深めるのにちょうど良い規模です。ですから卒業生と現役生がどんどん出会って語りあい、互いを高めていければ良いと思います。エバーグリーン講座で登壇した経営者の会社に学生がインターンとして経験を積めるような仕組みも有効ではないでしょうか。

大津／皆さまありがとうございました。エバーグリーン講座の講義の内容は、国内外どこからでも見られるフェイスブックで発信していますので、ぜひご覧になっていただきたいと思います。本日の議論をふまえて、この講座の価値をさらに高めていけるように取り組んでいきたいと思います。最後に島崎理事長に総括をお願いします。

島崎／有意義な議論をたくさん聞かせていただきました。感謝申し上げます。エバーグリーン講座の誕生には、沈滞気味の商大に活を入れたいという先輩たちの気持ちがあった。そのことをたいへん興味深く受けとめました。私は 1969（昭和 44）年卒業で、いわゆる団塊の世代です。小学校から大学まで、それまでの世代よりなにしろ数が多い。高校や大学の定員も一気に増えたので、先輩たちはよく、お前たちは薄まって入った弱い世代だ、などと言ったものです。いつの時代も、先輩が後輩を見る目は厳しいものですね（笑）。私たちの時代にあって、今は失われてしまったものはいろいろあるでしょう。しかし逆もまた真です。あの時代にはなかったけれど、いまは大学院や OBS があるし、しっかりした留学の制度もある。女子が4割もいる。そして一方ではもちろん、先ほど応援団の第１０３代団長が登場してくれましたが、昔から今日まで営々とつながっているものも少なくない。長い歴史を糧にしてこそ、時代に適応して変わっていけるのだと思います。緑丘会は単なる懇親の会ではありません。卒業生がつながりあって現役学生を支援することが本義です。2021 年の商大創立 110 年を見すえて、そのためのネットワークをさらに強くしたいと思います。学生諸君はどんどん先輩たちを訪ねてほしい。小樽商科大学においては、緑丘会と学生のひとりひとりが主役なのです。

大津／島崎理事長、パネリスト皆さま、そしてお集まりの皆さま、本日は誠にありがとうございました。

Commemorative lecture

Message

講師からのメッセージ 1

平成元年度、4 年度、5 年度、12 年度講師　高木晃一（昭和 37 年卒）

講座の話は、もう大分以前のことなので記憶も薄れてしまったが、思い出した事と、母校への希望を一点。

幹事の皆さんのご努力に敬意を表します。最近は受講生も多くなって同慶です。講師の方も手ごたえを感じながら講義していることでしょう。

この講座は単位目的で聴講するのが本来の趣旨ではないと思うのですが、私は、藤井学長の頃、依頼されて英語レクチャーとして「為替相場の変動と企業の対応」の講義をしたことがありました。聴講者は学長と教官３名、学生１名と実に驚きました。学内の調整や、それ以前に学生たちの関心テーマの把握が不十分だった為でしょう。学生や関係者の感度の低さに愕然としたことを思い出しました。

今はそのようなことはないのだと思いますが。企画当事者たちは感度を研ぎ澄ましていることが大事です。聴講生のコメント－これはマストです。「非営利組織のマネジメント」、５０ケ国以上の国での私の経験を話しました。このとき学生に講義の評価提出を義付けてもらいました。今でも私のファイルの中に１００数十枚の感想が残っていますが、当時この分野での講座が大学ではなかったためもあるのでしょう。

「こんな世界や分野があることは知らなかった」、「今迄聴いた講義の中で最もエキサイトした」、「こんな講座が大学にあればいいなー」、「今後も継続してほしい」など、お世辞があるにしても「衝撃的だった」というコメントが圧倒的でした。

私は札幌の私大でも数年間このテーマで集中講義をしていましたが、その大学の学部長が講義は聴講者に「わかった」と思わせ「感動を与えることが出来れば大成功だ」とコメントしていました。断片的な知識や単位が目的ではないということです。

小樽商大は企業分野へ進む学生が多いのでしょうが、パブリックセクター、非営利セクター、どの分野に進んでもグローバルにこの視点とスキルは益々必要になります。

私はある財団で採用面接の際、「金を儲けるのと、金を使うのはどちらが難しいと思うか」という質問をしていましたが、このような正解のない問題にも思考を巡らせることが出来る若者が増えてほしいと思っています。

学生たちには自分の競争相手あるいは協働者は、世界中の若者だという事実を徹底的に認識してほしいと願っています。

別件ですが、大学の広報体制の強化、これもマストでしょう。道新だけではあまりにもローカルです。少なくとも日経の「学ぶ、磨く、育つ」欄には意識してアプローチしてもらいたいものです。

（最後に図書館に非営利組織マネジメント関連の本と資料を数十冊寄贈しておきました）

Message

講師からのメッセージ 2

平成 3 年度 10 年度講師　浦島久（昭和 50 年卒）

かつてエバーグリーン講座を担当したことがあるのは覚えていました。けれども、それがいつで、どんな話をしたのかはすっかり忘れ去っていた私でした。記憶を呼び起こしてくれたのは、本棚にひっそりと置かれていた盾です。

講座終了後に藤井榮一学長から頂いたこの盾には、1990 年 12 月2日に講座を行ったと書かれています。今から27年前ということは、エバーグリーン講座は3年目の年で、私は37歳。英語学校「ジョイ・イングリッシュ・アカデミー」開校 14 年目でした。学生時代、私は藤井学長の「経済概論」を受講していましたが、単位は見事に落としています。10 年以上も経っているとはいえ、その藤井学長に再会したときは緊張したものでした。

その年は、4冊目の著書『英語で話そう HOKKAIDO』（北海道新聞社）を出し、ジョイが全道的に注目されるきっかけとなったイベント「オール・イングリッシュ・デイ」の 13 回目に特別ゲストとして東後勝明先生（早稲田大学教授）をお迎えした年でした。また、北海道で唯一だった英文雑誌『ノーザン・ライツ』の第 11 号を発行。この出版を評価していただき、北海道国際文化交流奨励賞（北海道国際文化協会）を拝受したのもこの年でした。

いま思えば、この頃の私は未だ発展途上にあり、貪欲で、怖いもの知らずでした。けれども、人前で話す機会はそれほどありませんでしたし、学生に興味を持ってもらえるような話ができたとも思えません。その上、よく「地域からの英語戦略」などというタイトルで話せたものだと、恥ずかしい思いでいっぱいです。

機会があれば、もう一度エバーグリーン講座に登壇させていただけたらと思います。ジョイは昨年、開校 40 周年でした。少なくとも 37 歳の私とは違った話ができるでしょう。タイトルはもちろん、「地域からの英語戦略」です！

Message

講師からのメッセージ 3

平成５年度講師　岩原秀雄（昭和 40 年卒）

私が、エバーグリーン講座を依頼されたのは、２４年前の１９９３年７月でした。テーマは「損保業界におけるシステムの有効性と課題」です。

あれから、スマホ・携帯端末・ウェアラブル端末の利用は拡大し続け、それ等をネットワークでつなぎ「無形なものもインターネットでつながる」IOT 時代が到来しています。更に「ビックデータ」を活用し新たな「知見」を得られる AI 技術が進展しています。これまで出来なかったことを測れたり推論したりネットワークする事によって、新しい付加価値が生まれる社会が始動しています。

一方で、その社会の「影」も見逃せません。SNS を巧みに悪用して人の弱みにつけいり殺害するという凄惨な事件の発生、増幅する「オレオレ詐欺」事件、新たな通貨と注目されるビットコインの国家がらみの詐取疑惑等は、本格的なネットワーク社会の享受と共にもたらされる脅威です。

現在私は情報セキュリティ監査と個人情報保護の認証審査を業としていますが、IOT 時代に AI 技術を安全・安心に経済社会で、また個人生活で享受できる前提条件が必要だと思っています。「文化の違いの理解とその教育」です。例えばヨーロッパ社会では個人情報保護は民主主義などと並ぶ基本的な価値観であるのに対して、我が国では個人情報保護法が２０１７年大改革されても事業者での周知は「いまひとつ」のようです。多民族国家のヨーロッパとほぼ単一民族国家の日本という歴史背景の違いが影響しているのかもしれません。この文化の違いを理解して、IOT 時代に AI 技術を駆使できる人材が必要だと思います。その人材を育てる教育がなんとしても必要です。

教育にあたっては、大切な点があると思います。一つは「ネットワーク社会という時代の「光」と「影」を認識できる能力」です。今の時代の理解が必要ですが、IOT や AI を流行語のように扱う雰囲気に流されてはなりません。皮相的な現象を追うことなく時代を基本的に変えていく「光」と「影」の双方を理解する。その背景や文化の差異も理解しながら、時代を読む事が必要です。先人の教訓「空気を読むな時代を読め」です。

もう一つは、重要なベクトルを「選択できる能力」です。AI 技術によって得られる知見の優劣は「ビックデータ」の量と質が左右します。AI 技術を使った知見を「選択できる能力」をどう身に着けるかが重要です。便利さの中に潜むセキュリティの危うさを身に感じ「選択できる能力」も重要です。

ネットワーク社会の人材として、そうした教育が必要です。古瀬教授から始まった伝統ある小樽商大の情報処理・管理科学教育の中で、こうした事を学ぶカリキュラムが更に多くあって欲しいと思います。理系大学の技術教育でなく、IOT と AI 時代の本質を看破し、進むべきベクトルを「選択できる能力」を持った人材育成教育を。そのカリキュラムを持った商科大学として、エバーグリーン講座が一層充実されればと思います。

Message

講師からのメッセージ 4

平成 22 年度講師　田中良定（昭和 43 年卒）

2011 年 1 月 11 日に「変貌するアジアと日本」というタイトルで講義しました。総合商社の現場で蓄積してきた知見を基に、世界の人口の半分を占めるアジアの変遷と日本との関わり、そして日本のアジアへの貢献などをテーマに話をしました。

質疑応答を含めて 1 時間半の持ち時間のなかで、なんと PP を 100 頁も準備して、それを伝えようとしましたが、これは意気ごみ過ぎで、あまりにも多くの情報を盛り込んでしまいました。そんなに沢山のことを言われても、学生はただ「あの人、一所懸命にしゃべっていたなー」という印象を持っただけではなかったかと、後日、大いに反省しました。

重要と思われることをせいぜい 3 項目くらいに絞り、それを繰り返して学生に印象づけ、彼らの記憶に残る講義をすべきだったと思います。100 頁の PP を極端に言えばせいぜい 3 ～ 5 頁に絞る、即ち 30 分の 1 か、20 分の 1 まで削るべきだったと思います。

母校での講義は初めての経験で、そのことは大変私の刺激になりましたが、単発講義であったことを踏まえて、もっと受け手の立場になって資料を準備し、「あの先輩は、こんなことを言っていた」と後々までも学生の記憶に残る講義をすべきでした。その為には多くの情報を持ち出さずに「削りに削って、これぞと思う一番大切な情報に限って提供する」のが、単発講義のコツではないかと感じた次第です。

単純化するあまりに結果として事実を曲げたり、誤解を与えないような注意が必要ではありますが。

Message

講師からのメッセージ 5

平成６年度 12 年度講師　水谷浩二（昭和 45 年卒）

私は、1968 年、大学３年で一生の進路、仕事分野としてコンピューターを選んだ。何より、当時の古瀬大六教授を中心とする８名の管理科学科講師陣に出会え、議論し後押しされたことによる。あの時は、大学紛争の波が小樽にも波及してきたが、私の頭はアメリカでコンピューターを学び先端の世界で勝負することしかなかった。当時からＩＴ技術はアメリカで生まれ、常に先進性と多様性で大きな変化を生んでいた。

そして、その後５０年、私は古希を迎えたが、今もこのＩＴ業界で学び続けている。沢山の企業の皆様とＩＴ技術と新ビジネスモデルの適用を議論し、シリコンバレーにも毎年ベンチャーとの議論の為に行っている。あの小樽商科大学でのきっかけと素晴らしい講師陣にめぐり逢えて私の人生は変わった。と今でも感謝している。

エバーグリーンの教壇に立ち、与えられるのは刺激ある世界が待っている事を伝えること。私の経験が一人でも面白いと思ってくれる事である。世界は多様性のある社会であり、そこで何かを経験することが必要である何かを見つけ、楽しい、興味ある分野にのめり狂う事が人生を変える。知識教育はネット中心でも十分だが、刺激ある人間に会って話が出来る場はこれからも重要な接点である。エバーグリーン講座は“まさに人、先輩に会って刺激を受ける場、拠点”といえる。現役の“世界各地の現場で異文化を学ぶ”経験者が、さまざまな分野でグローバルな価値観、世界観を伝え、刺激を与える。一歩踏み出す事を学ぶエバーグリーン講座の発展に期待する。

Message

講師からのメッセージ 6

平成７年度講師　萩本和之（昭和 45 年卒）

１９９５年（平成 7 年）10 月２０日にエバーグリーン講座で「多チャンネル時代と近未来生活」をテーマに講義しました。それに先立ち、同１８日に小樽商科大学夜間主コースの近勝彦助教授（現大阪市立大教授）ゼミでも話をしました。

私は北海道新聞記者やイベント担当の事業局を経て、当時の札幌ケーブルテレビジョン（現Ｊ：ＧＯＭ）に出向していたことから、エバーグリーン講師を依頼されたものです。

当時は「ＣＡＴＶって、新しいテレビ局？」と質問されるのはざらで、ウィンドウズ９５が同じ年の 11 月２３日に販売される直前でした。インターネットの認知度もまだまだでした。このため、私は近助教授やＵＨＢの幹部らとマルチメディア研究会を立ち上げて、インターネットの可能性などを研究していました。

いまや私の孫を見ても、1 歳ぐらいからスマホをいじって自分の画像を観るほどになっています。当時の講義と比較すると、いまや映像撮影が手軽にでき、自由に配信できる“超多チャンネル時代”となっています。私の話が、聴講学生のその後の生活に役立ったか、どうかは分かりませんが、私はエバーグリーンの講師をしたことで、その後北海道新聞社を早期退社して、メディア研究者への道を歩むことになったきっかけの一つでもあります。

グローバル・ＡＩ時代という激変を迎えながらも、残念ながら、地域内での絆が薄れ、世代間交流も乏しく、ゲーム空間の影響ばかりを強く受けている現代の学生。こうした状況だからこそ、国際的にも通用する時代観や歴史的な教養、科学的な思考が求められています。その意味で社会人ＯＢ，ＯＧによる話は貴重であり、不可欠だと思います。事務局の方々はご苦労が多いと思いますが、青木匡光先輩らが創設したエバーグリーン講座が、より一層充実することを大いに期待しております。

Message

講師からのメッセージ 7

平成 13 年度講師　熊谷克己（昭和 37 年卒）

西暦２００１年１１月２０日　母校の教壇に立って大勢の学生諸君を前にお話しをする（講義をする）という機会をいただき、緊張のうちにその準備をしたことと当日は学生諸君（女子学生が多かった）が静かに私の話を聞いてくれたことが懐かしく思い出される。

話の主題は仕事のため私がイランに駐在した時期（１９７７年～１９８０年）に遭遇したイラン革命の前後の人間模様と社会情勢が中心でしたが、このイラン革命の衝撃が直ちに隣接するイラクの政治・社会・宗教に波及し（イラン･イラク戦争等)、今日の中近東を覆う“イスラム国”騒動にも続いていると思われる。

私は家族を帯同してテヘランに住んでいたが、海運会社の業務上の必要からペルシャ湾全域―――インド西岸からパキスタン、アフガニスタン（ここは内陸国だが)、イラク、クウェート、サウジアラビア ,･･･オマーンまでのペルシャ湾の港湾を定期的に現地に行ってチェックしていた。各国の動きが他国に及ぼすことは地政学上、避けられないといつも感じていた。宗教的にはシーア派のイランに対し、インド、パキスタンを除き湾岸諸国はスンニー派が主流であり、かつ、イラン、イラク、トルコには少数民族のクルド人やアルメニア人などが存在し、民族のアイデンティティーを主張していた。また政治体制は民主主義というよりは王族又は独裁者による統治が一般的だったので、このシステムが崩壊するとどうなるか・・・　１９９０年の湾岸戦争から継続しての現在のイラクの混迷状況から明らかである。ここでは民族、宗教、石油、独裁がキーワードである。

そして、民主主義には時間がかかると教えられた。

さて、私は最近まである企業グループのボランティア活動に参加して、世界の各国から神戸大学へ留学している学生をアテンドしていた。大学当局では社会人（主に大企業の定年退職者）は留学生にとって日本を理解するために貴重な存在であるといつも公言していた。普段は留学生とボランティアとの１対１の交流であるが留学生を囲んで大学当局と私たちボランティアが一堂に会しての定期的な交歓会も開催されている。私自身の勉強にもなった。母校小樽商大にも、この種の組織的な活動が存在しているのでしょうか。気になっているところである。

Message

講師からのメッセージ 8

平成 13 年度 28 年度講師　水越和幸（昭和 61 年卒）

ドアを開けると懐かしい空間が眼前に広がった。１６０講義室。その片隅に座っていた頃が蘇ってきた。

２００１年と１６年の２度講師を務めたが、これまでの仕事を見つめ直す意味でも貴重な機会だった。教壇に立って感じたのは、学生の気質が徐々に変化していることだ。０１年は私語をする者も散見されたが、終了後に質問に来る受講生もあり、それなりの手応えを感じた。これに対し、１６年はみな真剣に耳を傾けてくれ、行儀が良くなったというのが印象だ。一方、こちらが質問をして挙手を求めても手を挙げる学生はまばらで、いまひとつ反応がつかみきれなかった。

２度目の講義の１６年は卒業後ちょうど３０年。現在と３０年前、中間地点の１５年前を政治、経済、国際、スポーツなどの分野別に比較する表を作り、学生に見せた。強固に思えた東西の壁があっさり崩壊。日本経済はバブル崩壊で長期低迷を余儀なくされる。道内にプロ野球チームができ、多くの道民がその結果に一喜一憂する－。どれも、学生の頃、思いも寄らなかったことばかりであることに気付いた。

今後も先を読むのがますます難しい時代が続く。多様な分野で活躍するＯＢを講師に招くエバーグリーン講座は重要性を増すと思う。幸い、卒業生は官民含め各界で活躍しており、人材は豊富だ。いろいろなカリキュラムを組むことができよう。一つ注文を付けるなら、地方で働く人にもう少し光を当ててはどうだろうか。地方自治の最前線で働く首長、職員、議員、道内外の地方都市で会社を営む経営者らに登場してもらい、地域の実情や課題、未来を語って頂くのだ。その集積が、本学が掲げる「グローカル」を深化させる一助になるように思う。

私の講義を聞いてくれた学生が講師になり、さらにその下の後輩を教える。こうした流れが末永く続くことを願っている。

Message

講師からのメッセージ 9

平成 16 年度、平成 19 年度講師　坂本信之（昭和 35 年卒）

エバーグリーン講座は金垣英雄氏（昭 13）から緑丘学園の沈滞を打破するための策として「現役ビジネスマンの同窓生による講座づくりは出来ないものか」とのお話が昭和 61 年暮れにあり、青木匡光氏、（昭 33）青木鎭夫（昭３５）、青木雅明（昭３７）が発起人となり、1987（昭 62）年 7 月 22 日にスタートした。企画案には趣旨として「有能な実業人の育成を目指す大学の目的に、同窓生として協力するという基本的立場に立って、経済社会や企業で活躍中の同窓生が、現実を踏まえた情報を特設の講座を通じて学生に提供し、理論と実践を総合的に作っていく」（「エバーグリーン講座の一部始終」青木鎭夫『緑丘』64 号 1988 年 1 月 31 日）と経過が説明されている。翌 7 月 23 日の『北海道新聞』には「後輩の学生諸君にビジネス最前線の情報を、小樽商大 OB による初の『エバーグリーン講座』が 22 日から同大で始まった」と報道されている。

『緑丘』のお手伝いをして、上記を知り、少しでも自分の経験が役立つならばと平成 17 年 1 月 18 日「ロンドン証券市場に日系現地法人として第 1 号の上場をさせていただいた経過」を母校の教壇で講義をする機会をいただき感激いたしました。

Message

講師からのメッセージ 10

平成 16 年度講師　大森正志（昭和 41 年卒）

「マーケティングは、人生においても豊かさと希望を与えてくれる」

小樽商科大学で学んで得た最大の宝物は、マーケティングとの出会いである。昭和４０年のことである。「これからはマーケティングの時代である」と主張する岡本理一教授のゼミで学ぶことができた幸運に感謝は尽きない。

マーケティングとは、顧客のニーズを明らかにし、それにぴったり合う製品やサービスを提供する機能であり、売れる仕組みづくりとも言われる。この考え方は、サービスを提供する非営利組織においても適用できる。県立高校長としての最初の赴任校において、マーケティング戦略を展開し、２．５倍の志願者増を達成、学校の活性化を実現することができた。また、商業高校生主体の空き店舗を活用した「水商まぁーけっと」運営による商店街の賑わい創出では、私のビジネス経験も活き、大きな反響を呼んだ。

マーケティングは、人生上の課題解決にも有効であり、豊かさと希望を与えてくれる。「雇用され得る人材の育成――マーケティング発想に基づいて――」と題してのエバーグリーン講座は、仕事上はもとより進路決定等人生上においても、マーケティング発想に基づく方策が鍵を握っていることを主張したかった。相手側の視点に立ち、ニーズに適応していくことが肝要であることを、体験事例を引き強調した次第である。

ピーター・F・ドラッカーは、あらゆる組織に必要で継続的な成長に導く機能は、マーケティングと顧客にとって「新しい価値」を創造するイノベーションであると述べている。誇り高き我が大学の後輩諸君に、マーケティング発想とイノベーション・マインドを胸に、現在及び未来にわたる存分なる活躍を期待し、講座を終えた。真剣な眼差しでの聴講、的を得たレポートや多くの質問からも旺盛な求道心が感じられ、講師として満足感に浸っている。

活性化に向けたマーケティング戦略論は、全国校長会での発表後、文科省教科調査官より「マーケティングの大森」の異名までいただき、他県からの講演要請に応じたが漏れなく好成果の報告を受け、持論に確信を深めている。マーケティングは私のライフワークとなり、これまでのマーケティング発想に基づく取組み結果等を総括し、「学校活性化への第一ステップ人材確保におけるマーケティング戦略～公立高校活性化体験事例をふまえて～」と題して、昨秋、全国商業高等学校長協会機関誌向けに執筆した。現在、県活性化事業「明日の地域づくり」県北委員長として、マーケティング戦略を構築中である。

Message

講師からのメッセージ 11

平成 20 年度講師　岩元　洋（昭和 42 年卒）

平成２０年１２月、「品格ある緑丘人へ」と題して講義を行ったが、講師として手を挙げた後、演題をどうするか悩んだ。私が現役時代に商社で取り組んだ「子会社管理」では現役生にはピンとこないだろうと思い巡らしている内に、大学の教育方針である「実学・語学・品格」の「品格」に焦点を当てることにした。私のサラリーマン生活最後の仕事は監査役だったが、これもいってみれば企業と経営陣の「品格監査」でもあったな、と思い至った次第。

さて若者を相手に「品格」をどのように聴いて貰うか、レジメ作りに悩んだ。「品格」とは？「品格」が無いとはどんな現象をいうのだろう？どうしたら「品格」は磨かれるのか？など結構と奥が深い。何よりも私自身、人様に「品格」を語るような「品格」はあるのだろうか？自問自答の連日だった。

結局、「品格」とは「動物と違って人間らしさを示すこと」という誰かの言葉を借用した。そして、「いやしいことはやらない」「人の迷惑になることはやらない」「ウソはつかない」という三つのプライドを持つことだとも付け加えた。具体的には本を読めということを重点にして、常識を磨け、心地よい日本語を使えなど、やや道徳的な要素をふんだんに織り込んだ。さらに「地球環境問題に関心を持て」として、最近の地球環境の諸問題について統計を用いながら説明し、環境に関心を持つことも「品格」の大きな要素だと説明した。

今回の講義で得た結論は、結局は自分自身への自戒である。人に説教を垂れる前に、自分にはまだまだ至らない点が多々あると悟らされた次第。また重点を置いた環境問題で各種のデータ（温暖化、エネルギー、水、ゴミなど）を調べていく中で、地球は大変な状況に置かれていることを改めて強く知らされ、環境問題への関心をいかに持つかが人間としての「品格」の必須条件のような考えに到った。

『易経』に出てくる「小人は小善を以て益なしとして為さず、小悪を以て傷うなしとして去らざる（こばむ）なり」を紹介しながら、どんな小さなことでもよいことは積極的にやる。反対に、悪いことはどんなに小さなことでもやらない。そういう心構えを持つことが「品格」のキーワードではないか、と力説しながら改めて自分自身への戒めとした次第。

Message

講師からのメッセージ 12

平成 18 年度講師　春田裕明（昭和 50 年卒）

「エバーグリーン講座」開講三〇周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。

私は、開講二〇周年を迎えた平成一八年一〇月一七日、『資産流動化ビジネスについて～「信託」への期待とその展望～』と題して講義をさせて頂きました。

実は、前年の五月にも、神戸大学経営学部の非常勤講師として同じテーマにて学部生に対し、講義を行った経緯があります。

当時、神戸大学経営学部の専門科目である「トップマネジメント講座」を三菱信託銀行（現三菱ＵＦＪ信託銀行）が担当。役員・部長が一三回にわたり講師として出講致しました。その際私も三菱信託銀行の執行役員の職にあったことから講義を受け持った訳です。

次に、私が「エバーグリーン講座」に参加した理由ですが、以下の三点です。第一に、神戸大学学部生から「ファイナンスの新潮流として」高評価を得たこともあり、母校の学生にもぜひ紹介しておきたいと思ったこと。第二に、当時の母校に於ける就職動向について強い懸念を抱いたこと（ バブル後の「失われた時代」が長く続く中、地元志向が強くなり過ぎ、進路を限定・閉ざしてしまっているのではとの声）。第三に、過去の本講座の講義内容を見ると金融セクター出身者による出講が少ない様に思ったこと（ 伝統的に金融セクターへの就職シェアが高いにも関わらず、実務に直結した最新情報等を入手する機会を遺失しているのでは ）が挙げられます。

学生諸君のレポートには、①金融最前線の話②金融セクターへの志望と業界研究③信託銀行への興味等がコメントされ本講座に対し「思った以上に面白い授業であり、後輩たちにも受講を勧めたい」と私の意図を十分理解して頂いたような評価であり講師冥利に尽きる思いがしました。

最後に、私が「エバーグリーン講座」に期待することは次の 3 点です。第 1 に、卒業生による実務に裏付けられた「社会の最新情報（ 知識・知恵 ）」に触れさせるエキサイテイングな機会を与えること。第 2 に、講義を担当する卒業生は、学生にとっては自分の将来像であり、ロールモデル（ 役割手本 ）に触れる機会として役立てること。第 3 に、講師を務める卒業生にとっても普段、実務上の経験を通じて有する知識を、講義の材料とする為に体系化して再検討してみる契機となること。

緑丘会のみなさん、母校への貢献として教壇に立ってみては如何でしょうか。

Message

講師からのメッセージ 13

平成 19 年度講師　平野正喜（昭和 61 年卒）

２００７年１１月に「NGNとBREWに見るインターネットとケータイの現状と将来－Ｗｅｂ２．０時代を超えて大きく進化するネットワークと携帯電話はビジネスをどう変えるか－」というタイトルで登壇させていただいた平野正喜（Ｓ６１＝１９８６年卒）です。２００２年にＩＴ企業から独立して講師となっておりましたので、学生諸君の前で話すことは普段通りのことと考えて挑みましたが、やはり、母校の教壇となると気合が入ってしまうもので、随分と肩に力が入った講義になってしまったことを後から反省しました。また、大人数相手の講義は慣れていましたが、別教室へのカメラ中継のために教壇から動けなかったことがあり、なおさら無駄に力んでしまった覚えがあります。しかし、講義後にいただいた質問や、受講前と受講後のレポートの大半で非常にしっかりしたリアクションを貰えたことに感動しました。大学生の皆さんにとって講義は毎日続くルーチンかもしれませんが、本来、講義は講師と受講者の一期一会です。このことはＯＢが腕によりをかけて準備するエバーグリーン講座において特に顕著でしょう。少しでもマンネリを感じた時に、新鮮な気持ちを忘れずに講義に取り組む姿勢を思い出す機会にしてもらえたらと思います。そして、私が選んだテーマであるモバイルテクノロジーは今もどんどん進化しています。いつかどこかで、このテーマの続きを話し合える機会が来ることを楽しみにしています。

Message

講師からのメッセージ 14

平成 20 年度 22 年度講師　八尾稔啓（昭和 56 年卒）

この講座の趣旨や、取り組みについては大変素晴らしいものと考えております。今後もぜひ継続して頂きますよう祈ります。また、お世話係の方々、ご担当の方々におかれましては深く敬意を表します。いつもありがとうございます。実施方法についても、以前と比べて、事前のアンケートや内容など改善されてきているように感じます。以下、今後の取り組みとして、ご検討頂けたらと思うことを簡単に述べさせていただきます。

1．講座の実施時間が、平日の昼間の時間帯なので、中々社会人として調整することがきついのではないか。特に若い卒業生にとっては、ハードルが高いと思われます。

2．講座の終了後、以前はそのまま学長室での授賞式のような形でした。最近出た時には、違う教室でＯＢと関心ある学生のワークショップのような形がありました。私のように、特に内地からくる場合、どうせ小樽に行くならじっくりと学生に向き合えるこのような形が良いと感じています。個人的には、私は、勝手に学生を集めて講義をして、その後花園での懇親会もしておりました。

3．最近の講師選定や内容などはあまり存じおらずに失礼しますが、15 回の内例えば、3−5 回ぐらいずつテーマを決めて、違うお立場からの話を聴くなどという形のありうるかと存じます。テーマ性を明確に出す方が、くみ取り易い事もあるかと存じます。

4．今まで講座担当をしている講師の交流会も、今回を機に立ち上げたらどうでしょうか？

5．同じに 2 コマ取るということは不可能なのでしょうか？同じ日に、違う講師をお二人とか・・・。講師の交流が出来そうな気も・・・。

6．個人的に、私のように独立したてのＯＢには、できる範囲で是非力を貸して頂きたい。当初何度申し込んでも、10 年ぐらい完全無視された経験がございます。特に、独立後母校で講演したという実績は、勇気と誇りを得ると同時に、営業になります。

7．何年かに一回は、エバーグリーン講座を通しての、現役とＯＢ交流会なんかも面白いのでは。特に小樽の町との交流も含めて。最近の学生は小樽を知らなさすぎるという実感がございます。

Message

講師からのメッセージ 15

平成 21 年度講師　中井令（平成元年卒）

平成２１年度の冬にこの講座でお話しをさせていただきました。受講生のみなさん、女子が半分近くいらしてビックリ！時代の流れを感じました。事前アンケートで一番多かった質問が「なぜ商学部なのにイラストレーター（または絵本作家）なんですか？」でした。そのお気持ち、大変よくわかります。私自身も学生だった頃、小樽商大を出てまさか絵を描く仕事につくとは夢にも思っていませんでした。ですが、社会人になって色々な経験を重ねていくうちに、自分の１番のプロデューサーは自身であるということに気がついたのです。

まず、自身を商品として考えてみるといいのです。

そして自分はその商品を売る会社の社長。

そうすると、授業がとたんに面白くなってきます。

例えば、プロダクト・ライフサイクルに当てはめて人生設計をしてみたり、

商業心理学では、履歴書を商品のキャッチコピー、面接官を顧客に当てはめて就職活動に応用してみたり etc.

原価計算も簿記も自身が商品と思えば必要不可欠です。

つまりどんな職業につこうと、この大学で学んだことはほとんど関係してくるということが分かってきます。そのことを学生時代に気がついていれば、もっと熱心に授業を受けたのにーっ（>o<）！と、ちょっぴり悔やんだりもしますが、母校のみなさまがプロダクト・ポートフォリオ・マネジメントでいうところの花形製品としてご活躍しますよう心からお祈り申し上げます。

Message

講師からのメッセージ 16

平成 22 年度講師　鷹栖 博（昭和 54 年卒）

数ある職業の中でも、SE という職業ほど、幅が広く、奥行きが深く、どこまでやってもゴールが見えず、気が付いたら人生のゴールを求めているという、稀な職業ではないかと思います。何がそうさせているかというと、今や、業種・業界に資する IT、経営・事業に資する IT、業務・事務に資する IT を SE が創造していく、SE は経営・事業を理解していないといけない、SE は業務・事務を理解していないとできない・・・、IT だけ知っていても世のため人のためにはならないという気持ちが SE の心を揺さぶるのです。

私は、2010 年のエバーグリーン講座で「SE と会計― IFRS で会計ビジネスを変える―」と題した講義をさせて頂きました。縁あって私は SE として IT の適用を広く会計の視点から、いろいろな業種の財務経理業務、販売管理業務、生産管理業務、原価管理業務、人事総務業務、マーケティング業務、ファイナンス業務、経営企画・経営管理業務などを見てきました。企業とは何か、経営とは何か、なぜそのような業務があるのか、その中で人はどう動いているのかなど、興味津々、無我夢中で自分の中、周りの人の中に取り込んでいきました。それが、お客様の経営・業務問題に対する解決策提示、そして有効な IT の活用も提示し、経営改革・業務改革提案型のビジネスに昇華しました。まだまだ自分のゴールは見つけられないのですが、このようなビジネスは苦労もあるけど面白い！

これは正しく本学の得意分野であり、これからの学生諸氏が大活躍できる領域と確信するところであります。私の先輩方で当時の IT ベンダに就職した小樽商大 OB の SE/ 営業の方々の多くが経営に携わっているということは、上記のことと無関係ではないと思います。

最後に、SE とは「学者であり、医者であり、易者であり、芸者であり、役者であり、そして技術者である」という言葉を贈り、学生諸氏へのメッセージとしたいと思います。

小樽商大生の皆さん、志を持って世に出て、社会に貢献しようではありませんか！

Message

講師からのメッセージ 17

平成 24 年度講師　井上周司（昭和 42 年卒）

平成 24 年 10 月 31 日に『「監査役の役割」―企業の健全な成長に資するために―』という演題で講演いたしました。

監査役を目差して企業に入る学生はいないのではないかと思いましたが、当時オリンパスと大王製紙で発生した企業不祥事が世間を騒がせている時であり、企業が不祥事の発生を防御する上で監査役の役割が如何に重要かを少しでも学生に分かって貰いたいという思いから上記のような演題で話をさせていただきました。

事前にレジメを送ったところ 235 名の学生から沢山の質問が届き、驚くと同時に嬉しくなりました。話しをする者としては大変勇気づけられるものでした。エバーグリーン講座をご担当されている教授のご配慮に今でも感謝しています。

講演の際は、出来るだけ分かり易い言葉で話すように努めた積りですが、会社法の条文を説明する箇所などは、理解を深めるためにもっと具体的な説明方法をとるべきではなかったかと反省しています。然し、200 名を超える学生が最後まで熱心に耳を傾ける姿と、講演が終わった後の拍手には感激しました。

その後、Facebook に学生が纏めた私の講演内容が載りましたがよく理解してくれていることが分かり再び嬉しい気持ちとなりました。聴講された学生が、商大卒業後企業に入って活躍する中で不祥事の渦中に巻き込まれないために企業倫理を守る感性を磨き続けるよう願っております。

Message

講師からのメッセージ 18

平成 24 年度講師　滝　浩之（昭和 53 年卒）

私は 2013 年 1 月に講座を担当させていただきました。大教室が満員になるくらいの大勢の学生に受けてもらい、熱気にあふれた雰囲気の中で講座を行うことができ、大変うれしく感じました。事務局の方々もご支援ありがとうございました。

このエバーグリーン講座は 30 年続いている先輩と学生の架け橋のような講座であると思います。小樽商大の DNA をまさに若い世代に継承している講座です。

多く先輩方が社会で活躍しているのはご存じの通りです。学生はより多くの知識や情報を得るために、この講座を積極的に活用していただきたいと思います。

これから社会に飛び立つに当たり、この講座を通して先輩の活躍を知り、仕事内容や仕事への心構えを知り、社会の一端を知ることができます。忙しい中、小樽まで来て講座を担当する先輩方は商大が好きであり、学生の皆さんに期待しているから、応援するのです。

30 年の一つの区切りを迎えるエバーグリーン講座。今後は、開講 50 年を目指し、一層充実した講座になるよう期待しています。

Message

講師からのメッセージ 19

平成 26 年度講師　尾形　毅（平成元年卒）

母校のエバーグリーン講座が開講 30 周年を迎えられたことに、心から祝意と感謝を申し上げます。

私は、東日本大震災の被災経験を語り継ぐため、震災の翌年（平成 24 年）から3年にわたり母校の教壇に招かれました。最初の2年は環境科学bの特別講義、3年目はエバーグリーン講座でした。

この講義では、「実際に私が直面した津波の被災現場」、「リスク管理の重要性」、「復興の進捗」、この 3 点について写真映像を使って解説しました。受講生の関心は高く、講義室は満員となりました。ピリッとした緊張感が漂い、後輩の皆さんが真摯な態度で受講してくれたことを今でも感謝しています。

後日、講義の様子を勤務先の社内広報誌にも執筆しました。ともに被災し苦労した当社役職員からも大きな反響があり、自分のことのように喜んでくれました。

ただ、少々ほろ苦い記憶も残っています。大学によると 3 年間で私の講義を重複受講した学生は殆んどいないようでしたが、3 年目になると、受講者の表情や姿勢から、震災への関心が次第に薄れていることを感じました。私の工夫不足も一因だと思うのですが、被災地以外では早くも震災の記憶が風化している現実に直面し、戸惑いを感じたものです。

さて、エバーグリーン講座では、平成 24 年から仙台地区にも講師推薦枠を設けていただいています。これまで私を含め 6 名の同窓生が、仙台地区から講師を務めました。

札幌や東京以外の同窓生にも講義のチャンスが出来たことは、仙台の緑丘会活動へ若手同窓生の参加を促すうえでも、大きなアドバンテージとなっています。

今後は、このチャンスを山形や福島など東北隣県の若手同窓生にも広げ、エバーグリーン講座の充実に貢献したいと考えています。

Message

講師からのメッセージ 20

平成 28 年度講師　柴田康幸（平成 14 年卒）

エバーグリーン講座開講 30 周年、おめでとうございます。30 年間で 6,000 人もの受講生に、延べ 350 人もの講師の方々が関わるほどの講座に、講師の 1 人として携わらせていただけたことは非常に光栄なことと思います。

私は平成 14 年に卒業したのですが、実は在学中にエバーグリーン講座を受講することなく卒業してしまいました。講師として初めて講座に触れたのですが、その時に初めて読んだ過去講座のアーカイブや様々な資料、それに講義当日の講義風景や学生の熱量から、「在学中の 4 年間ずっと受講していたかったな」と感じさせられる講座でした。受講していなかったことは、卒業後 15 年経ってから初めて気付いた失敗と言えそうです。

私の話が参考になった受講生は決して多くはないかと思いますし、多くの参考になるような話がまだできない、社会人としての道のりも半分にも至っていない段階で登壇させて頂けたことは、自分にとってはありがたいことであったと同時に、「もっと社会のため・人のための仕事をしなければ」という気持ちにもなった、ある種の悔しさや刺激を受ける機会となりました。

もしまた次に講師の機会をいただけることがあれば、それまでにもっと多くの人や社会に貢献する仕事を行い、そうした経験を受講生に届けられればと思いますし、再び講師の依頼をいただけるようなキャリアを歩んでいきたいと思います。

末筆になりましたが、日々、講座開講に向けてご尽力されている実行委員会および緑丘会の皆様、そして講師として推薦して下さり、公私ともに大変お世話になっております仙台緑丘会の先輩方に、心より厚く御礼申し上げます。

Message

講師からのメッセージ 21

平成 28 年度講師　太田研一（昭和 54 年卒）

エバーグリーン講座の講師を拝命する機会を持たせて頂きましたが、その経験を通じ講座の将来・あるべき姿について思うところを述べさせて頂きたいと思います。まず、我が母校である小樽商科大学について冷静に評価すると、歴史があるとは言うものの北海道の田舎街の二流もしくは三流大学というのが、私が在学していた４０年前も現在も世間の評価ではないでしょうか。

私の時代と同じポジションから社会に出てゆく我が後輩（学生）達に、今後実社会で待ち受ける様々な事案に対処する上での一助を提供する意味において、この「エバーグリーン講座」は非常に価値ある試みだと考えます。というのも、背景を同じくする先輩連が何かに向かって戦い・負け・勝利して得た知識・経験を直に聞くことができる仕組みだからです。

しかしながら、数多くの先輩を都度講師として迎えるという特性上、ともすれば講義が系統だったものとならない、内容が日経新聞の「私の履歴書」的なものになってしまう等の恐れがあり、講座の品質の維持・向上を難しくしているのではないかと危惧してしまいます。

先輩が発する貴重なメッセージを取捨選択をするのは学生自身であるとしても、期を通した講義内容の体系化等この講座を受講する学生がより多く受容できる仕組みを構築してゆくことが望まれます。運営に携わる方々にはさらなるご負担を掛けることになることを承知の上でお願いしたいところです。「エバーグリーン講座」が学生にとってより価値あるものとなり、３０年後･４０年後より多くの講師を生み出せるよう。

Message

講師からのメッセージ 22

平成 28 年度講師　堤千夏子（昭和 63 年卒）

一番初めにこの講座のお話をいただいたのは、まだ 20 代の若輩者でした。とても学生の前でお話する勇気がなく、中身のあるお話ができないと思い、お断りをしました。次にお話を頂いた時は、お話をいただいた直後に病に倒れて、ご迷惑をおかけしてしまいました。

翌年となる昨年に再度お話を頂戴し、お引き受けさせていただきました。素晴らしい先輩方が数多くいらっしゃる我が大学。私なりに後輩のみなさんに少しでもお役に立てることがあればと思い、そしてまたそれまでにお話して来られた先輩方と、少し切り口を変えてお話してみたいと考えて、お題を選びました。

講義している時は、学生の皆さんの表情やリアクションが掴めず、私が現役の学生時代とは、また一味も二味も違った大学生だと感じました。しかしながら、講義後に大津先生からお送りいただいたレポートを読み、かなり詳細まで聞き込んでくれていて、嬉しく思いました。

30 年前と時代は全く違います。コミュニケーションツールが、携帯であり、自分の意思を表現するのが、SNS であり、言葉でのそして肌の温かさが伝わるようなコミュニケーションが当たり前となっています。これがいいとか悪いとかではなく、直接声を発して、それを聞いて、言葉を返す…その何気ないことが、心のキャッチボールとなり、本音で話ができる関係を育んでいけるのだと思います。便利が故に薄くなりつつある肌感を感じられる先輩方のお話を多角的に聞き続け、社会に出てから諸先輩方のお話を思い出して役に立てて欲しいと思います。

また、講義した卒業生と講義を聞いた学生とが、卒業後にも繋がりを持てるような、悩みを相談できるような仕組みづくりが確立されるといいなと思っています。更に、卒業生も聞けるように、ID や PW でログインして動画を見ることができるような仕組みが欲しいです。非常に貴重なお話ばかりです。貴重な大学の財産です。

「小樽商科大学のキャリア教育とエバーグリーン講座のいま」

国立大学法人小樽商科大学　商学部社会情報学科　准教授
兼グローカル戦略推進センター教育支援部門副部門長
学長特別補佐（アクティブ・ラーニング開発担当）

大津　晶

○はじめに

小樽商科大学は平成 18 年に教育開発センター（現 グローカル戦略推進センター教育支援部門）にキャリア教育開発の組織を設置して本格的なキャリア教育を開始し、今日に到る 10 年余りのあいだに折々の社会経済や新卒採用の情勢に応じて種々の取り組みを進めて参りました。大学等の高等教育機関におけるキャリア教育が義務化されて以降、多くの大学が学生のキャリア形成支援を導入していますが、キャリアセンター等による限定的な就職活動支援にとどまる事例が多いなか、本学においては建学以来掲げてきた建学の精神である「実学実践」の下に、教育開発センター（当時）を中心とした教育改善の柱としてキャリア教育を位置づけ「キャリアデザイン 10 年支援プログラム」を推進して参りました。

本学のキャリア教育の基本方針である「学生を徹底的に鍛え、グローカルに活躍するタフな人材を育成する」という考え方は、その後アクティブ・ラーニングの全学的取り組みに昇華・展開され、現在は本学の教育上のミッションとして位置づけられるまでになっています。さらに「アクティブ・ラーニング」は初中等教育の学習指導要領に本格的に導入されることが決まり、アクティブ・ラーニング開発において先端に位置する本学には幅広くその普及を推し進める先導的役割が強く期待されております。

このたび開講 30 周年を迎えた「エバーグリーン講座」は、今日では本学のキャリア教育およびアクティブ・ラーニングの中で重要な位置を占める正課科目となっており、同窓会との緊密な連携によるキャリア教育として本学の特徴的な実学教育のひとつとして欠かせないものとなっております。

このような大学の状況および時代背景の変化も踏まえながら、エバーグリーン講座をより良いものとすべく、実行委員会と意見を交わしながら大小さまざまな改善や工夫を重ねております。講師の選定については、緑丘会の地方支部や女性部会、ＯＢＳ会からの推薦枠を設けたり、Ｕ３０（２０歳代の若手３名によるパネルディスカッション形式）の回を実施したりするなど、多様な属性や経歴を有する講師をお招きすることで学生に対して幅広く複線的なキャリア観を示すことを重視しています。またオムニバス形式の講義内容の理解を深めるための事前レポートの導入や講義終了後に講師と現役学生の懇談の場を設け交流を深めております。

以下は、これらの工夫を経て「いまエバーグリーン講座は現役の学生たち何を教えているのか」について、そのエッセンスをご紹介させていただくために、最近 4 年間（H25～H28）のエバーグリーン講座講義録の中から講師の印象的なメッセージを選びいくつかのテーマで整理をしてみたものです。

○「会社」とは何か

「緑丘人の社会人基礎力」を学ぶにあたり、まずはエバーグリーン講座で登壇された卒業生の言葉から「会社」と「仕事」の本質について理解を深めておこう。

26 年間にわたる銀行員時代にさまざまな経営者や企業人と接し、現在は電設資材の総合商社の役員として経営に参画している櫻庭秀和さん（昭和 52 年卒／ミツワ電機（株）取締役）が就職したのは三井銀行（現・三井住友銀行）だった。都市銀行が大きく再編される時代の中で大手商社からオーナー経営者などとの幅広い人脈を築いた櫻庭さんは 49 歳の時にミツワ電機に移る。

桜庭さんの豊富な経験に基づいた講義内容から「会社」というものの基礎知識を整理してみる。

まず日本には約 382 万の会社がありそのほとんどが中小企業であることを知っておきたい。中小企業とは、卸売業では資本金が１億円以下、従業員 100 人以下。小売業やサービス業では資本金５千万円、従業員 50 人以下が中小企業と分類される。また会社法での定義では、資本金５億円以上、あるいは負債が 200 億円以上ある会社が大企業だ。これらの定義に従えば日本には大企業１万１千社に対して中小企業がおよそ 380 万 9 千社存在する。つまり日本の会社の 99.7%は中小企業ということになる。

大企業はさらに証券取引所で株式を公開している上場会社 3,531 社（当時）と公開していない非上場会社に分類できる。上場会社のメリットとしては、多くの投資家から返済義務のない資金を調達できること。社会的な信用も高くなる。デメリットはまず、財務状況を公開する必要があり、経営を株主に監視されることがあげられるだろう。四半期ごとに業績を公開する必要があることから、目先の業績を追わざるを得なくなり長期的な視点に立った経営がしづらくなる。同じように非上場会社のメリットとデメリットを考えてみよう。メリットは、株主が限られていて長期的な視野で経営ができること。そして財務状況などの公開義務がなく、さらには、買収されるリスクもない。一方でデメリットとしては、社会的信用や知名度が上場会社に比べると低くなるし、株式市場から調達できないので、資金調達はほぼ銀行借入に限られてしまう。

つぎに同族経営と非同族経営という分類から企業を見てみよう。同族経営とは、特定の親族などが支配・経営する組織を指す。支配とは、創業家の一族が相当数の株式を所有したり、あるいは経営において実質的に主導権を握っていることだ。同族経営のメリットは、まず株式買収のリスクが少ないことだろう。そして長期的な視点で経営を進めることができる。さらに、後継者の育成を計画的に進められる。創業者の理念や思い、哲学の言葉をしっかりと残し続けることができるのだ。同族経営のデメリットはなんだろう。後継が長男に限定されると、経営能力のない者が経営者となるリスクが高まってしまう。そして会社や資産の私物化、公私混同を招くことがある。またトップのまわりにイエスマンが多くなって、問題が起きても表面化しないことにつながる。ミツワ電機もまた、メリットとデメリットを併せ持った同族経営企業だ。

さて、それでは「良い会社」とはいったい何か？銀行での融資業務と商社での資金調達業務の双方の経験を踏まえ桜庭さんが示した「銀行はどんな企業に融資するのか」という基準が参考になる。

・公共性：健全な社会の発展に役立つもの
・安全性：確実に回収できるもの
・収益性：リスクに見合った適正利潤を確保すること
・成長性：企業の健全な成長に資する融資であること
・流動性：反復・継続して行われ資金が流動的に回転すること

これらは、つまるところ企業は何のために存在するのか、という問いに根ざすものだ。企業の存在価値とは、まず雇用者に給与を払い、そして納税を行うことにある。企業は社会の公器として存続しつづけなければならない。株主への配当はそのあとに位置づけられるもので、損益計算書の順番を見ても明らかだ、と櫻庭さんは強調された。

他方、近年「企業は株主のもの」という考え方が主流になりつつあり、経営者は株主から高い配当や株価の上昇を求められている。そのための代表的な指標が株主による資金である自己資本に対してどれだけのリ

ターン（当期純利益）が生み出されているかを示すROE（自己資本利益率）だ。しかしながら、桜庭さんはこの考えに警鐘を鳴らす。

「ROEには、企業の安全性の指標である自己資本比率と相反する面があり、私はROEばかりを重視する見方には違和感を持っています。非上場企業であるミツワ電機は、自己資本比率を重視しています」

ROEを上げろという株主からの圧力は、借り入れを増やしてでも利益を上げろということにつながり、そうすると自己資本比率が下がり、経営の持続的な安定性は下がってしまう。「いまの経済の主流はこちらですが、しかし企業は社会の公器であるという考え方からすると、株主の私欲に根ざした志向である ROE 重視の考えに安易に首肯することはできません」

松下電器産業株式会社（現パナソニック株式会社）で長くキャリアを積んだ渡部猛さん（昭和46年卒）は、“経営の神様” 松下幸之助の言葉を引いて講義をされた。

松下幸之助は、「企業は社会の公器」であると考えた。私利私欲にとらわれてはならないのだ、と。そして、「物事の実相を見る」ことを重視した。一方的な主観や先入観にしばられず、物事のありのままの姿を見ることが大切なのだ。さらに、「融通無碍（ゆうずうむげ）」の精神を重視した。見方や考え方は、時に自在に変えていくことが必要なのだ。「ピンチこそチャンスなんだという認識も、幸之助が繰り返し唱えたことでした。創業当初から幸之助はこう言いました。松下電器は何を作るところかとたずねられたら、人をつくるところです。あわせて電気器具もつくっております。とお答えしなさい、と。どんなに資本やすばらしい技術があっても、それを使いこなす人間たちがお粗末であったなら、何もできない。社会の役に立つという志や使命感が、人間を強くして成長させる。そうした人間が集まってこそ本当に価値のある物づくりができるのだ、という信念です」

○企業という組織

企業の平均寿命は 30 年前後とも言われ、目まぐるしく変化するビジネス環境にあっては「変化しないこと自体が最大のリスク」といった指摘すらある。エバーグリーン講座の講師は、いかなる名門企業であっても変革を恐れては生き残ることができない、と異口同音に語る。

植木さん（昭和 51 年卒）は本学卒業後にキリンビール（株）に入社。2009 年にはキリンビール初の M&A であるメルシャン（株）代表取締役社長・CEO に就任。キリンマーチャンダイジング（株）を経て 2011 年、グループ再編成による新会社キリンビールマーケティング（株）代表取締役社長に就任した。同社は、顧客接点におけるマーケティングを強化するためにふたつの会社を統合して設立された営業の新会社で、売上高・営業利益ともにキリングループ内で最大だ。全売上中、海外での売上が3割を占めている。従業員は雇用形態も多岐にわたる約 3500 名。この多様性を上手く機能させていかないと企業は動かない。同社がまず取り組んだのは、従来は縦割りだった組織を横のつながりで結びつけることだった。植木さんは、ひとつのビジョンを共有するために、全従業員に創業の志と方針をメッセージした。その上で人材の育成と組織力の強化に取り組む。酒類を含む総合飲料業界の目まぐるしい進化と変化は、年を追ってさらに多様化複雑化している。しかし、と植木さんは言う。

「どんなに企業戦略が複雑に高度化しても組織で働くのは人です。現場の仕事が複雑で高度のままでは動かない。となると明確なビジョンを仲間と共有できるリーダーを育て、組織内のコミュニケーションを活発にすることがなにより重要になってくるわけです」

植木さんは、企業の底力は人間の力にほかならないと力説された。そこで大切なのは、上からの動機づけ

ではなく、自分たちで考え、自分たちの中からエンジンの回転数を上げていくこと。「仕事というのは仲間のために頑張るほうがより大きなパワーになります。組織で言えば、まずひとりひとりにしっかりした力があり、それが仲間同士の力を受けてさらに大きな力に束ねられていくのです」

○企業の社会的責任

先進諸国では CSR（企業の社会的責任）という理念が定着し、我が国においても震災などを契機として熱心に CSR に取り組む企業が増加しつつある。労働人口の減少や過重労働などつぎつぎと新たな経営課題も生じ、これから社会に出る大学生にとって企業経営と CSR の関係を理解しておくことは必須であるとも言えよう。CSR 経営をリードする（株）クボタで活躍する渡辺玉範さん（昭和 52 年卒）の講義からその実態を探ってみたい。

本学卒業と同時に久保田鉄工株式会社（現・クボタ）に入社した渡辺さんは、人事や総務、法務といった間接部門で 20 数年、営業などの直接部門で 10 数年のキャリアを積み、2011 年からクボタワークスというグループ会社の社長を務め、2013 年からは同じくクボタサンベジファームの社長を兼務している。この２社は、クボタが障がい者雇用の面で CSR を進めていくために設立した特例子会社である。

クボタグループが大阪で創業したのは 1890（明治 23）年。創業者は水道管の安価な国産化をはじめて実現させた久保田権四郎だ。その後昭和 20 年代には農業機械の分野にも進出して、日本ではじめて耕耘機を作った。それからトラクターや田植機、コンバインなどを開発して、高度成長期に大きく売り上げを伸ばしていく。水道管と農業機械の両分野とも、国内でナンバーワンのシェアを持っていて、さらにいまではこのふたつの分野で、世界約 110 カ国で生産販売を展開している。

クボタの CSR には、スポーツや教育支援、災害復興支援など、6つの重点カテゴリーが設定されており、渡辺さんは本来の事業ドメインである「『食糧・水・環境』分野の課題解決への取り組み」と、社会の「多様性の支援」について解説された。人々が生きていくのに決して欠かすことができない食料・水・環境分野における社会貢献活動を、クボタでは「クボタ e プロジェクト」と名づけている。特に力を入れているのが、耕作放棄地の再生支援だ。これは CSR の３つの領域のうちの３番目。企業の事業領域周辺にある社会問題の解決につながる。

日本の農家数は、ここ 20 年間ほどで 414 万戸から 210 万戸ほどに激減した。平均年齢も７歳ほど上がっていまは 66 歳くらい。農業人口がどんどん減ってしまい高齢化も進む。必然的に耕作放棄地が急増した。いまでは、かつての農地のうち、富山県と同じくらいの面積（42.3 万 ha）が耕作されずに放棄されているという。「クボタでは 2008 年から、耕作放棄地の再生をめざしている地域を、農業機械の提供などによって支援する取り組みをはじめました。私は CSR の企画部長としてこの事業の最前線にいました。この取り組みはいまでは全国で 35 カ所くらいの地域に広がっています。各地のクボタのディーラーが機械を提供しています」

例えば新潟県の長岡では、再生した水田に菜種やゴマ、大豆などの特産品を栽培している。この地域は「ホタルの舞う里」という取り組みを行っているので、農薬は使わない。「農家の方とディーラーの所長らによる討論会を開催して、私は司会を務めたことがありました。このとき所長がとても印象的なことを言いました。取り組みによって、社員がよりいきいきと自信をもって働いてくれるようになった、というのです。つまり自分の会社が地域のためにこんなに意義のあることをしている。それが良い仕事をする強い動機づけになってきた、と。理論や理屈からではなく、CSR の意味を農業の現場で私も実感することができました」

渡辺さんは CSR の本質について、単に企業の社会貢献活動と捉えるのは理解が浅いと注意を促した。企

業は、日々の事業活動において従業員や顧客、取引先、仕入先、消費者、株主、地域住民、自治体など、実にさまざまな利害関係者（ステークホルダー）と関わっている。彼らと積極的に対話を重ねて、互いがメリットを分かち合う良好な関係を保ちながら、経営を持続的に発展させていくことをめざす活動がCSRだ。

CSRは大きく3つの領域に分かれる。一つは「企業倫理・社会責任」の領域。これは社会に迷惑をかけない、隠し事をしない、従業員をちゃんと処遇するといった、いわば当たり前のことを当たり前にすることだが、企業はときにこれを守り切れない。企業の不祥事がニュースとなることが珍しくないことからもそれがわかるだろう。二つ目は「事業活動を通じた社会革新」の領域。近年ではLED電球や電気自動車などに見られるように、すぐれた製品によって社会を革新していくことだ。例えばトヨタ自動車は、2050 年までに従来型のガソリン車を全廃するビジョンを掲げている。このことによって、社会全体が大きく革新されていくにちがいない。三つ目は「社会貢献活動」の領域。企業が植樹活動やアフリカで井戸を掘る支援をするといった事業だ。これら3つのうちでいちばん重要なのは、なんといっても1番目の企業倫理や社会責任になる。それがちゃんと果たせていてはじめて、2番目、3番目の領域での活動が価値を持つのだ。不正をしている企業が、たとえいかに革新的な技術を産みだしてみても、あるいは環境保全に取り組んだとしても、社会の信頼や信用は得る資格は無い。

○企業における人事の視点

企業経営における資源がヒト・モノ・カネ（と情報）であることは本学の学生なら知らない者はいないだろう。企業経営における人的資源管理の重要性を説いたのは、人事スペシャリストとして（株）東芝に始まり欧米系の企業4社を渡り歩いた太田研一さん（昭和 54 年卒）だ。ともすれば企業の人事セクションとは、採用や人事の事務的な管理を担う部門と思われるかもしれないが、人事が担う役割はそれに留まらないことを示された。

「人事の仕事は、単に社員を管理することではありません。経営針路に則って企業組織全体のアウトプットを最大化するために、人的リソースを揃えてさまざまに組み合わせ、各人を成長させていく。そのための制度設計を行うのです」

企業が目的に向かって組織を動かすに当たっては、ふたつのやり方がある。「リーダーシップ」と「マネージメント」だ。定義すると、「マネージメント」とは、「現状の諸事に対処すること」。「リーダーシップ」とは、「環境の変化を事前に予測して変革を推進、対処すること」。だから組織の長となるマネージャーとリーダーでは行動の仕方がちがってくる。マネージャーは、目標を実現するための合理的なプランをつくって行動し、問題が起こった場合は事態を収拾する。一方でリーダーは将来のビジョンを見据え、そこに向かうようメンバーの同意を取り付ける。また、組織ひとりひとりのモチベーションを高める。リーダーのリーダーシップは、つねに現状を問いなおしながらオリジナルの革新を行い、人を重視して社員同士の信頼関係を強くして目的を達成する。

「縦軸にリーダーシップ能力、横軸にマネージメント能力を据えてマトリックス図をつくり、いろんな企業や組織を位置づけてみると面白いでしょう。たとえばベンチャー企業ならリーダーシップが強く、マネージメントが弱い。またマネージメントが強い官僚的な企業は、時代の変化に対応しづらい。あるいは、リーダーシップ能力とマネージメント能力、これがともに低ければ、倒産は時間の問題です。リーダーシップが重視される組織では、指示待ち人間は要りません。ひとりでも、そして仲間とでも、自発的に考えて最適な行動ができる人間が求められます」

会社や組織の原理原則を理解した後に、幅広い業種・職種で活躍する本学卒業生の多彩なキャリアから「仕事とはなにか」という問いに対する答えの手がかりを導き、働く上での心構えを参考にしてみることにしよう。

○仕事とはなにか

宮城県に基盤を置く七十七銀行に勤める堀内康平さん（平成 8 年卒）は、卒業して 20 年ほどビジネス社会に身を置きながら、仕事についてさまざまに考えをめぐらせてきた。

「仕事」とは何だろう。辞書で仕事と引くと、4つくらいの意味が載っている。ひとつめは、「何かを作り出す、または成し遂げるための行動」。勉強や部活もこれに当てはまるだろう。ふたつめは、「生計を立てる手段として従事する事柄、職業」。これが一般に考えられる仕事だ。三つめは、「したこと。行動の結果。業績」。良い働きをしたときに「グッジョブ（good job）！」というのがこれに当たる。そして最後に、「悪いことをしたりたくらんだりすること。しわざ。所業」。こうしてみると、つまりどんな人でも、毎日仕事漬けであることがわかる。生きていくことは、仕事を重ねていくことにほかならないのだ。

堀内さんは、さらに職業としての「仕事」を分解してみる。それはまず、サラリーマンと自営業に分けられるだろう。サラリーマンは毎月一定の給料を得て、安定して暮らせる。ローンを組むときでも会社の信用があるし、病欠でも同僚がフォローしてくれる。厚生年金や税金の手続きも会社がやってくれる。自分が社会の矢面に立つことはあまりなく、社会的責任は限定的だ。一方で、組織のルールに従わなければならず、全体に自由度は低い。これが自営業だとどうだろう。実力があれば、自分の好きなことをやって生計が立つ。すべて自己責任だから、いやな上司も理不尽な人間関係とも無縁。誰からも文句を言われない（ビジネス上で顧客などとの軋轢はあったとしても）。しかし一方で、その仕事が明日どうなるか、世の中の動きや病気などによって売り上げが急激に落ちてしまうかもしれない。抱えるリスクは、企業組織にいる人とは比べものにならない。

サラリーマンと自営業者、それぞれの延長上にあるのが社長業だ。サラリーマンなら、競争を勝ち抜いて到達する頂点。自営業の場合は、事業を拡大していって人も雇用して法人化することで社長になります。

「仕事でたくさんの社長と仕事をさせていただきましたが、成功している社長が日々こなしている仕事の量と質は、サラリーマンや個人事業主の比ではありません。情報収集も徹底していて、つねに向上心をもって、事業への自問自答を繰り返しています。ある社長に社長業とはどういうものですかと聞いたとき、その方は『下りのエスカレーターを上ってるようなものだよ』とおっしゃいました。ちょっとでも立ち止まると下がってしまうのです」

○社会（仕事）は不条理だという前提

上場企業を3つ経験して最終的に起業の道に踏み出したのが、三上淳さん（平成8年卒／かもめソリューションズ代表）。現在札幌でビジネスコーチングやビジネススキルのトレーニングを事業化し OBS にも通っている。三上さんは卒業後まずエネルギー系の総合商社に入り、石油の輸入やガソリンスタンドを経営する子会社を設立する仕事に取り組んだ。それからゲームが好きだったこともあり、20 代の終わりにゲーム会社に転職。東京ゲームショーなどで企業ブースを企画したり、ゲームキャラクターのフィギュアをデザインする仕事を行った。その後3社目となるリクルートの人材育成部門に転職してコンサルタントとして働く中で、人材育成のマネージメントなどを深く実践的に学ぶ。しかし、大手企業にいると、おのずと取引先も大企業が多くなることが物足りなかった。北海道で生まれ育った三上さんは、学んだことをもっと北海道の人に伝えたい。北海道の人の働く力を高めていきたい、と思うようになったのだ。そうして立ち上げたのが「かもめソリューションズ」だった。「部下が育たないのだがどうしたらいいか」、「営業成績を上げるためには」、といった企業の

業相談にのりながら研修を行い、官公庁や定時制の高校でキャリア教育の話もしている。

3つの会社では、失敗も成功もいろいろな経験を積んだ。商社時代、この人は信用できると思って採用した人に店を任せると、売上金を持って逃げられたことがあった。2社目のゲーム会社ではプロモーションを担当したが、夜中に仕事をするクリエイターの仕事を待っていて2、3日の徹夜も珍しくなかった。昼間は本来の仕事があるから、寝る時間がない。そうやってある程度社会で経験も積んで自信を持って入った3社目では、自分より10歳以上年下の頭の切れる優秀な人材がごろごろいて、すっかり自信を失ってしまった。

「ゲームのモンスターハンターのように、社会は、果てしなく広がる 100%不条理な世界でもあります。でもあきらめたら次の仕事はまわって来ません」ビジネスでは、ひとりで完結する仕事というものはない。システム開発やデザイナーなどもチームワークが重要でいろいろな人と関わりながら仕事をする。就活生には、企画やデザインに関わる仕事をしたいと考える人も少なくないが、一見華やかに見えるそうした世界も、現実はきわめて地味な仕事の積み重ねからできているのだ。三上さんは、仕事をめぐる解剖学者の養老孟司の言葉に深く共感する。「仕事というのは、社会に空いた穴である。道の穴をそのまま放っておくと、誰かが転んで困るからそこを埋めてみる。とにかく目の前の穴を埋めるのが仕事というものであって、自分に合った穴が開いているはずがない」、というものだ。

「自己分析を重視しすぎると、社会に出て面倒なことになります。自己分析とは、雇ってくれる人やお客様に私はこういう人間ですと知ってもらうための手段であって、自分のやりたいことを探すための手段ではないのです」

三上さんの言葉を借りれば「社会は不条理」だということを前提にした方が良いさそうだ。ときに人はあっという間に理屈では解決できない状況に追い込まれる。しかしそういう場面でこそ、自分はどういう人間なのかがようやく見えてくるものだ。そうして3社での経験や気づきをもとに起業した三上さんは、ビジネスにおけるルールとキーワードを提示する。ひとつは、「ルールを探る力」。たとえば上司に会議の資料づくりを指示された場合、細かな指示はなく、やり方は自分で考えなければならない、といったことがよくある。一般的なひな形通りに作ってもその会社に当てはまるとは限らない。

ふたつめは、「とりあえずやってみる力」。「電話に出るのが苦手という人にとっては、電話に出るだけでもギリギリの挑戦と感じるかもしれない。そこで立ちすくめば『使えない人間』と思われ、どんどんと評価が下がってしまいます。とにかくまず動くこと。『とりあえずやってみる力』を持ってください」とりあえずやってみて失敗したら、そこから学ぶ。また、失敗からだけではなく、成功からも学ことが重要だ。三上さんは、なぜ成功できたかを考えないと次も同じように成功できないはずだ、と考える。

○本当の人脈

損害保険業界から運輸業界へと舞台を移し、最前線で陣頭指揮をとり続けているのが下斗米寛泰さん（昭和45年卒／札幌通運（株）代表取締役社長）。金融業界と並んで保険業界もまた、20世紀末から21初頭にかけて未曾有の変化の潮流に洗われてきた。小樽商大を卒業した下斗米さんが入社したのは、東証一部上場の中堅保険会社、大成火災海上保険だった。1996年から2001年にかけて、金融ビッグバンと呼ばれる大規模な金融制度改革が進んだ。大成火災は安田火災海上保険、日産火災海上保険の3社で合併する計画が立てられ、下斗米さんはその担当のひとりとなる。ところが2001年9月11日、アメリカで同時多発テロが起こり、航空機再保険契約を結んでいた大成火災は、700億円もの支払いを余儀なくされた。債務超過となってしまい、予定していた合併はできず、2001年11月に経営破たん。その後、更生計画を出して、2002年12月に損保ジャパンに吸収合併されたのだった。

下斗米さんは損保ジャパンでもう一度頑張ろうという思いで、故郷であり、ずっと帰っていなかった札幌の支店長となる。しかし部下となる課長や社員たちには、なぜ破たんしたところから上司が？と受けとめられたと感じてしまう。

「本当に大変でしたが、とにかく結果を出そうと 4 年間支店長として奮闘しました。その後、子会社の副社長のポストを用意してもらいましたが、破たんの思い出がある東京には戻りたくない。そんなとき損保ジャパンの大きな代理店である札幌通運から声をかけてもらいました」下斗米さんは部長として入社して、8 年目に社長に就任。現在に至る。

下斗米さんは販売の第一線で大事なこととして、「アヒルよりニワトリの卵」の話をあげる。「なぜ、アヒルの卵ではなく、ニワトリの卵が商品化されたのか」ということだ。

「じつはアヒルは声を出さずに卵を産むのに対し、ニワトリは産んだ後に必ず鳴くのです。だから、鳴くほうに目がいって、最初に商品化されたのです」

これが意味するのは、勉強をしていろんな知識を得ても、大事なのは自己アピールだということ。ニワトリの卵という気持ちがなければ、どんな知識を持っていてもこの業界では生きていけない。

どんな業界に行っても必要なのが「情報」だ。情報には2つあって、ひとつは「ニュース」。新聞や雑誌のニュースは知識としては大事だが、表に出てしまったなら、すでに商売の話は決まっていて新規に入り込む余地はない。大事なのは、新聞などに載る前の「生の情報」だ。これを集めるには、どれだけ多くの人と会うかが鍵を握る。多くの人に会った人には絶対にかなわない。それが下斗米さんの結論だ。

「私が若いころ大事だったのは、とにかくフットワークでした。どれだけ足繁くお客さんのところに通えるかで、売れた時代だったのです。それから、ワープロやパソコンが入ってきて必要になったのがヘッドワーク、企画力です。そして、今一番大事なのはネットワーク、ずばり人脈です。これから社会人になるという人は、とにかく人脈を作ることです」

セールスにクレームはつきものだ。下斗米さんは、クレームがあったときに「理屈ぬきで頭を下げる覚悟があるか」が問われると言う。

「札幌通運でも事故が起こってお客さんの商品に傷がつき、謝りに行くことがあります。そのときお客さんの前で言い訳をする人がいる。これは絶対にダメです。どんな状況でもまずは頭を下げて謝らなければなりません。お客さんはカッカしています。とにかく申し訳ありませんと謝って、その場を収めることが大事です」そうしているうちに、相手もだんだん冷静になってくる。頭が熱くなっている相手にいくら理屈や理由を説明しても意味がないのだ。

大きな変化の時代に漕ぎだしていく若者たちへ、下斗米さんは就活への意識づけをこう訴える。「志望する会社の、企業活性化の一翼を担え」。

「企業にとっては、どれだけ経営意識の高い社員がいるかが重要です。ミッション（使命感）、パッション（情熱）、アクション（行動）の 3 つを持っている社員は、経営陣がいちばん欲しがる人材だし、社会人として必ずや成功します」かつての減点主義ではなく、いま企業の多くは加点主義で進んでいる。どんな企業も新しい人のセンスや感性がほしい。だから若者はチャレンジしなければならない。「器量以上の仕事は出来ない」。それが下斗米さんの座右の銘だ。「100 の仕事をやるには、100 の人間力がないとできません。では、どうやって 100 の器量を持つか。どれだけ多くの人に会って、そこから学ぶかです。知識は大事ですが、机の上で勉強するだけでは器量はもてません」

❍自らのキャリアをデザインする

（株）マイナビ紹介事業本部の柴田康幸さん（平成 14 年卒）は、ゼネコン勤務を経て人材業界に転職した。人材紹介とは、「転職したい人」、「人材がほしい企業」の双方に関わり、両者を結ぶ仕事だ。転職者にとっては質量ともに良い求人情報が得られるし、採用を勝ち取るようにさまざまなアドバイスを受けることができる。社会に出てしまえば、大学の就職課のような頼れる窓口はないのだ。また企業にとっては、採用に関わる手間とコストが大幅に削減されるし、人材紹介の現場で起こっている生きた情報を得ることができる。では紹介する企業はどのように収益を上げるのか。それは、両者に雇用契約が結ばれたときだ。このとき初めて、採用に成功した企業から成功報酬として紹介企業に手数料が払われる。

「キャリアとは、単なる職歴や社内でのポジションのことではありません」

キャリア理論の大家ドナルド・E・スーパー（コロンビア大学）は、「キャリアとは人生のある年齢や場面のさまざまな役割の組み合わせである」とする。人生には年齢で大まかに区切ることができる段階（ライフステージ）がある。つまり、生まれてから 15 歳までの「成長段階」、そこから 25 歳までの「探索段階」、45 歳までの「確立段階」、65 歳までの「維持段階」、そしてリタイアを迎える 65 歳以降の「下降段階」といった区分だ。また、厳密なものではないが、各段階にそれぞれの役割（ライフロール）がある。例えば子ども、学生、社会人といった役割だ。そして年齢を経るとそれらと重なって、結婚してパートナーをもつ配偶者、親となる家庭人といった役割もある。余暇を楽しむ役割もあれば、市民として地域社会を構成する役割もある。それらの「ライフステージ」と「ライフロール」を虹の形のように一枚に図式化したものをライフ・キャリア・レインボーと呼ぶ。

「この図に自分のキャリアを重ねてみると、かつて自分は、複数の選択肢があった岐路に立っていたことが見えてきました。建設不況でゼネコンからリクルートに転職したとき、仕事に悩むだけではなく、仕事以外のことや家庭を守ることにさらに意識をシフトすることもできたかもしれません」

虹の帯に見立てた自分の役割は、ライフステージ（年齢）によってちがう。30 代から 40 代にかけては多くの役割を担う段階だ。仕事人であり配偶者であり、ときに旺盛な消費者であり、地域社会の構成員である、という具合。

「だから仕事そのものだけでなく、さまざまな役割を見ながら歩むのがキャリアなのだと言うことができます」

またキャリアアドバイザーとして柴田さんがもうひとつ加える考え方がある。クランボルツ教授（スタンフォード大学）が提唱するプランド・ハプンスタンス理論だ。主旨をひとことで言えば、「キャリアは 8 割がた予期しない出来事や偶然の出会いによって決定される」—。だからその予期しない出来事をただ待つだけでなく、自ら創り出せるように積極的に行動したり、周囲の出来事に神経を研ぎ澄ませたりして、「偶然を意図的・計画的にステップアップの機会へと変えていくべき」、なのだ。

柴田さんはいま、キャリアをこう考えている。「キャリアとは、『仕事だけ』、『昇るだけ』のものではない。人生において自分で作っていくものである、と。女性が妊娠、出産、育児で仕事を辞めて家庭に入るとしても、それはキャリアを捨てることではない。その時点で主婦や母というキャリアを進むと言うことができるのだし、機会があればビジネスの現場で再びビジネスのキャリアを作ることができる。また、配偶者や家庭人というキャリアよりもビジネスのキャリアの方の価値が高いということは決してない。

「皆さんは、キャリアというと良い会社で良い仕事をして自己実現をめざすことと考えるかもしれませんが、そのイメージだけに縛られないでください。どんなキャリアを選んでも、自分らしく堂々と生きていけば良いのです」

○真の三現主義

小樽商科大学ビジネススクール（OBS）10 期生の黒川博昭さん（元･富士通（株）代表取締役）は、リーダーをめざす若者たちに伝えたいことを、自らのキャリアをもとに語った。コンピュータと通信システムの分野で常に日本の先頭を走り続けてきた富士通だが、黒川さんが社長のバトンを受け取ったのは大きな危機の時代だった。開発の分野でキャリアを着実に積んでいった黒川さんだが、2003 年、本人曰く突然のように社長に就任する。2001 年に営業利益が赤字となり、巨額の特別損失を出す状況だった。翌年にはなんとか営業利益は持ち直したが、特別損失・当期純利益ともにマイナスで、富士通危機説が巷間を賑わせた。IT バブルが崩壊したことが発端で、同社が抱えていた問題が露呈する。経営の基本を軽視していたことと、目標管理制度の悪影響も出ていた。役員も部長も自部門のことで精いっぱいで、指標がぶれて他社との比較もせず、全社の感度が低下してしまった。黒川さんはそれから4年間巨艦の舵をにぎった。

「私は現場・現物・現状の情報共有にこだわりました。就任 1 年後の 2004 年 5 月には、強い会社をめざすこと、確実な利益成長を実現していくこと、技術や商品でリーダーシップを取ること、マネージメント力を強化すること、と目標を定めました」黒川さんは入社式などで、「人の寿命は 80 年に伸びたが、会社の寿命は30年。さらに技術の寿命は5年か10年だ」と話した。「私が入社した時代から約50年の間に、メインフレームの時代からミニコンになり、パソコンが普及し、インターネットの時代になりました。このような超スピードのなかで、何を大切にしたらいいのか。ひとつはトヨタの人たちがよく言っている『見たか、なぜだ？』を行動の基本にすることです。現場で何かが起きたときに伝聞で報告するのではなく、実際に見てきなさいというトヨタマネージメントの基本のひとつですが、大変重要だと思います」

黒川さんたちは、顧客をしっかりと観察することで変化を見つけるように心がけた。

「お客さまは自分たちより人数も多くて賢いのだから、我々だけで考えるより多くのビジネスチャンスを発見できます。だから、お客様起点で考えて行動を続けるのです」

それは、顧客の言う通りにするということではなく、顧客の立場で考えること。納期と品質を守り、スピードを上げる、ともかく現場・現物・現実にこだわることなのだ。

○企業が学生（若者）に求めるもの

企業は学生や若手の社員に何を求めているのだろう。そのヒントは講師の言葉に数多くちりばめられている。前出の太田さんは、「社員を伸ばすのは、なんといっても実際の仕事での経験だ」という。たとえば、優秀なセールスがいたら、コーチ（課長）はその社員とともに次の目標を立て、そこに到達する課題を社員と共にはっきりさせる。社員はそれに対して、こうやってみたい、と自発的に考え行動して次のステップに上がってゆく。一連のプロセスの中では、コーチングとフィードバックが重要となっていく。レベルが上がるほど、社員は受動的（指導を受けながら職務能力を身に着ける）態度を脱して、能動的（新たな職務にチャレンジする）経験を通じて能力を高めてゆくのだ。

太田さんは、企業の中では日々の実務を通して自発的に成長する機会が極めて重要であることを繰り返す。「どんな局面でもコミュニケーション力が大切です。これは単に自分を売り込むプレゼンテーション力ではありません。コミュニケーションではまず、相手から希望や考えをうまく引き出すことが重要です。そのうえで自らの考えを相手にパワフルに伝えられる能力を磨いていってください」

「会社にしがみついてはいけません。企業と個人は、あくまでも契約関係にあるのです。仕事によって自分を高めていくことをいつも意識して、その機会をつねに貪欲に求めてください。自分の価値が評価される軸を、社内だけではなく、その業界やもっと広い社会の中に据えてください」

七十七銀行の堀内さんは、学生時代を有意義にすごすための具体的なアドバイスを示した。これはどんな企業に入っても、あるいはどんな職種についても必要な力、すなわち「社会人基礎力」そのものでもある。

興味・関心事にチャンレンジすること：いろいろなことを経験して、自分の引き出しを大きくたくさん増やしてほしい

現状を分析して把握する力をつけること：いま自分はどこにいるか。どんなふうに走っているかを俯瞰できるようになってほしい

期限と段取りを意識すること：締め切りから逆算して、やるべきことを整理しながら行動してほしい。

相手や周囲への目配りと気配りを欠かさないこと：自分本にならず、まわりの状況を正しくつかむ余裕を持ってほしい

○仕事を通じて獲得するアイデンティティ

吉田理宏さん（昭和 61 年卒／ WAYOUT カンパニー（株）代表取締役）は、日本 LCA キッズシティジャパン（株）を経て自身の会社WAYOUTカンパニーを起業。28 年間一貫して人材開発の仕事に携わってきた。その吉田さんは、良い会社に入ることは必ずしも大事なことではないという。

「私は、『自分らしい』というのが一番の価値だと考えて生きています。どんな会社に入っても転職してもしなくても、自分は自分になっていくと思う。いろんな人に出会ったり、いろんなことを通じて、自分がだんだん自分らしくなっていけばいいな、と思っています」

ひまわりの種はひまわりに、アサガオの種はアサガオになる。太陽が当たろうが当たるまいが、暑かろうか寒かろうが、土がどうだろうが、アサガオは必ずアサガオになる。あんな小さい種の中に、すべてが詰まっている。人間もそうだと思う。吉田さんはそう力説する。もともとあるのは自分らしさという核で、人と出会ったりしながら中にあるものが開かれていくのだ。そのためには、情報過多の社会の中で取捨選択が大切。就活でいろんな会社を見ているうちに、だんだん自分が何をやりたかったのかわからなってしまうこともあるだろう。自分がいいと思ったら取り、いらないと思ったら捨てる。大事なのは、そこに行って直接見て聞いて、触れて感じることだ。

日本のような就職活動は、世界スケールで見ると特異なものだ。例えばアメリカの企業は部門ごとに採用をする。各部署が「こういう学歴でこういう勉強をしてきて、ビジネスで使えるこんな知識をもっている人」という観点で人材を迎えるのだ。吉田さんは、日本の企業はプロとアマを抱えてチームを作っているようなものだと言う。では日本のそんな状況の中で、若い世代はどうしたらよいだろう。

仕事よりもプライベートを充実させた生活をしたいのなら、決められた仕事を決められた方法でずっとやり、決められた場所でずっと働き続けなければならない。それで良いならそれも良いだろう。日本では戦後 20 年くらいまでは、このタイプの優秀なフォロワーがいればよかったのだから。しかし今は多くの企業が苦しんでいる。新しいやり方を考えなければならないと悩んでいる。リーダーにはどうしたらなれるだろうか。なるためには当然、一定以上の努力と競争を経なければならないだろう。吉田さん自身は、ビジネスリーダーになるためにがむしゃらに働き、成功と失敗をさまざま経験した。仕事の上では好きじゃない人とも付き合っていくなかで、うまくいかない人とどうやって人間関係を作っていくかも学んだ。

「君たちがどう働くかによって、その会社が輝くか輝かないかが決まるんです。それなら、自分が好きな会社、良くしたいと思う会社に入ればいい。好きなら頑張れるでしょう？　できれば会社のトップの話を聞いて、その人に惚れたら、それをあなたの思いとする。自分の好き嫌いやこだわり、あなたの力やあなたらしさはまだ開かれてないのですから」

適性検査や自己分析に力をいれることにどんな意味があるか、と吉田さんは問う。それらは未来に開かれるものなのだから、まず未来になって実際にやってみなければわからないではないか。会社選びは友達や恋人を選ぶことに似ている。友達を選ぶときに自己分析してから友達探しに行く人いないだろう。あなたは親友にふさわしいと思った人を面接で決めるだろうか？　親友はかけがえのないものだろう。会社もそうであってほしいものだ。

これからの 10 年をどうすごすべきか。吉田さんは、まずは目の前のことに一所懸命になることが大事だと力説する。

「能力をつけるのは、例えば筋肉をつけるのと同じです。肉屋に肉を買いに行っても、自分の筋肉にならないし、高いお金を払って勉強をしに行く人がいるけど、それは肉を買いに行っているのと同じ。結局、自分が持っている筋肉を使うしかないのです」

たとえ細い筋肉でも、自分の筋肉は使えば使うほど確実に大きくなるという。それはつまり、何かに夢中になる、何かに一所懸命になること。その対象がいまは見えなくても、とりあえずまぁいいかなというものをやれば良い。今から 10 年間は、自分の持っている能力を高めることが大事。そうすれば、10 年後、自分の好きなことができるはずだ。

「失敗するのを恐れて何もしない人は成長できません。新しいことをやって失敗しないなんてことはないからです。能力を高めるには、今までやったことのない新しいことをやるか、今までできなかったことを克服するか、どっちにしろ成功確率は低いのです。でも、失敗したときに謝るという覚悟を持っていたら大丈夫。とにかく、今、目の前のことに取り組み、自分らしく頑張ってください！」

○セルフブランディングの時代

大手旅行代理店からはじまった朝日博昭さん（昭和 54 年卒）のキャリアは、イベント会社や広告代理店でのクリエイティブの世界を経て、企業のブランディング責任者に至った。広告の世界には 30 代で飛び込んだが、「全北海道広告協会賞」をはじめ、全国の膨大な広告の中から選ばれる「日経広告賞」「広告電通賞」、そしてテレビ CM では ACC 賞（全日本 CM 放送連盟）など、多くの賞を獲得した。そして 40 歳を目前にして次のステップを考える。ちょうどそのタイミングで、最大手の電通が全国で地域会社に再編され、札幌に電通北海道という会社が生まれることにった。クリエイターの募集があり、年齢枠は 39 歳まで。朝日さんは迷わず応募して採用が決まる。

この時代の代表的な仕事には、CMを通した乳業メーカーのブランディングがあげられる。また 2004 年には、旧ひらふスキー場（北海道倶知安町）が国際リゾートをめざして、1960 年代からの長い前史の上にリフトとホテルを統合して新しいスキー場になったが、このブランディングの仕事も担当した。現在の「グラン・ヒラフ」だ。また 2012 年には『ミシュラン北海道 2012 特別版』の発刊に関わる仕事を担当。これは道内の農業団体などの願いを実現させたもので、「素材は一流・料理は二流」などと揶揄（やゆ）されることさえあった北海道の食のシーンをさらにグレードアップすることが目的だった。北海道版では、海外用に英語版も作ってネットで無料公開した（期間限定）。はじめてのことで、評判を呼んだ。

こうした一連の仕事を通して、朝日さんの「ブランド観」は鍛えられていった。ブランドとは何か？ ブランドにどんな意味があるのか？ それはどのようにして作られ、磨かれていけば良いのか？…。

ブランドとは何によって形づくられるか—。朝日さんは、「それは広い意味の『誇り』だ」と言う。作り手も売り手も、自信をもって相手に提供することができる「何か」。この「何か」がブランドの源泉。「そしてこれを見いだしていくプロセスには、自分はいったい何ができる何者なのかと自問しつづけることが欠かせませ

ん。私の転職歴はその結果ですし、お気づきだと思いますが、これは学生の就職活動にもぴったり当てはまることなのです」

○女性のキャリア

現在の小樽商科大学の学生のうちおよそ 4 割程度が女子学生である。「女性の先輩の活躍に学びたい」という声に応えてエバーグリーン講座においても各方面で多様なキャリアを歩む女性講師をお招きしてきた。彼女たちが切り拓いてきた女性の働き方、自ら示してきた女性の生き方は、イメージだけが先行しがちな「女性がいきいきと活躍する社会」の具体的な事例と課題とを指し示すものであり、女子学生のみならずすべての学生に対して貴重なメッセージとなった。

「私が入学したころ、女子は学年に 30 名弱で全体の一割くらいでした」、と語るのは、加藤ひろみさん（昭和 55 年卒）。

大卒女子は腰掛け程度で働いてすぐ寿退社するものだと思われていた 1980 年代の女性に与えられたキャリアの選択肢は今のそれよりも遙かに狭かった。就活でも女子ということだけで面接までたどり着かないことがあった。やはり資格があったほうがいい。そう考えていたときに『税理士になる法』（山本守之）という本と出会い、3年生から日商簿記を受けはじめ、在学中に1級を取得する。

卒業後は会計事務所に就職。仕事はやりがいがある反面、確定申告時期をはさむ 12 月から5月までの繁忙期はとにかく忙しい。仕事と並行して税理士試験の勉強も続け、卒業してから会計科目2科目に合格した。そして 24 歳で、公認会計士をしている夫と結婚。妊娠8か月くらいまで働いたあとに仕事を辞めて、しばらくふたりの子育てに集中した。気の合う友達とだけ付き合い、自分さえがんばればなんとかなったそれまでの人生とはまったく違い、思い通りにならない子どもに四苦八苦しながらがまんのときを過ごした経験は、のちに振り返ると大きな学びだった。

子どもが少し大きくなると、一般企業の経理事務や保険会社の財務の仕事をパートから始めていった。会計事務所のスタッフとしての仕事にもやりがいを感じていたが、やっぱり税理士になりたい、という気持ちが心の芯にあった。そしてふたたび真剣に挑戦を開始。子どもが大学生になった 2005 年、晴れて税理士登録がかなったのだった。

「税理士の仕事は、事務職ではなく、典型的なサービス業」。加藤さんはそう言う。関与先からは、突っ込んだ経営や管理のことにはじまり、どうやって売り上げを伸ばしたらいいか、さらには子どもの進学相談や親の介護のことまで相談を持ちかけられることがある。加藤さんは趣味の旅行の経験を生かして販売先を紹介したり、愛用する上質なコスメの情報を関与先のホテルに提供したこともある。税理士の仕事は、一般に考えられるような税務申告や税務相談だけではないのだ。

「だから遊びも含めていろいろな経験をしてきた人や情報の引き出しをたくさん持っている人、人と会うことが好きな人が向いていると思います。そして何より、経営者の悩みを他人事だと思わない心が必要です」

家事が好きな人には専業主婦の道があり、仕事が好きな人はずっと働けばいい。加藤さんはそう考えている。職業柄いろいろな女性の経営者と会うが、子供を育てながら会社を経営している人や、離婚してシングルになってから起業した人もいる。悩みはあっても生き生きと仕事をしている人は経営もうまくいっていて、逆にパワーをもらうことが多い。とはいえ、現代でもまだまだ女性の働く環境が整っているとは言えない。年配の男性には、家事・育児は女性がするもので、女性が家を守るのは当然、と思っている人も多い。料金の安い認可保育所に子どもを預けたいが、順番待ちは大変だ。家事も育児も全部女性ひとりでやるのは不合理。「結婚している

ならお互いにサポートし合うことが絶対に必要だと思います」

平均寿命が伸びて高齢者が大幅に増加する一方で、晩婚化で出生率が低下して人口構造が歪んでしまった日本。年金や医療にさまざまな問題が生じている。そして結婚する若者が減っている。1950 年の平均初婚年齢は、道内平均で男性が 26.1 歳、女性 22.7 歳。これが 2013 年には男性 30.4 歳、女性 29.2 歳。女性の平均初婚年齢が上がれば出産年齢も上がる。全国の出生時平均年齢（一番最初に子どもを産んだ年齢）は、1950 年に 24.4 歳だったのが、2013 年は 30.4 歳だった。この背景には何があるのだろう。若者を取り巻く経済や雇用情勢の悪化、個人のキャリアや趣味などを大切にしたいという価値観が広まっているから、と、さまざまな要因が考えられるだろう。

「個人の自由を尊重しながらも、若者が結婚したい、子どもを育ててみたいなと感じる社会にすることが大事だと思います。働く女性が出産することで今までの地位を失ってしまったり、肩たたきを受けてしまう。あるいは保育園に入れないといったことがないようにすることはもちろん重要です。家事・育児をひとりで背負うとなれば、誰だって子どもを産む自信が持てないでしょう」

子どもは社会の宝であり、社会全体で育て、サポートする必要があるはず。加藤さんは強調する。

「女子学生の皆さんは、働いていく中で何度か重要な選択をしなければいけない時期があるでしょう。女性が出産育児をしながら働きやすい環境は少ないのですが、仕事も頑張って続けてほしいし、人生のパートナーが見つかれば結婚してほしい。そして子どもを授かれば楽しんで育ててほしい。皆さんにはどうぞ欲張って生きてほしいのです。働く女性の先輩もだんだんと管理職になっていくので、理解は進むと思います。また、ここでいま受講している男子学生もそういうことをぜひしっかり理解して、結婚したらお互いにサポートして頑張ってください」

女性ならではの仕事として誰もが思い浮かべるもののひとつに、化粧品の販売があるだろう。化粧品メーカーの総合職（営業）として入社して、その後販売代理店として独立したのが、北風いずみさん（平成 13 年卒）。現在は「green+café（グリーン・カフェ）」というサロンを自宅で開いている。

新卒で入社したのはノエビア化粧品だった。ノエビアとは、化粧品の製造販売を中心に、トイレタリーや、サプリメントなどの食品、あるいはアパレルやボディファッション、化粧雑貨などを幅広く販売している会社だ。新人研修は、アポイントも取らないきびしい飛び込み営業。目標は１日百軒以上。断られて当たり前だから、とにかく毎日強い気持ちを持って、持ち前の大きな声で訪問を繰り返した。話を聞いてくれて、フェイシャルマッサージやメイクアップまでさせていただくと２、３時間もかかる。でもそこまで自分を相手にしてくる人がいるとほんとうにうれしかった。パンプスのヒールをすり減らした厳しい３カ月の研修が終わると、もうこれ以上ハードなことはない、なんだってできる、という気持ちになった。

「お客さまの立場やさまざまなお考え、世の中のことなど、社会の現実が身に染みて、学生時代はなんて楽しい毎日だったのだろうと思い返しました（笑）。このときの体験がいまの自分を作ったと思います」

元気とガッツで駆け抜けて６年がすぎた。担当していたある代理店の社長ご夫妻がとても良い方だった。独身の息子さんがいると聞いたので、こんなすばらしいご両親の息子さんならすばらしい人だろう、一度会ってみたい！と思った。そこで、上司を介してそんな希望を伝えて、会えることになる。そしてふたりは結婚した。もちろん結婚をしても子どもが生まれても仕事をやめるつもりはまったくなかった。

北風さんが選んだ次のステップは、販売会社や販売代理店のサポートではなく、代理店として独立することだった。化粧品の世界に 15 年ほどいて、自分について確信したことがある。それは、対面式のカウンセリング販売こそが、いちばん自分らしく化粧品と関わっていられる場所なんだ、ということ。

「とりわけ重要なのは、メイクやマッサージの場面で生まれる、手を介したふれあいのコミュニケーションです。ケガや病気の処置を“手当て”というように、人間の生身の手はすばらしいパワーを秘めています。人工知能によって人間が要らなくなっていく仕事現場の対極にあるのが、化粧品のカウンセリングだと思います」

○多様な他者との協働と共生

若者たちが飛び込んでいく社会は、グローバル化や労働力の流動化、情報技術の進展といった、前例の無い大きな変化に直面することになる。その「これからの職場」においては、言語や宗教、価値観などが異なる同僚と（場合によってはロボットとも）机を並べて働くことが珍しくなくなるかもしれない。そのような時代のなかでグローバルに活躍する先輩や障がい者雇用に先駆的に取り組んでいる講師たちから「多様性が企業と社会を強くしなやかにする」好事例を学ぶことができた。

大阪市教育委員会でジョブアドバイザーとして活躍されている渡部猛さん（昭和 46 年卒）は、松下電器産業株式会社（現パナソニック）で社会人としての大半の時間を過ごされ定年後にグループ会社の人材派遣会社に移り、その後特例子会社「パナソニックエクセルアソシエイツ」の立ち上げに関わる。特例子会社とは、従業員の一定以上が障がい者である会社のこと。創業メンバー 15 名のうち 12 名が障がいのある人だった。業務内容は、印刷やデータ入力といったオフィス仕事と、清掃、パン・クッキーの製造・販売、そして農園で野菜を作ること。

「どんな人にも、社会のためにできることがある。この会社はそうした理念で起業されました。そんな経験の延長として、私は 2 年前からは、大阪市教育委員会の嘱託職員として、知的障がい者が働ける場づくりのお手伝いをしています」

渡部さんは、働くという漢字は人が動くと書く、と説明する。だから世の中のほとんどすべての人は、毎日働いていることになる。仕事で得られるのは給料だけではない。働く場には仲間ができるだろう。難しいことに挑戦すれば、その過程でその人は成長していける。挑戦が実ったときの喜びは、なにものにも代えがたい財産になるだろう。そうした努力の動機づけになるのは何だろうか。

「それは個人の満足や喜びの先にあるものだと思います。つまり、松下幸之助が強調する、私利私欲にとらわれない、社会へ貢献する気持ちです。どんな人でも、たとえどんなにささやかでも、その人なりに社会に役立つことができます。このことが働くよろこびになるのです。大会社の社長も新人も、大学の先生も学生もみな同じです。人はどんな人からも学び合い、影響を及ぼし合っている。だから自分のまわりのすべての人々に感謝の気持ちをもって、生涯学んでいきたい。私はそう思っています」

前出のクボタワークス渡辺さんも、やはり障がい者雇用の先駆者だ。

2006 年、国連で「障害者権利条約」が採択されたことを受け、日本でもこの年から障害者自立支援法が施行されることとなり、障がいのある人を、その自立を支援しながら一般就労の場へと導く政策がはじまる。しかし日本が「障害者権利条約」を批准したのは、7年後の 2014 年。障害者総合支援法や障害者差別解消法の成立や、障害者雇用促進法の改正など、国内法の整備に時間がかかったのだ。100 人以上の従業員のいる一般事業者は、2％以上の障がい者を雇用しなければならない。理想を言えば障がいのある人と健常者が共に同じ職場で働くことが望まれるが、従業員規模が大きな会社の場合、障がい者を雇用する場として特例子会社をつくるケースが多い。クボタワークス（株）はクボタグループの清掃や印刷、集配などを請け負う会社で、従業員30数名のうち、20数名が障がい者だ。2006年には障がい者の新たな仕事の場づくりとして、

農家の協力をえながらビニールハウスでの水耕栽培に実験的に取り組んだ。

クボタサンベジファームは、障がい者の「自立支援」と「地域社会との共生」、そして「耕作放棄地の再生・活用」を手伝う CSR の取り組みによって新たに広がった領域の会社だ。農業と福祉の連携、融合から、新たな事業が生まれた。

「露地で行う難しい農業とはちがい、温度や湿度を機械的に安定してコントロールしやすいハウスなので土にまみれることもなく、障がいのある人々でも十分に働けるはずだ。そんな発想があったのですが、はたして最初の年から手ごたえを感じました。クボタの事業領域である農業が、障がい者雇用の場としてとても有効であることが見えてきたのです。障がいのある人を主体に農業をしたいのです」

佐藤盟信さん（平成 7 年卒）は外交官としてヨーロッパやアフリカと深く関わり多様な価値観に触れたと語った。在学中に本学協定校のオタゴ大学（ニュージーランド）に留学した佐藤さんは、北海道大学法学部の大学院で学んだ後 1988 年に英語の専門職として外務省に入省。経済畑のセクションに配属されて、2000 年からは公費留学でロンドンスクールオブエコノミクスで政治思想を、ケンブリッジ大学国際関係学部で国際関係論を学んだ。それからオランダの日本大使館、ウィーン（オーストリア）の IAEA（国際原子力機関）の日本政府代表部で仕事をして 2009 年からはイギリスの日本大使館に勤務している。東アフリカのタンザニアの日本大使館に赴任したのは2012年。外務省に入って17年のうち、12年は国外にいたことになる。佐藤さんは、さまざまな得がたい体験をしたタンザニアでの日々を語った。

タンザニアは、人口５千万人ほど。経済も人口もいま右肩上がりの国だ。佐藤さんがいたのはインド洋に面した港町であるダルエスサラームという中心都市で、高層ビルが建ち並ぶ人口４００万人の大都市だ。アフリカの日本大使館員は、日本が援助したプロジェクトの式典などで現地の大統領と会うことも珍しくない。そういうとき、大統領は予定の時間通りには来ないという。

「遅れてくることがステータスですから、3時間くらいふつうに遅れて登場するのです（笑）。そのあいだ待っている人たちは歌ったり踊ったり。その場にいる日本人は私ひとりですから、私も日本を代表していっしょに踊ります。それも外交官の仕事です」

ダルエスサラームで国際商業祭が開かれ、日本もパビリオンを出した。自動車、電気機器、医療機器、化粧品など、すぐれた日本製品をＰＲするのが目的だが、佐藤さんは日本文化も知ってもらおうと、出展企業から予算を提供してもらって文化祭を開いた。ミュージシャンやマジシャン、パントマイムなどいろんなタレントを日本から呼んで、楽しいステージを繰り広げた。人手が足りないので佐藤さんもバンドのギタリストとして参加した。海外で現地の人とうまくコミュニケーションをとろうとするとき、楽器が弾けたり手品ができたり、スポーツが得意だと好都合なのだ。

アフリカの多くの国は、独立すると植民地時代からの外国系企業の多くは国有化され、社会主義体制のもとで国づくりが進められた。しかし強い産業も起こらず借金ばかりが増えていき、80 年代に入るともう破産状態。そこで IMF や世界銀行などからの融資を受けざるを得なくなり、それに伴って融資先の指導を受け外国からの民間投資を入れることになる。21 世紀に入って、政治が比較的に安定しているタンザニアのような国は、天然資源をベースに製造業や建設、金融、観光、通信といった分野が好調で、成長軌道にある。いまは、これらを裾野の大きな産業としてしっかり育てていく段階だという。

「タンザニアの国民が日本にもっているイメージは良好です。現地の人と付き合ってみるとわかることですが、彼らは日本に大きな期待を抱いています」

オランダやイギリスで勤務していた時代、佐藤さんは四六時中競い合うような先進国同士の関係を意識させ

られた。しかしタンザニアでは、ほとんどの人が日本に好感を抱いてくれていて、これまでの日本の援助に感謝の気持ちを持ってくれていた。外交官としてまったく新鮮な体験だった。いつかまたタンザニアで仕事をしてみたい。佐藤さんはそう強く思っている。

佐藤さんは、日本はこれから、アフリカ諸国の期待に応えるための今日的な方法を考えていく必要があるという。たとえば ODA による援助だけではなく、官民が連携した B to B のビジネスだ。そこでは大企業ばかりでなく、技術や個性をもった元気な中小企業が関わる余地も大きい。そして他方で、日本国内に対して、日本がアフリカと関わる価値や可能性を訴えていく必要もあるだろう。それは、経済指標の文脈を越えた、もっと広い意味での国益に資する文脈だ。

公務員と民間人、民間企業にはそれぞれ役割分担がある。外交官だと比較的容易にその国の大臣などに会うこともできるが、企業人には難しい場合もある。その国のことを総合的に広く知り、日本の人や企業との橋渡しをするのが外交官の仕事だ。佐藤さんは、海外に飛び出したいと考えている若い世代へメッセージを贈る。

「オススメしたいのは、欧米やオーストラリアといった知られた国ではなく、むしろ自分が知らない国です。その方がずっとおもしろいと思います。相談を受ければ僕も後輩たちにいろいろアドバイスしますよ。ネガティブなことを考える必要などまったくない。それが学生の特権だと思います」

○働きながら学び続けること

平成 29 年の世相を表すキーワードの一つが「人生 100 年時代」であろう。従来の標準的なキャリア感も大きく変化し、一生学び続けることの重要性が認識された年となった。エバーグリーン講座講師のなかにも社会に出てからの学びを通じて劇的なキャリアチェンジをしたり、人脈を大きく拡げることに成功した方が多数いる。

道内大手の IT 企業（株）HBA に入社し 15 年目にして業界で数少ない女性管理職として活躍しているのが東野里絵さん（平成 11 年卒）。多忙な業務と両立させて社会人学生として夜間の企業経営コース（北海学園大学経営学部）で学び産業カウンセラーの資格も取得した。

東野さんは学生時代から SE 志望だったので就活もほぼ IT 業界だけ。数社を受験して、最終面接に残れたＨＢＡに入社。最終面接で会った社長の人柄にも惹かれた。新人はまずプログラムをしっかり学ぶ。文系でもしっかり勉強して文法が分かればまったく問題はなかった。５年目になると少しずつ仕事を任されるようになり、７年目には主任に昇格。仕事に慣れ、会社や組織の課題に気づくことも増え始めたころに、経営と心理学の両方を学べるところに魅力を感じて北海学園大学への入学を決めた。講義は 18 時 50 分からなので会社は定時で上がらなければならず翌朝７時に出社して前日残った仕事を片付ける日々が続いたが明確な入学動機と強い意志で１年後に規定の単位を取ることができた。その後、組織心理学を学んでさらに心理学に興味を持つようになり、今度は産業カウンセラーの講座に通う。

「ＩＴ業界のメンタルヘルスの問題は自分の周囲とも無縁ではありませんでしたし、業界全体の大きな課題。なにか私にできることはないのかな、という自分への問いもありました」

しかし産業カウンセリングの勉強を始めて一番感銘を受けたのは、他人をカウンセリングする前に「自分のことをわかっていないとカウンセリングはできない」という大前提を知ったことだった。このとき東野さんは、自分と深く向き合うきっかけをつかむ。カウンセラーの役目は相手にアドバイスすることではない。相手の話をひたすら聞いて、まるごと受け入れるのだ。34 歳のときに課長代理になってから部下もでき、現在は社内の育成責任者として部下を育てる立場になった東野さんは、社会人になってから始めた新しい学びの価値を実感している。

本学の大学院商学研究科には専門職大学院であるアントレプレナーシップ専攻「小樽商科大学ビジネススクール（OBS）」が設置されている。開設後 15 年が経過した OBS ではさまざまな業界で活躍する幅広い世代の社会人が日々真剣に学びと向き合っている。

岩見真彦さん（平成元年卒）は、ビジネスの現場で学生時代の学びをさらに深め実践するために OBS に入学した。岩見さんは卒業後に第一勧業銀行（現・みずほ銀行）に入行し東京のいくつかの支店に勤務したが、みずほ銀行札幌支店に異動したことが OBS 入学のきっかけとなった。OBS では分析フレームワークの習得からアントレプレナーシップについての考察、そして文章力を一から鍛え直せたことが良かったという。世代や業種もちがう多様な学友が、高い目標と強い意志をもって学び合う体験も刺激的だった。

そしてＯＢＳの精神の源流にあるのが、やはり「緑丘会」だ。岩見さんは後輩たちに、このリソースを最大限に活かすべきだと呼びかける。

「実際の企業についてや資格を取るためにどんな風に勉強するか、そのためにどこを選ぶのがいいかなどについては、まず先輩に聞くことをお勧めします。緑丘会の集まりにもぜひ参加してください。『求めよ、されば与えられん』という言葉通りだと思います」

芸能プロダクション（株）オフィスキューで執行役員を務める北崎千鶴さん（平成 27 年 OBS 修了）は経験を積む中で、組織の中でみんなに頼られるゼネラリストになろうと考えるようになった。そのためのステップアップとしてどうしても学びたかったのが OBS だった。さいわい、会社の理解も十分に得ることができた。

「OBS での２年間は、経済や経営全般への視野を広げた厳しくて濃密な時間でした。ここで私はビジネスの基礎に加えて、ケーススタディによる実践的な講義で、論理的思考がとても鍛えられました。また繰り返されるディスカッションから、独学では決して得られないたくさんの知見や気づきを得ました。それらはいま毎日の仕事に生きています」岩見さんと同様に、OBS を通じて小樽商科大学の卒業生のネットワークに連なることができたことが良かったという。

「在学中に机を並べた、世代も業種もちがう同窓生がみな高い意識と志をもっていて、大きな刺激を受けました。学友たちはみんな私のリスペクトの対象でした」

東京と香港でそれぞれ大手監査法人に勤め、帰札して実家の会計事務所を継いだ小嶋京子さん（平成５年卒／平成 28 年 OBS 修了）は、仕事を通した地元企業の経営者たちとの交流から、自分の仕事を北海道のためになるものとして位置づけるために選んだ場所が OBS だった。

「２代目経営者である自分をさらに成長させたくて、OBSで学ぼうと思ったのです。仕事をしながらの２年間で尋常ではない量の課題をこなしました。MBA（経営管理修士）を取った 2016 年春から、自分はまた新たなチャレンジのステージに上ったと思っています」

小嶋さんは現在、税理士法人と公認会計士事務所の代表を務めながら日本公認会計士協会北海道会の幹事や日本公認会計士協会の公会計協議会委員と公会計委員会委員などの要職にも就いた。加えて一般企業 6 社の非常勤監査役を務めている。また母校小樽商科大学の監事もお務めいただいている。

「新たな分野への挑戦には、OBS で出会った、多世代にわたる異業種の優秀な人々から受けた刺激が背中を押してくれています。父が起こした会計事務所を、私の代でこれからの時代に向けて、さらにどのように進化させていくか。一経営者としても、取り組むべき大きな課題があります」

学部を卒業してそのまま OBS に進学する方もいる。田中康浩さん（平成 17 年卒／平成 19 年 OBS 修了）。学部を卒業したのちもう少し勉強をしたくて OBS への道を選んだという。

「企業の社長さんや大企業でマーケティングをしていた方など、いろんな方に出会えてさまざまな価値観を教えてもらえたことがよかったです。ビジネスにひとつの正解はないので、ディスカッションをしていくなかで問題の本質を見失うと、決まるものも決まらないことがありました。この問題の本質はなんだ？ 常にそこから発想することも OBS で学びました」

現在は証券アナリストとして活躍する田中さんだが、この資格について知ったのも OBS だった。

「税理士や会計士もいいけれど、会計を使ってもっと幅広く仕事をやりたいと思うようになり、経済や会計の知識を生かして証券アナリストのような面白い業界で働きたいと考えました」

○おわりに

エバーグリーン講座は、現役学生が卒業生のキャリアに触れることができる貴重な機会であり本学のキャリア教育の特徴の一つとなっています。登壇していただく講師のみなさまは、実際の仕事内容や業界の最新情報を紹介しつつ、ご本人のキャリアの変遷とその節目における大小の決断、その決め手となった具体的な事例や長い社会人生活を振り返って獲得した職業観、人生観といった多彩な話題にも触れていただき、毎回講師の職業人生が凝縮されたエキサイティングな 90 分間を味わうことができます。本稿の狙いはそれらの講義の随所で講師が（ときに無意識に）例示する社会人基礎力の具体的な実践と発揮およびそれらにつながる背景と文脈に焦点を当て、「先輩の職業人生から社会人基礎力を学ぶヒント」を示すことにありました。直近の 4 年間の講義録のみを素材としたため過去 30 年間 350 名に上る大先輩たちの金言の大半を紹介することができなかったことがいささか心残りではありますが、これからエバーグリーン講座を受講する商大生たちが、豊かな職業人生を送るための“生きた教材”として多くのことを学びとるための手がかりとして活用してくれることを強く希望します。平成 25 年度以降の各講義の模様は専用のコミュニケーションサイト（www.facebook.com/oucevergreen/）で全文を公開していますので、すべての商大生はもちろん、卒業生のみなさまにも読んでいただき「エバーグリーン講座が繋ぐ小樽商大の DNA」を共有していただくことを期待します。

平成 20 年代の終盤は、一億総活躍」や「働き方改革」、さらに「人生 100 年時代」など、これから社会に出る若者たちはもちろん、私たちすべての現役社会人にとっても「働くこと」の意味を見つめ直し、これからの時代の働き方について考え方を整理する機会の多い時代でした。平成 18 年に経済産業省が中心となってまとめた「社会人基礎力」についても、ライフ・ワークバランスの価値観の大きな転換のなかでその位置づけや役割を再定義し、人生 100 年時代にすべての人が学び成長し続けるための指針として“バージョン・アップ”させる動きが出始めてきました。他の大学に先んじて取り組んできた「大学の同窓会による母校のキャリア教育支援」の一つの成果として平成 25 年度から毎年発刊してきた本白書の役割も次なる段階に進化させることが必要になってきたのかもしれません。引き続き現役学生の未来のためにご支援ご助言をいただけますようお願いを申し上げます。

なお、本稿の素材となったエバーグリーン講座講義録の作成は、佐藤優子さん（平成 23 年度）、田口智子さん（平成 24 年度）、および谷口雅春さん（平成 25 年度～）の3名のプロのライターに担っていただき、谷口さんには本稿作成にも多大なお力添えをいただきました。講義期間中は毎週小樽まで通ってすべての講義を聴講していただくことで、講師たちの想いと現役学生との心の交流を汲み取り素敵な言葉にまとめ上げていただきました。ここに記して謝意を表します。

小樽商科大学
エバーグリーン講座
講師一覧
卒業年度順

【昭和 62 年度～平成 29 年度】

Instructor list

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
				昭和24年卒業	
1	奥井　英作	昭24	平12	資金会計理論の考え方と効用　ーキャッシュフロー計算書に関連してー	公認会計士　奥井英作事務所
2	新谷　昌明	昭24	平2	小樽の現状と将来展望	小樽市長
				昭和28年卒業	
3	平山　幹昌	昭28	平12	北海道を絵に描く	画　家
				昭和30年卒業	
4	香西　敏男	昭30	平2	企業の求める戦略と人材　ーグローバルな経済環境と市場との対応においてー	カシオ計算機（株）専務取締役
5	作田　和幸	昭30	平12	高齢社会政策に欠けるもの	(株)CWE代表取締役
6	森田松太郎	昭30	平16	企業の見方	ARI研究所理事長
				昭和31年卒業	
7	鐘ケ江邦政	昭31	平5	製品開発のコンセプトとマーケティング戦略	石黒ホーマー(株)取締役副社長
8	島　　雄一	昭31	平12	中高年の余暇生活は未開発　ー豊かな市民社会は到来するのか？ー	(財)日本レクリエーション協会公認余暇生活開発士
9	前田　次啓	昭31	平5	バブル崩壊後の日本企業のリストラクチャリング	日本発条（株）取締役副社長
10	山田　章一	昭31	平12	初めて作られた札幌市のバランスシート	公認会計士　山田章一事務所
				昭和32年卒業	
11	木梨　芳一	昭32	昭63	ニュー・マスコミ論	北海道新聞社編集局次長
12	木梨　芳一	昭32	平11	情報革命とマスコミ産業	北海道文化放送（株）代表取締役社長
13	守分　寿男	昭32	平13	私の演出論	元ＨＢＣディレクター
14	米光　啓弥	昭32	平23	「社)緑丘会・財)小樽商科大学後援会の公益法人化への取組み」	税理士米光啓弥事務所　公益法人小樽商科大学
				昭和33年卒業	
15	石田　隆四	昭33	平8	国際海運分野に於ける取引法について (不定期船及び定期船各分野に於ける契約類型を中心として)	三井近海汽船(株）代表取締役社長
16	青木　匡光	昭33	昭62	情報時代の企業人	(株)エーラン社長
17	青木　匡光	昭33	平11	21世紀を生きぬく魅力ある人間性づくり	アソシエイツ　エイラン代表
18	青木　匡光	昭33	平23	25周年記念講義②：「香りある人になるために」 ー自立へのステップを踏み出そうー	アソシエイツ　エイラン代表
19	大谷　芳弘	昭33	昭62	国際化時代の金融	ユアサ産業(株）常務取締役
20	温泉　和也	昭33	平5	我が社の経営理念と経営戦略	雪印乳業(株)
21	温泉　和也	昭33	平8	我が社の経営理念と経営戦略	雪印乳業(株)
22	増田　　久	昭33	平6	石油市場と多国籍企業	東亜石油(株）取締役経理部長
				昭和34年卒業	
23	氏家　幸演	昭34	昭63	拓銀の情報戦略	北海道拓殖銀行情報開発部長
24	野島　和夫	昭34	昭63	地方経済論	北海道拓殖銀行調査情報本部調査部長
25	野島　和夫	昭34	平8	道内の地域計画動向など	(株)たくぎん総合研究所代表取締役社長
				昭和35年卒業	
26	青木　鎮夫	昭35	昭62	日本企業の戦略経営	経営コンサルタント戦略経営協会理事
27	小原　芳春	昭35	昭62	ニュー・マーケティング論	(株)イトーヨーカ堂専務取締役
28	小原　芳春	昭35	平9	イトーヨーカドーの経営戦略	(株)デニーズジャパン代表取締役社長
29	小原　芳春	昭35	平14	流通業の課題（IYグループの例）	(株)デニーズジャパン相談役(前代表取締役社長)、(社)緑丘会理事長
30	小林　達明	昭35	平7	国際商業会議所の活動について	国際商業会議所日本委員会事務局次長
31	坂本　信之	昭35	平16	和魂洋才ーロンドン株式市場上場への道ー	(社)緑丘会理事会報委員　元日立クレジット(UK)
32	坂本　信之	昭35	平19	経営戦略としてのM＆A	緑丘会常務理事・会報委員長(前 日立キャピタル顧問)
33	鷹木　　護	昭35	昭63	ニュー・マーケティング論	(株)電通北海道支社長
				昭和36年卒業	
34	伊藤　鴻介	昭36	平7	参入障壁とトラスト	松下電器産業(株)官公需営業本部営業推進部長
35	伊藤　鴻介	昭36	平8	規制改革と事業戦略	松下電器産業(株)官公需営業本部渉外部長
36	岩佐　竹治	昭36	平8	日本のベンチャー・キャピタルの現状	ゼネラル・コーポレーション社長(元 日本合同ﾌｧｲﾅﾝｽ専務)
37	岩佐　竹治	昭36	平10	ベンチャーキャピタルからみた北海道企業	(株)日本合同ファイナンス常務取締役
38	川脇　光男	昭36	平10	わが社における分社化と再統合	共和紙業（株）会長
39	小山　正芳	昭36	平7	新タイプの高校の現状と今後の課題	札幌国際情報高等学校校長
40	斉藤　一郎	昭36	平2	近時ジャーナリズム事情	朝日新聞東京本社「AERA」スタッフライター
41	佐藤　充弘	昭36	平17	大空を駆ける夢　ー中部国際空港の開発に当ってー	(財)中部空港調査会元専務理事、現日本空港コンサルタンツ取締役
42	重松　政男	昭36	平2	金融の自由化、国際化と金融業	(株)山一証券経済研究所取締役調査部長
43	高木　秀二	昭36	平6	情報技術の役割（流通における技術革新）	(株)北酒連取締役　情報システム本部長
44	瀧　　滋	昭36	平13	ペルー日本大使館人質事件の経験と危機管理上の教訓	元ペルー松下電器(株)取締役社長
45	寺尾　忠明	昭36	平7	北東アジア諸国の企業経営・企業交流	日製産業(株)理事・金属・化成品営業本部長
46	増岡直二郎	昭36	平16	企業におけるIT導入の実態と成功のための条件	ITコンサルタント(前八木システムエンジニアリング代表取締役社長)

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
47	増岡直二郎	昭36	平25	ドラッカー経営理論の評価、及び理解と実践の仕方	nao IT 研究所代表
48	山田　守之	昭36	平14	小樽の画壇と私の歩んできた道	洋画家
昭和37年卒業					
49	青木　雅明	昭37	昭62	日本経済の新局面	参議院第二特別室(経済企画庁より出向)
50	青木　雅明	昭37	昭63	日本経済の新局面	経済企画庁経済研究所
51	奥田　順一	昭37	平3	最近の生命保険事情	日本生命保険(相)財務審査部調査役
52	奥田　順一	昭37	平元	生命保険事業の現状と課題	日本生命保険財務審査部調査役
53	柏谷　達雄	昭37	平2	アサヒビールのマーケティング戦略	アサヒビール(株)理事岡山支店長
54	加藤　芳勝	昭37	平元	グローバル化する企業の中での私 ー東京,ﾓｽｸﾜ,北京で燃えているものは何かー	兼松江商(株)第４部部長
55	鹿野　敏秀	昭37	平3	研究開発と地域づくり	(社)東北インテリジェントコスモス構想推進協議会事務局次長・企画部
56	菊池　　剛	昭37	平11	アジア諸国の投資環境ーｲﾝﾄﾞﾈｼｱのケースー	(社)海外コンサルティング企業協会理事、インドネシア投資調整庁投
57	菊池　　剛	昭37	平14	私のアフリカ論　ーアフリカとどう向き合うか	エチオピア連邦民主共和国水資源省「地下水開発・水供給訓練計画」チーフアドバイザー
58	紀国　郁夫	昭37	平17	決算トップ発表の秘訣と効果ー1980年経理部長就任時から上場会社で20年間決算トップを発表してー	(株)日立ハイテクノロジー　前代表取締役専務
59	熊谷　克己	昭37	平13	イラン革命における私の危機管理　ー経験と教訓ー	元大阪商船三井船舶(株)テヘラン主席在勤員
60	鈴木　裕史	昭37	平6	海上貨物運送保険の実務	日産火災海上保険(株)取締役　海上営業第２部長
61	高雄　　稔	昭37	平14	「ホンダ」という企業	(株)光明アドバイザー 元本田技研工業(株)生販在物流管理部
62	高木　晃一	昭37	平元	為替相場と企業活動	東京銀行(株)札幌支店長
63	高木　晃一	昭37	平4	為替相場の変動と企業行動(英語講義)	財団法人　日本船舶振興会参与
64	高木　晃一	昭37	平5	NGO（民間援助機関）の国際的活動について	(財)日本船舶振興会国際業務部長
65	高木　晃一	昭37	平12	NPO（民間非営利組織）の経営論	シップ・アンド・オーシャン財団アドバイザー
66	辻　　知秀	昭37	平27	これからの日本と若者のパワー　問われる挑戦力	執筆業 日本経済新聞社 同社社友
67	中野　淳一	昭37	昭63	証券市場論	野村証券(株)常務取締役
68	西村　捷敏	昭37	昭63	国際経営論　ー国際化時代の人材開発ー	(株)日本電気総合経営研修所取締役経営教育事業部長
69	西村　捷敏	昭37	平11	三橋時代の四国と徳島の元気印企業群	徳島大学総合科学部教授、大学開放実践センター長
70	平賀　元宏	昭37	平4	損害保険の現状と課題ー現場の視点ー	安田火災海上保険(株)代理店業務開発部長
昭和38年卒業					
71	青木　雅明	昭38	平3	シンクタンクの研究実務	(株)日本総合研究所首席研究員
72	荒澤　建一	昭38	平元	変動する世界経済と商社活動	三菱商事(株)大阪支社経理部長
73	荒澤　建一	昭38	平10	日本の国際取引と私たちの生き方	三菱商事(株)前監査部長
74	池田　明聡	昭38	平4	職業会計人から見た企業会計の現状と問題点	池田公認会計士事務所公認会計士
75	小笠原　荘介 （原　荘介）	昭38 短大卒	平26	原　荘介のギターと唄人生 (湯の町エレジーから日本の子守唄まで)	ギタリスト
76	蠣崎　哲治	昭38	平4	企業の人事管理と最近の話題	楢崎産業(株)取締役人事部長
77	佐野　　力	昭38	平元	進行するオフィス革命ー知の創造の場としてのオフィスづくりー	エス・アンド・アイ(株)取締役社長
78	佐野　　力	昭38	平3	ダウンサイジング、オープンシステムによるコンピュータ革命	日本オラクル(株)取締役社長
79	佐野　　力	昭38	平9	ネットワークコンピュータの社会に及ぼす影響	日本オラクル(株)取締役社長
80	佐野　　力	昭38	平11	外資とグローバルカンパニー	日本オラクル(株)代表取締役社長
81	松浦　英雄	昭38	平12	米国ビジネススクールの経験はどのように日常業務に役立ったか	(株)物産クレジット代表取締役社長
昭和39年卒業					
82	小倉　裕敬	昭39	平5	自治体行政の昨今	北海道企画振興部 地域調整課長
83	木村　幸一	昭39	平2	コンピュータ産業の現状と将来	富士通(株)金融営業部長損保営業部長
84	今野　久子	昭39	平2	ワーキングウーマンが生き生き働く為に	弁護士
85	今野　久子	昭39	平7	働く女性とともに	弁護士
86	星　　功	昭39	平27	私の体験したアメリカ社会：知られざるアメリカ小樽後志消費者協会会長	小樽後志消費者協会会長
87	宮崎　光彬	昭39	昭62	エレクトロニクス産業の現状と将来展望	(株)東芝中部支社電子部品営業部長
昭和40年卒業					
88	生田　忠秀	昭40	平5	日本の官僚機関と行政改革	ジャーナリスト
89	生田　忠秀	昭40	平11	政治と行政の接点はどうなっているか	フリージャーナリスト
90	岩原　秀雄	昭40	平5	損保事業におけるシステムの有効性と課題	共栄火災海上保険(相)北海道総合開発部部長
91	齊藤　慎二	昭40	平16	サッポログループの経営システム変革－純粋持ち株会社体制への移行－	サッポロビールホールディング(株)代表取締役専務
92	千葉　勝茂	昭40	平27	卒業50周年記念講演 「私が経験した中国と貴方達が向き合っている中国」	岡芹法律事務所　顧問(中国室) 元三井物産(上海)貿易有限公司　総経理
93	津山　廣行	昭40	平7	金融政策と商業銀行の経営	(株)北海道拓殖銀行調査部部長
94	馬場　秀治	昭40	平17	ビジネス界を生き抜く知恵	ヤマト電機(株)　監査役

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
95	彦坂　洋二	昭40	平4	電機メーカーのマーケティング戦略 －家電品の商品企画と流通コスト－	三菱電機(株)販路部長
96	彦坂　洋二	昭40	平6	電機メーカーのマーケティング戦略－価格破壊と商品企画－	三菱電機(株)静岡製作所副所長
昭和41年卒業					
97	太田　　尭	昭41	平16	地域金融の経営戦略と役割	札幌信用金庫理事長
98	大西　教文	昭41	平17	アイヌの人達から学ぶもの	前旭川北都商業高等学校教諭、アイヌ文化研究家
99	大森　正志	昭41	平16	雇用され得る人材の育成－マーケティング発想に基づいて－	(社)茨城県経営者協会
100	桶谷喜三郎	昭41	平4	ハイテクを巡る日米貿易摩擦の現状	富士通（株）商務部長
101	柏崎　俊雄	昭41	平3	北海道のコンピュータ事情ー現状と課題ー	アイ・ティ・エス(株)代表取締役
102	柏崎　俊雄	昭41	平9	コンピューター会計と簿記	アイ・ティ・エス(株)代表取締役
103	佐々木喜四	昭41	平6	自治体は今、何を考えているか－札幌市の場合－	札幌市財政部長
104	佐々木喜四	昭41	平11	21世紀の大都市行政	札幌市総務局長
105	下川　哲央	昭41	平2	日本経済の現局面と北海道経済再生の道	(株)北海道銀行情報調査部長
106	下川　哲央	昭41	平12	21世紀・北海道新時代をつくるーグローバル化、デジタル情報革命と地域企業のあり	道銀地域企業経営研究所理事長
107	城座　勝明	昭41	平19	雪印グループ企業不祥事の顛末　－混乱と再建の実体－	セントラルリーシングシステム㈱代表取締役社長 (前　雪印種苗㈱代表取締役員)
108	長田　忠和	昭41	平17	国際経営の理想と現実	International Business Communiucations,Inc社長
109	芳賀　謙治	昭41	平4	企業内企業について	(株)ほくさん総合プランニングセンター取締役社長
110	舟本　秀男	昭41	平5	流通システム最前戦－ウォルマートにみるシステム化－	日本ＮＣＲ(株)取締役流通システム事業部長
111	舟本　秀男	昭41	平25	40年史観で見る“世界”“日本”“北海道”	株式会社財界さっぽろ代表取締役社長
112	宮下　佳廣	昭41	平5	人事管理をめぐる諸問題	出光興産(株)人事部次長
113	宮下　佳廣	昭41	平24	「自然と人との関わり～病院緑化から地域再生へ～」	元出光興産取締役 苫小牧東部石油備蓄社長 千葉大学園芸別科大学院修士課程 同　大学院博士課程、農業博士学位 現　千葉大・園芸学科研究科博士研究員
昭和42年卒業					
114	赤間　　元	昭42	平29	「小樽観光を考える」・・・過去・現在・そして未来へ	中央バス観光開発株式会社　参与
115	井上　周司	昭42	平24	「監査役の役割　－企業の健全な成長に資するために－」	元　ユアサ商事常勤監査役 バンコク駐在、ユアサアメリカ代表経験
116	岩元　　洋	昭42	平20	「品格ある緑丘人へ」	前　伊藤忠紙パルプ㈱　常勤監査役(「緑丘」会報委員)
117	木田　敏斌	昭42	平8	松下電器の経営管理	松下電器産業(株)エアコン事業部経理部長
118	久保　孝夫	昭42	平4	電気事業におけるシステム開発の動向と課題	北海道電力(株)情報システム部情報システム課長
119	小島　則明	昭42	平7	雪印の流通戦略	(株)雪印アクセス営業部長
120	橘木　俊詔	昭42	平29	卒業50周年記念講演「ー経済学者の回想ー　私の転機と決断」	京都大学名誉教授、京都女子大学教授
121	出掘　健夫	昭42	平10	簿記会計教育と人事政策	日本ペイント株式会社人事部
122	永井　恒太	昭42	平10	タイ経済の成長と発展	日本貿易振興会貿易開発部促進事業課APEC担当主幹
123	西村　勝秀	昭42	平7	公認会計士の社会的役割	朝日監査法人代表社員公認会計士
124	服部　英一	昭42 転学	平13	日本の不良債権問題　ー欧米諸国との比較を中心にー	ドイツ証券東京支社マネジング・ディレクター
125	鷲山　俊男	昭42	平27	少子高齢化が君たちに与える影響	(株)ＦＰプラザ・アイ21　代表取締役
昭和43年卒業					
126	石田　建昭	昭43	平21	激動の金融界を生きる	東海東京ファイナンシャル・ホールディングス㈱代表取締役社長 CEO　東海東京証券㈱代表取締役会長CEO
127	海老名　誠	昭43	平9	アジアの経済発展と金融	富士総合研究所国際調査部長
128	海老名　誠	昭43	平13	中国のWTO加盟と日本への影響	(株)富士総合研究所理事
129	海老名　誠	昭43	平22	「発展する東アジアと共に生きて行く」	小樽商科大学ビジネス創造センター長
130	只野　　宏	昭43	平17	グローバル経済と日本の行方	アジア・パルプ&ペーパー　エグゼクティブ・ディレクター
131	田中　良定	昭43	平22	「変貌するアジアと日本」	オリヒロ株式会社　顧問 (前)伊藤忠産機　代表取締役社長
132	丸山　雄三	昭43	平14	創業とグローバリゼーション　ー　ロックンローラーから経営者へ	イースト(株)代表取締役
133	水口　　武	昭43	平10	監査の社会的役割	公認会計士・税理士　斉藤・水口会計事務所所長
昭和44年卒業					
134	東口　　豊	昭44	平21	経営と情報セキュリティ	(株)日本情報セキュリティ認証機構　顧問
135	岡村　宏平	昭44	平元	21世紀型の企業経営	日本経済新聞社日経ベンチャー編集長
136	岡村　宏平	昭44	平12	21世紀の企業経営者像	日経BPソフトプレス　常務取締役編集本部長
137	奥山　瑛明	昭44	平20	「第一線のヘッドハンターが語る、売れる人材と成功するキャリア形成」	サーチ・ファーム・ジャパン㈱Executive Senior Director (1969年から2004年まで伊藤忠商事㈱)
138	佐賀　卓雄	昭44	平20	「金融システムの不安定性とサブプライム・ローン問題」	(財)日本証券経済研究所理事兼主任研究員
139	島崎　憲明	昭44	平11	グローバル連結経営の深化による企業価値の創造と求められる人的経営資源	住友商事(株)取締役
140	末永　仁宏	昭44	平3	公認会計士の社会的役割	公認会計士監査法人朝日新和会計社札幌事務所
141	菅原　八廣	昭44	平4	道内中小企業の現状と対策	菅原総合研究所所長
142	早川　好寛	昭44	平2	企業年金運用の新動向	(株)日本公社債研究所年金情報部長
143	早川　好寛	昭44	平13	新時代の債券格付け　ー日本に相応しい格付けのあり方ー	(株)格付投資情報センター常務取締役

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
144	三村　孝子	昭44	平7	ソフトウエアと女性	(株)エムタック代表取締役
				昭和45年卒業	
145	相蘇　恒孝	昭45	平15	札幌地区商圏の変化と三越の戦略	(株)三越札幌店店長代理
146	塩野　寛次	昭45	平22	「化学品と総合商社」	大阪府商工労働部　大阪府ものづくりB2Bセンターネットワーク担当コーディネーター
147	下斗米寛泰	昭45	平26	販売の最前線	札幌通運(株)代表取締役社長　元損保ジャパン
148	ジャック野辺地真理子	昭45	平15	変化する英国	会議通訳者・フリーライター・英国駐日公使夫人
149	浪田美智枝	昭45	平12	異文化理解のめざすもの　ー交流から共生へー	北海道浅井学園大学非常勤講師
150	萩本　和之	昭45	平7	新しい情報システム(メディア)について	札幌ケーブルテレビジョン(株)
151	平野　光彦	昭45	昭63	北海道のIT動向とIBM戦略	日本IBM(株)北海道金融営業部長
152	水谷　浩二	昭45	平6	企業経営と情報システム活用	日本IBM(株) ITコンサルティング事業部長主席コンサルタント
153	水谷　浩二	昭45	平12	企業はITをどう利用しているか　ーITによる経営変革ー	日本アイ・ビー・エム(株)取締役(ビジネス・イノベーション・サービス担当)
154	山崎　嘉也	昭45	平6	システムと経営	富士通北海道エンジニアリング(株)第3システム部長
155	山田　二郎	昭45	平2	ソフトウェア産業の現状と将来	(株)JTS取締役北海道システム部長
156	山田　二郎	昭45	平16	地域に貢献するソフトウェア会社を目指して･･･体験:起業家精神	(株)シーズ・ラボ代表取締役社長
				昭和46年卒業	
157	入江　健夫	昭46	平16	グローバル時代の異文化コミュニケーション	アイ・ビー・エム・アジア・パシフィック・サービス(株)バンキングインダストリー 理事
158	小野寺泰男	昭46	平25	非メイン事業の国際化	元　東洋ゴム工業株式会社　顧問
159	久保　俊治	昭46短大	平24	著書「羆撃ち」について～狩猟生活と北海道の自然～	牧場経営 ノンフィクション作家(「羆撃ち」ほか)
160	熊木　敬悦	昭46	平23	「中国経済の構造」("中国バブル"は崩壊するか?)	前　三井銀行天津支店長
161	高島　健一	昭46	平18	「ホンダから学んだこと、伝えたいこと」	ホンダ企業年金基金理事長、ホンダ健康保険組合理事長
162	高島　健一	昭46	平23	「経営の原点と変動に強い企業体質作り」	年金積立金管理運用独立行政法人　常勤監事
163	中村　力雄	昭46	平14	北海道の良い企業、悪い企業	公認会計士（中村公認会計士事務所）
164	中山　晴樹	昭46	平26	企業人としての歩み、大学人としての歩み、企業と大学に共通する改革の成功事	大阪成蹊大学マネジメント学部長　(元松下電器産業(株)、スペイン松下電器,松下ロジスティックス)
165	名達　博吉	昭46	平18	マーケティング戦略の策定と実践	いすゞ自動車(株)上席執行役員
166	真木　　明	昭46	平21	ソフトウェア委託を通して観た中国(大連、藩陽)のエネルギー	東芝ソリューション㈱常勤監査役(前　東芝ソリューション㈱取締役常務経営企画部長)
167	渡部　　猛	昭46	平14	21世紀のモノづくり　ー松下電器の挑戦	松下電器産業(株)システムソルーション事業本部購買グループグループマネージャー
168	渡部　　猛	昭46	平27	製造業における「物づくりの心」　ー物をつくるまえに人をつくるー	松下電器、大阪市教育委員会
				昭和47年卒業	
169	大矢　繁夫	昭47	平18	「研究者の道を歩んで商学部・商学研究科で学ぶ事」	小樽商科大学大学院商学研究科 現代商学専攻
170	境　　雅信	昭47	平18	「学生時代の意義　ー小樽商大で育むもの、育まれるものは何かー	富士フィルムグラフィックシステムズ
171	中山　正光	昭47	平7	組織における情報の有用性・重要性	(株)日立総合計画研究所主任研究員
172	鳴沢　　隆	昭47	平19	2015年の日本ー大きく変貌する日本の社会と産業ー	㈱野村総合研究所代表取締役副社長
173	新田　純一	昭47	平9	信託銀行の現在と未来ー日本版「ビックバン」を迎えてー	三菱信託銀行大阪支店営業第3部部長
174	山本眞樹夫	昭47	平18	「研究者の道を歩んで商学部・商学研究科で学ぶ事」	小樽商科大学理事(総務担当副学長)
				昭和48年卒業	
175	秋光　　実	昭48	平16	グローバル企業における企業経営と情報化革命	伊藤忠商事(株)執行役員　IT企画部長
176	熱田　洋子	昭48	平19	北海道の活性化のために　－観光を中心として－	北海道庁　観光のくにづくり推進局長
177	伊藤　直紀	昭48	平19	日本の金融機関の変遷とマーケットの変化 －我が国の金融機関を取り巻く環境の変化と貯蓄から投資への流れの本質－	みずほ投信投資顧問㈱代表取締役副社長
178	賀茂　　隆	昭48	平28	タイ国におけるカントリーリスクと投資	元タイ国NBCアジア株式会社代表取締役社長 新都山流尺八大師範　明暗尺八道友会師範及び理事
179	佐藤　時朗	昭48	平23	「会社の建て直しについて」(米国での会社再建)	住友商事北海道株式会社　代表取締役社長
180	武田　充広	昭48	平10	ビール市場におけるアサヒビールの戦略	アサヒビール(株)首都圏関信越地区本部総務部長
181	三浦　俊一	昭48	平21	外国為替：世界で最も洗練された金融商品	FXプライム㈱代表取締役社長
				昭和49年卒業	
182	秋吉　英彦	昭49	平24	石油開発会社の勤務経験～小樽からアラビアへ	アラビア石油(株)常勤監査役
183	大石　一良	昭49	平11	実務家がみた会計ビックバンー会計基準のｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ化ー	朝日監査法人代表社員、公認会計士
184	大石　一良	昭49	平18	「会計監査を取り巻く環境変化」　ー会計監査の厳格化ー	あずさ監査法人札幌事務所
185	大塚　義幸	昭49	平6	食品卸売企業の経営戦略	雪印乳業(株)営業企画部マーケティング・グループ課長
186	大塚　義幸	昭49	平21	日本のチーズ市場とマーケティング	チェスコ㈱代表取締役社長(前雪印乳業㈱常務取締役)
187	佐藤　良雄	昭49	平9	労働市場の変化	キャリアバンク株式会社代表取締役
188	澤田　樹徳	昭49	平4	アジアにおける華僑資金の動向	(株)さくら銀行アジア部華僑室長
189	澤田　樹徳	昭49	平8	国際金融市場と日本経済	さくら銀行国際金融部ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾌｧｲﾅﾝｽｸﾞﾙｰﾌﾟ次長
190	安田　睦子	昭49	平19	北海道の地域まちづくりに関わって	(有)インターラクション研究所

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
191	山元　克美	昭49	平7	データベースとその利用	(株)丸井今井情報システム室長
昭和50年卒業					
192	石田　　守	昭50	平12	リサイクル産業の現状と将来	三井物産金属原料(株)大阪支店 支店長代理兼銑鉄スクラップ営業部長
193	浦島　　久	昭50	平3	地域からの英語戦略	(株)ジョイ・インターナショナル代表取締役
194	浦島　　久	昭50	平10	ベンチャービジネス入門　ー小さな企業の起こし方ー	(株)ジョイ・インターナショナル代表取締役
195	小笠原一雄	昭50	平24	「シルバーな人びと」 (”温泉旅館・ホテル型デイサービス”と”ヘルパー付個人旅行”)	株式会社旅日記 代表取締役 有限会社ハーディズ 代表取締役
196	城　　隆二	昭50	平29	自動車事故紛争処理について	損害保険料率算出機構神戸自賠責調査事務所認定第1課長
197	田中　雅幸	昭50	平9	味の素k.kの長期計画	味の素株式会社経営企画部部長
198	春田　裕明	昭50	平18	資産流動化ビジネスについて」ー信託への期待と展望ー	三菱UFJ不動産販売(株)代表取締役副社長
昭和51年卒業					
199	石田　朋子	昭51	平11	現代日本社会における男女共存のあり方 ー夫婦のタテマエとホンネー	東京都環境科学研究所外部評価委員会委員、 東京都保健医療協議会委員等
200	石田　朋子	昭51	平13	地球の環境問題と東京都の環境政策	東京都環境科学研究所外部評価委員会委員
201	植木　　宏	昭51	平25	キリンビールの戦略　　ー組織活性化とそのポイントー	キリンビールマーケティング株式会社　代表取締役社長
202	田中　　誠	昭51	平17	コンビニエンス事業とセイコーマート	(株)セイコーマート本部副社長
203	成田　淳司	昭51	平5	円高と日本産業の空洞化	(社)国民経済研究協会主任研究員
204	平井　睦雄	昭51	平28	やれば出来るベンチャー企業から東証一部上場へ ～起業するための企業選びのポイント～	株式会社進学会代表取締役・会長
昭和52年卒業					
205	合場　　直人	昭52	平25	人を想う力。街を想う力。ー共通価値の創造	三菱地所株式会社代表取締役専務執行役員
206	櫻庭　秀和	昭52	平8	金融規制緩和と銀行の対応	さくら銀行西荻窪支店副支店長
207	櫻庭　秀和	昭52	平28	同族経営は問題なのか　～企業というものを考える～	ミツワ電機(株)取締役
208	下中　　博文	昭52	平25	信用金庫と地域との絆～地域に信用金庫あり　小なれどその絆強し～	小樽信用金庫専務理事
209	高橋　公男	昭52	平11	高齢社会における在宅介護サービス事業	(株)ジャパンケアサービス　常務取締役 営業担当兼在宅営業部長
210	中村　弘治	昭52	平27	外食産業における安全安心の保証への取組み	株式会社イオンハート 代表取締役社長
211	藤村　　隆	昭52	平22	「目指せ!リーダー」	サッポロビール(株)常務執行役員首都圏本部長
212	吉田　広志	昭52	平6	リース会計の最近の動向	三井リース事業(株)経理本部経理室
213	渡邊　玉範	昭52	平28	クボタグループのCSR経営の取り組み	クボタワークス(株)兼クボタサンベジファーム(株) 代表取締役社長
昭和53年卒業					
214	滝　　浩之	昭53	平24	「インターネットサービスプロバイダー(ISP)の戦略 ～ニフティ、ヤフーなどの動向について」	富士通エフ・オー・エム取締役マーケティング本部長兼地域営業本部長 名古屋大学大学院人間情報学研究科 博士後期課程満期退学
215	樽谷　篤知	昭53	平7	北東アジア諸国の企業経営・企業交流	日本生命(相)ニッセイ総合研修所能力開発室課長
216	永井　尚子	昭53	平15	税理士になりませんか	税理士　大萱生税理士事務所
217	村上眞佐子	昭53	平29	私の社会人七変化	(前)学校法人北海道鹿光学園青山工学・医療専門学校、 (株)データクラフト等
218	渡辺　克仁	昭53	平21	一灯照隅・万灯照国	銀嶺バス㈱代表取締役社長
昭和54年卒業					
219	朝日　博昭	昭54	平27	私の履歴書	株式会社ヤマチマネジメント　ブランドソリューション部 ブランディング ディレクター クリエーティブ ディレクター
220	石岡　久和	昭54	平24	銀行IT戦略の現在・過去・未来	太陽神戸銀行入行　株式会社さくらケーシーエス常務執行役員
221	太田　研一	昭54	平28	企業の求める人材とキャリア形成 ～グローバル企業で仕事をするということ～	元東芝人事部等
222	金子　義之	昭54	平6	高等学校における情報処理教育の現状と課題	深川東商業高等学校教諭
223	金子　義之	昭54	平6	高等学校における情報処理教育の現状と課題	深川東商業高等学校教諭
224	鹿内　正孝	昭54	平24	「人生は出会い」	(株)玄米酵素　代表取締役社長
225	鷹栖　　博	昭54	平22	「SEと会計～IFRSで会計ビジネスを変える!」	(株)シナンシャル・システム・コンサルティング 代表取締役社長
昭和55年卒業					
226	加藤ひろみ	昭55	平26	女性の生き方は自由自在	税理士法人アグス　社員税理士
227	川西　将文	昭55	平23	「日本の有料放送とこれからのテレビ」	スカパーJSAT(株)執行役員常務スカパー事業部門 マーケティング本部長
228	高橋　伸夫	昭55	平14	企業の境界を超えた組織の時代	東京大学大学院経済学研究科教授
229	田中　一良	昭55	平11	酒造業の面白さと将来性	田中酒造(株)代表取締役
230	成松　郁子	昭55	平20	「ラジオと出会って」	コミュニティーFM　三角山放送局パーソナリティー
231	山本千雅子	昭55	平23	「政策評価やマーケティング、官民共同等に関するテーマ」	グラデュウス・マルチリンガルサービス(株)代表取締役
昭和56年卒業					
232	近江　秀彦	昭56	平20	「北海道洞爺湖サミット道民会議の取り組み」	北洋銀行本店営業部融資部長
233	牛腸　訓安	昭56	平8	流通構造の変化と食品メーカーの対応	味の素(株)流通政策グループ長
234	牛腸　訓安	昭56	平10	流通の変化と食品メーカーのマーケティング	味の素(株)調味料・油脂事業本部ギフト部専任課長

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
235	近藤　朋子	昭56	平23	「専業主婦が夢を実現、今税理士として充実した毎日を」	税理士法人杉下会計事務所
236	八尾　稔啓	昭56	平20	「自己効力を高めるキャリア開発法」	(有)エイ・エル・ピー　代表取締役社長
237	八尾　稔啓	昭56	平22	「創造的に課題を乗り越える智慧」 －健康心理学的にみるキャリア(生き方)開発の秘訣－	(有)エイ・エル・ピー　代表取締役社長
昭和57年卒業					
238	石積　尚幸	昭57	平18	IT業界動向「グローバル・オペレーションを可能にする強靭なIT」	日本ヒューレットパッカード株式会社　取締役副社長
239	石積　尚幸	昭57	平23	「企業のグローバル化とそれを実現するIT」	日本オラクル(株)専務執行役員
240	市原　昭一	昭57	平19	バイオ燃料の現状と日本への導入課題　－石油に代わるもの－	住友商事㈱資源・エネルギー事業開発部バイオ燃料チーム長
241	外園　知代	昭57	平29	A wonderful world through learning English (英語で広がる楽しい世界)	主婦
242	中野　　健	昭57	平24	「地域経済と中小企業　～仕事を通じて国益への貢献を考える～」	北海道経済産業局 産業部産業振興課長
243	柳沼　雅彦 柳沼　聡美	昭57 昭58	平22	「地域と共に生きる」－大企業で働くこと、中小企業で働くこと－	(株)柳沼　代表取締役
244	山岸　紀寛	昭57	平29	広告マーケティングはおもしろい?好きこそ大事!	(株)電通執行役員兼電通イージスネットワーク中国CEO
昭和58年卒業					
245	大沼　伯史	昭58	平14	企業コミュニケーションがブランドにもたらすもの	(株)電通広報室企画部主幹兼VI事務局
246	大沼　伯史	昭58	平15	企業コミュニケーション論	(株)電通コーポレート・コミュニケーション局　業務企画部主管
247	得能　直明	昭58	平21	金融庁と金融検査	金融庁検査局総務課専門検査官 (前　北海道拓殖銀行総合企画室主査)
248	中村　哲也	昭58	平23	日本の投資信託の現状	野村證券株式会社所沢支店
249	蜂谷　　涼	昭58	平13	世紀を超えるにんげんの仕事	作　家
250	山下　一也	昭58	平7	高校教育の現状	石狩高等学校教諭
昭和59年卒業					
251	佐藤　　等	昭59	平22	「P.F.ドラッカーに学ぶ自己実現の方法」	佐藤等公認会計士事務所　所長
252	漆崎　博之	昭59	平20	「経営改革」	㈱フルキャスト　代表取締役社長
253	鈴木　伸明	昭59	平23	商工会議所の活動と地域活性化	札幌商工会議所　国際部長
254	吉川　美樹	昭59	平9	三井物産をはじめとする企業内情報システムにおけるパソコン活用例	三井物産株式会社
255	吉村　　匠	昭59	平15	メディアとマーケティング －成熟社会に向けた新しいマーケティングチェーンを目指して－	(株)トライ・ビー・サッポロ取締役
256	吉村　　匠	昭59	平25	クリエイティブな北海道をアジアに広げる取組み	一般社団法人北海道食産業総合振興機構(フード特区機構)出向 販路拡大支援部部長　NPO法人札幌ビズカフェ理事　副代表
昭和60年卒業					
257	五十嵐文雄	昭60	平20	「金融サービスとそれを支えるIT」	野村総合研究所システムコンサルティング事業本部 上席システムコンサルタント
258	佐藤　栄一	昭60	平21	都市のブランド化を実践する～札幌国際短編映画祭の現場から	㈲プランナーズ・インク　代表取締役
259	佐藤　憲明	昭60	平14	北海道経済の現状と経済産業局の取組み	経済産業省　北海道経済産業局総務企画課
260	佐藤　憲明	昭60	平16	北海道経済を活性化するために－観光サービス産業からのアプローチ－	北海道経済産業局産業部サービス産業室室長補佐
261	瀬戸口孝治	昭60	平19	銀行規制の枠組み　－邦銀の国際業務戦略－	金融庁監督局銀行第一課課長補佐
昭和61年卒業					
262	落合　裕介	昭61	平13	中小企業経営の現状　－インターンシップの受け入れ体験を交えて－	(株)落合専務取締役
263	高 嶋　英哉	昭61	平5	企業会計における予算管理の重要性とその実務	(株)東芝本社主計部管理(予算)担当
264	高橋　直樹	昭61 平18院	平19	人に良くする仕事は人を育てる	北海道農業協同組合中央会 JA改革推進部 総合コンサル課調
265	名川未知郎	昭61	平13	インドネシアの政治経済危機をどのように理解したらよいか	三井住友銀行(株)国際法人営業部上席部長代理
266	布目　彰秀	昭61	平15	欧米大学院ビジネス・スクール事情	中小企業総合事業団調査・国際部　調査第一課調査役
267	平野　正喜	昭61	平19	NGNとBREWに見るインターネットとケータイの現状と将来 －Web2.0時代を超えて大きく進化するネットワークと携帯電話はビジネスをどう変えるか－	ランドッグ・オーグ平野正喜事務所　代表(執筆者・講使)
268	水越　和幸	昭61	平13	世界の中の北海道経済　一製造業を中心に一	北海道新聞社東京支社政治経済部記者(財界担当)
269	水越　和幸	昭61	平28	新聞をどう読み、活用するか	北海道新聞本社編集委員
270	吉田　理宏	昭61	平26	20代で成長し30代で輝くための、会社の選び方・働き方	WAYOUTカンパニー(株)代表取締役
昭和62年卒業					
271	昆野　照美	昭62	平26	好きなことを形に　～キャリアチェンジやワークライフバランス～	C.W.I(カラーコーディネーター　自営)
272	齊藤　幸喜	昭62	平23	「アメリカの会計について」	米国公認会計士　大島齊藤法律事務所代表
273	中村　嘉成	昭62	平20	「水産品における日本の流通システムと世界の消費動向」	㈱丸中しれとこ食品代表取締役社長
274	中村　好伸	昭62	平29	農業におけるビジネスマインド；めげなければなんとかなる	新篠津つちから農業㈱　代表取締役
昭和63年卒業					
275	池田　敏也	昭63	平14	異文化交流から生まれる新たな視点	札幌米国総領事館
276	狩野　知代	昭63	平17	一杯のコーヒーから広がる豊かな日々のために	GLAUBELL代表
277	高辻　哲哉	昭63	平8	現代高校生気質	北海道工業高等学校教諭
278	堤　千夏子	昭63	平28	コミュニケーション学　～社会人として必要なコミュニケーション学～	国立研究開発法人　日本医療研究開発機構
279	沼田　博光	昭63	平26	北海道を世界に売り込め! 地方テレビ局の挑戦	北海道テレビ放送(株) 営業局国際メディア事業部チーフマネージャー

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
280	野村　文吾	昭63	平24	お客さま密着!地域に貢献する十勝バスの経営 ～ 40年ぶりの利用者数増加の実例 ～	十勝バス(株)代表取締役社長
				平成元年卒業	
281	石原　宏治	平元	平18	「記者の取材手法」	北海道新聞社余市支局長
282	岩見　真彦	平元 平27院	平26	ソニーは復活できるか?	みずほ銀行札幌支店　課長
283	尾形　　毅	平元	平26	東日本大震災から3年、被災地・宮城の復興に取り組む	(株)仙台銀行経営企画部長、仙台緑丘会副会長
284	近藤　小波	平元	平14	拡大する女性の職場	富士通(株)　北海道支社　営業支援部
285	田畑　知之	平元	平24	「報道の現場から～ファクトから先を見る～」	毎日新聞大阪本社　経済部副部長待遇
286	中井　　令	平元	平21	絵本を通して伝えたいこと	絵本作家
				平成2年卒業	
287	伊藤　正道	平2	平17	魅力あるビジネスプランの描き方　ーバス会社が取り組む銭湯事業ー	北海道中央バス(株)関連事業部
288	小川　　徹	平2	平16	法曹をめざそう	弁護士(滋賀県)
289	城市　　猛	平2	平25	就職体験(就職活動から今日に至るまで)	シティバンク銀行株式会社札幌支店長
290	関崎　裕一	平2	平13	21世紀の情報産業(株)　ー情報の運用ー	(株)ソフトフロント副社長
291	塚原　敏夫	平2	平28	職業の選択　～出会いから始まる仕事～	(株)三國プランニング代表取締役
292	西　祐一郎	平2	平15	天気予報というビジネス	(株)ウェザーニューズ常務取締役
293	西　祐一郎	平2	平26	Collective Intelligence (集合知)による新しい天気予報	(株)ウェザーニューズ iCorner グループリーダー
				平成3年卒業	
294	大谷　和広	平3	平15	職業としての弁護士の魅力	弁護士　小黒芳郎法律事務所
				平成5年卒業	
295	浅井　　昌	平5	平29	企業における人事の「しごと」	旭硝子株式会社人事部人材開発企画担当部長
296	小嶋　京子	平5	平28	会計専門職から考える職業意識	税理士法人セントラル代表社員(公認会計士・税理士)
297	長尾　吉祐	平5	平19	働くということ　ー人材ビジネスの現場からの教訓ー	㈱ジョブダイレクト 代表取締役社長 CEO(前　㈱リクルートGM)
				平成6年卒業	
298	荻原　恵理	平6	平15	私と囲碁	ネッツトヨタ札幌(株)
299	河島　義尚	平6	平15	財務諸表監査についての基礎知識	公認会計士　朝日監査法人第3事業部
300	下里　興史	平6	平18	「地域自治体における構造改革とは」	津島市役所市長公室企画政策課　行政経営グループ　主査
301	李　濟　民	平6院	平18	「研究者の道を歩んで商学部・商学研究科で学ぶ事」	小樽商科大学大学院商学研究科　アントレプレナーシップ専攻長
				平成7年卒業	
302	歌原　邦芳	平7	平23	「松尾ジンギスカンの創業者が孫に伝えた7つの繁盛法則」	株式会社　マツオ　常務取締役
303	佐藤　盟信	平7	平27	我が国の対アフリカ外交について	在タンザニア大使館 一等書記官/経済協力班長
304	竹村　隆宏	平7	平27	アフリカビジネス最前線	味の素(東京)課長
305	三神　仁美	平7	平25	社会で求められる人となるために～夢を描ければ何だってできる!	三神仁美税理士事務所
306	渡部　成人	平7院	平25	グローバルに考え、ローカルに活躍しよう!	国土交通省北海道開発局開発監理部 開発調整課事業調整専門官
				平成8年卒業	
307	遠藤　聡史	平8	平20	「小樽市の開発」	価値開発㈱不動産部営業部次長
308	小野　優子	平8	平18	「伝えることと伝わること」	北海道テレビ放送(株)アナウンサー
309	佐藤　好美	平8	平20	「女性SE／カーナビ・ソフト開発に挑戦」	シーズ・ラボ㈱ナビ事業本部データベース開発部 セクションマネージャー
310	林　　岳	平8	平21	政府国際会議に参加して	農林水産省農林水産政策研究所　食料領域　主任研究官
311	堀内　康平	平8	平27	しごとのこと	七十七銀行
312	三上　　淳	平8	平26	卒業までにゼッタイ身につけておいた方が良いビジネススキルベスト3	かもめソリューションズ　代表/プロコーチ
313	山内　城治	平8	平21	ケータイビジネスと青少年保護問題	ピットクルー㈱取締役経営企画室長
				平成9年卒業	
314	流田　和啓	平9	平24	「商社人生奮闘記～もがき楽しめ」	住友商事株式会社 大阪産業インフラ・輸送機部 機械システム課　課長代理
315	山谷智恵子	平9	平27	仕事を遊びに。遊びも仕事に	(株)アイム 専務取締役

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
				平成10年卒業	
316	浅元　薫哉	平10	平15	対日直接投資は日本を救うか?	日本貿易振興機構経済分析日本経済情報課
317	白石　友柄	平10	平29	これからの学び方～自尊感情やMIとアクティブラーニングとの関係	NPO教育支援協会北海道専務理事
318	須田　美貴	平10 平29院	平29	マーケと英語の仕事の話	株式会社ムーンショット・マーケティング 代表取締役
319	野元美奈子	平10	平17	年金制度/資産運用業務に関し	アライアンス・キャピタル・アセット・マネジメント(株)
				平成11年卒業	
320	東野　里絵	平11	平25	後悔しないキャリアの選び方	株式会社HBA　自治体システム本部 営業システム部　システム課　課長代理
321	三嶌　晃弘	平11	平22	「税金と税理士の仕事」	三嶌晃弘税理士事務所
322	溝渕　新蔵	平11院	平16	革新的ビジネスモデルの構築の方法論 －モデル設定による人生と仕事の創造・開発方法－	アピアプリント(株)代表取締役会長
				平成12年卒業	
323	阿部　洋介	平12	平29	CFO(最高財務責任者)の仕事～経理キャリアの築き方～	パイオニアDJ(株) 管理統括グループエグゼクティブディレクター
324	高本　淳子	平12	平27	挑戦が夢・目標を生み、想いを自覚させてくれた	ダイゴー株式会社　商品アドバイザ
				平成13年卒業	
325	北風いずみ	平13	平28	女性だからこそできる一生涯の仕事につけた! 夢をもって仕事できる喜びに感謝!	ノエビア　ビューティサロンgreen+caféオーナー
326	鈴木宏一郎	平13院	平15	ホットペッパー快進撃の秘密	(株)リクルート狭域デビジョン仙台グループ ホットペッパー仙台版編集長
327	服部　統幾	平13院	平15	仏作って魂入れ“る”ーアントレプレナーシップー	日本政策投資銀行新規事業部調査役
328	松田　一敬	平13院	平13	21世紀の北海道の企業像	北海道ベンチャーキャピタル(株)常務取締役
				平成14年卒業	
329	柴田　康幸	平14	平28	私のキャリア論	株式会社マイナビ紹介事業本部第1営業統括部 北日本営業課東北営業2課
330	増子　敬恭	平14	平17	若手社会人による業務報告と就職活動に関して	(株)野村総合研究所　T-STARプロジェクト
				平成15年卒業	
331	伊藤　未来	平15	平17	若手社会人による業務報告と就職活動に関して	(株)日立製作所　金融システム事業部
332	栗山　規夫	平15	平18	「社会人4年目」　一働くことの意味を考える一	(株)ディー・エヌ・エー
333	澁谷　　樹	平15院	平25	私の経済法研究～消費者のための真の行政を考える～	(独)農林水産消費安全技術センター仙台センター 業務管理課専門調査官
334	中村　亮一	平15	平19	なぜ私たちは東京就職を選んだのか?学生時代の私、今の私	㈱エス・オー・ダブリュー不動産・証券コンサルティング事業部
335	中村　亮一	平15	平23	25周年記念講義①:エバーグリーン講座の未来	㈱エス・オー・ダブリュー不動産・証券コンサルティング事業部
336	林　　千尋	平15	平18	「社会人4年目」　一働くことの意味を考える一	カゴメ(株)
337	山本　真史	平15	平17	若手社会人による業務報告と就職活動に関して	みずほ銀行　青山通り支店
338	萬　　慎吾	平15	平29	キャリアパスと事業の見方、考え方	みずほ銀行釧路支店　支店長
				平成16年卒業	
339	斎川　貴代	平16	平22	「ベンチャー企業での就業経験とセルフエンパワーメントについて」	株式会社　見果てぬ夢　マーケティング本部
340	土井　尚人	平16院	平17	身近なチャンスをビジネスの成功に導く方法	(株)ヒューマン・キャピタル・マネジメント代表取締役
				平成17年卒業	
341	田中　康浩	平17 平19院	平26	アセットマネジメント(資産運用)ビジネスとその使命 ～日本に長期投資は根付くのか～	DIAMアセットマネジメント株式会社 投資顧問部門 業務開発グループ　課長
342	平子　知明	平17	平19	なぜ私たちは東京就職を選んだのか?学生時代の私、今の私	ホンダ技研工業㈱
343	平子　知明	平17	平23	25周年記念講義①:エバーグリーン講座の未来	ホンダ技研工業㈱
				平成18年卒業	
344	須川　正啓	平18	平21	公務員の仕事とワークライフバランス(アタック25優勝の話も含め)	総務省北海道総合通信局
345	須川　正啓	平18	平23	25周年記念講義①:エバーグリーン講座の未来	総務省北海道総合通信局
346	成田　祐樹	平18 平21院	平22	「政治に関心を持たないと損をする」	小樽市議会議員
347	西村　　歩	平18	平19	なぜ私たちは東京就職を選んだのか?学生時代の私、今の私	㈱電通マネージメントサービス
348	吉本　平史	平18院	平18	ホスピタリティ・コミュニケーション	アー・アーカイブ代表
				平成20年卒業	
349	佐藤　絵美	平20	平27	私が今までの社会人生活から農業を仕事にするまでと今の農業	農業
350	山口　和佐	平20	平20	「待っている→自分から変える」	札幌市議会議員
				平成21年卒業	
351	小林　祐介	平21	平28	U-30企画　10年後の自分を描く	日本デイリーネット株式会社
				平成22年卒業	
352	葛西さとみ	平22 MBA	平24	「会社設立から経営実務まで」「貴方も今から経営者」	有限会社 Kasai Office 行政書士　葛西さとみ事務所
353	劉　　莎	平22 平24 博士前期	平24	「留学は何が得られる」	小樽商科大学大学院博士後期課程

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
				平成23年卒業	
354	林　　春美	平23 MBA	平25	地方都市の歯科医院における経営戦略	医療法人社団林歯科医院　理事　歯科医師
355	小笠原拓 哉	平23	平29	U-30企画　エバーグリーン講座と緑丘会ネットワークの活用方法	株式会社三菱東京UFJ銀行
356	横 山美智子	平23	平29	「挫折」から学んだ私の「成長」:社会人として、親として	全国労働者共済生活協同組合連合(全労済)
				平成24年卒業	
357	阿部　眞久	平24 MBA	平25	夢を力に	NPO法人ワインクラスター北海道　代表理事
358	菊谷　洋介	平24	平28	U-30企画　10年後のジブンを描く	三菱重工株式会社
359	寺下友香梨	平24	平28	U-30企画　10年後のジブンを描く	株式会社リクルートコミュニケーションズ
360	根廻　早紀	平24	平29	U-30企画　エバーグリーン講座と緑丘会ネットワークの活用方法	凸版印刷株式会社
				平成25年卒業	
361	佐藤　　司	平25 MBA	平27	地域メディアとしてのローカル放送局の役割	札幌テレビ放送株式会社 総務局人事部長
				平成26年卒業	
362	鎌田　由実	平26	平29	U-30企画　エバーグリーン講座と緑丘会ネットワークの活用方法	札幌市立北野台中学校
				平成27年卒業	
363	北崎　千鶴	平27 MBA	平28	北海道のポテンシャルを仕事にする。 ～商大ビジネススクールから得たもの～	株式会社クリエイティブオフィスキュー執行役員
364	黒川　博昭	平27 MBA	平26	会社の経営に関する失敗?中心の昔話	富士通(株)顧問,同社元代表取締役社長

逝去された講師の方々

NO	氏　名	卒業年度	講義年度	テ　ー　マ	現職等（※ご所属等は当時のものを記載しています）
1	奥井　英作	昭24	平12	資金会計理論の考え方と効用　ーキャッシュフロー計算書に関連してー	公認会計士　奥井英作事務所
2	新谷　昌明	昭24	平2	小樽の現状と将来展望	小樽市長
5	作田　和幸	昭30	平12	高齢社会政策に欠けるもの	(株)CWE代表取締役
6	森田松太郎	昭30	平16	企業の見方	ARI研究所理事長
10	山田　章一	昭31	平12	初めて作られた札幌市のバランスシート	公認会計士　山田章一事務所
11	木梨　芳一	昭32	昭63	ニュー・マスコミ論	北海道新聞社編集局次長
12			平11	情報革命とマスコミ産業	北海道文化放送(株)代表取締役社長
13	守分　寿男	昭32	平13	私の演出論	元HBCディレクター
14	米光　啓弥	昭32	平23	「社)緑丘会・財)小樽商科大学後援会の公益法人化への取組み」	税理士米光啓弥事務所 公益法人小樽商科大学後援会監事
27	小原　芳春	昭35	昭62	ニュー・マーケティング論	(株)イトーヨーカ堂専務取締役
28			平9	イトーヨーカドーの経営戦略	(株)デニーズジャパン代表取締役社長
29			平14	流通業の課題(IYグループの例)	(株)デニーズジャパン相談役(前代表取締役社長)、(社)緑丘会理事長
30	小林　達明	昭35	平7	国際商業会議所の活動について	国際商業会議所日本委員会事務局次長
33	鷹木　　護	昭35	昭63	ニュー・マーケティング論	(株)電通北海道支社長
38	川脇　光男	昭36	平10	わが社における分社化と再統合	共和紙業(株)会長
51	奥田　順一	昭37	平3	最近の生命保険事情	日本生命保険(相)財務審査部調査役
52		昭37	平元	生命保険事業の現状と課題	日本生命保険財務審査部調査役
55	鹿野　敏秀	昭37	平3	研究開発と地域づくり	(社)東北インテリジェントコスモス構想推進協議会 事務局次長・企画部
62	高木　晃一	昭37	平元	為替相場と企業活動	東京銀行(株)札幌支店長
63			平4	為替相場の変動と企業行動(英語講義)	財団法人　日本船舶振興会参与
64			平5	NGO(民間援助機関)の国際的活動について	(財)日本船舶振興会国際業務部長
65			平12	NPO(民間非営利組織)の経営論	シップ・アンド・オーシャン財団アドバイザー
67	中野　淳一	昭37	昭63	証券市場論	野村証券(株)常務取締役
70	平賀　元宏	昭37	平4	損害保険の現状と課題ー現場の視点ー	安田火災海上保険(株)代理店業務開発部長
72	荒澤　建一	昭38	平元	変動する世界経済と商社活動	三菱商事(株)大阪支社経理部長
121	出掘　健夫	昭42	平10	簿記会計教育と人事政策	日本ペイント株式会社人事部
132	丸山　雄三	昭43	平14	創業とグローバリゼーション　ーロックンローラーから経営者へ	イースト(株)代表取締役
133	水口　　武	昭43	平10	監査の社会的役割	公認会計士・税理士　斉藤・水口会計事務所所長
290	関崎　裕一	平2	平13	21世紀の情報産業(株)　ー情報の運用ー	(株)ソフトフロント副社長

ご冥福をお祈りいたします

小樽商科大学
エバーグリーン講座
講師一覧
開催年度順

【昭和 62 年度～平成 29 年度】

Instructor list

昭和62年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	7月22日	宮　崎　光　彬	昭39	エレクトロニクス産業の現状と将来展望	(株)東芝中部支社電子部品営業部長
2	7月23日	小　原　芳　春	昭35	ニュー・マーケティング論	(株)イトーヨーカ堂専務取締役
3	7月24日	青　木　匡　光	昭33	情報時代の企業人	(株)エーラン社長
4	7月25日	青　木　鎮　夫	昭35	日本企業の戦略経営	経営コンサルタント戦略経営協会理事
5	7月27日	大　谷　芳　弘	昭33	国際化時代の金融	ユアサ産業(株)常務取締役
6	7月28日	青　木　雅　明	昭37	日本経済の新局面	参議院第二特別室(経済企画庁より出向)

昭和63年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	7月19日	平　野　光　彦	昭45	北海道のIT動向とIBM戦略	日本IBM(株)北海道金融営業部長
2	7月19日	氏　家　幸　演	昭34	拓銀の情報戦略	北海道拓殖銀行情報開発部長
3	7月22日	青　木　雅　明	昭37	日本経済の新局面	経済企画庁経済研究所
4	7月23日	木　梨　芳　一	昭32	ニュー・マスコミ論	北海道新聞社編集局次長
5	7月25日	野　島　和　夫	昭34	地方経済論	(北海道拓殖銀行調査情報本部調査部長
6	7月26日	中　野　淳　一	昭37	証券市場論	野村証券(株)常務取締役
7	7月27日	鷹　木　　護	昭35	ニュー・マーケティング論	(株)電通北海道支社長
8	7月28日	西　村　捷　敏	昭37	国際経営論　-国際化時代の人材開発-	(株)日本電気総合経営研修所取締役経営教育事業部長

平成元年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	7月17日	加　藤　芳　勝	昭37	グローバル化する企業の中での私ー東京,ﾓｽｸﾜ,北京で燃えているものは何かー	兼松江商(株)第4部部長
2	7月18日	高　木　晃　一	昭37	為替相場と企業活動	東京銀行(株)札幌支店長
3	7月19日	奥　田　順　一	昭37	生命保険事業の現状と課題	日本生命保険財務審査部調査役
4	7月20日	岡　村　宏　平	昭40	21世紀型の企業経営	日本経済新聞社日経ベンチャー編集長
5	7月21日	佐　野　　力	昭38	進行するオフィス革命ー知の創造の場としてのオフィスづくりー	エス・アンド・アイ(株)取締役社長
6	7月21日	荒　沢　建　一	昭38	変動する世界経済と商社活動	三菱商事(株)大阪支社経理部長

平成2年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	7月9日	柏　谷　達　雄	昭37	アサヒビールのマーケティング戦略	アサヒビール(株)理事岡山支店長
2	7月10日	新　谷　昌　明	昭24	小樽の現状と将来展望	小樽市長
3	7月10日	下　川　哲　央	昭41	日本経済の現局面と北海道経済再生の道	(株)北海道銀行情報調査部長
4	7月11日	斉　藤　一　郎	昭36	近時ジャーナリズム事情	朝日新聞東京本社「AERA」スタッフライター
5	7月11日	山　田　二　郎	昭45	ソフトウェア産業の現状と将来	(株)JTS取締役北海道システム部長
6	7月12日	今　野　久　子	昭39	ワーキングウーマンが生き生き働く為に	弁護士
7	7月13日	重　松　政　男	昭36	金融の自由化、国際化と金融業	(株)山一証券経済研究所取締役調査部長
8	7月13日	木　村　幸　一	昭39	コンピュータ産業の現状と将来	富士通(株)金融営業部長損保営業部長
9	7月16日	早　川　好　寛	昭44	企業年金運用の新動向	(株)日本公社債研究所年金情報部長
10	7月16日	香　西　敏　男	昭30	企業の求める戦略と人材　ーグローバルな経済環境と市場との対応において	カシオ計算機(株)専務取締役

平成3年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	12月2日	柏　崎　俊　雄	昭41	北海道のコンピュータ事情ー現状と課題ー	アイ・ティ・エス(株)代表取締役
2	12月2日	鹿　野　敏　秀	昭37	研究開発と地域づくり	(社)東北ｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝﾄｺｽﾓｽ構想推進協議会事務局次長・企画部長
3	12月2日	浦　島　　久	昭50	地域からの英語戦略	(株)ジョイ・インターナショナル代表取締役
4	12月3日	佐　野　　力	昭38	ダウンサイジング、オープンシステムによるコンピュータ革命	日本オラクル(株)取締役社長
5	12月5日	奥　田　順　一	昭37	最近の生命保険事情	日本生命保険(相)財務審査部調査役
6	12月5日	末　永　仁　宏	昭44	公認会計士の社会的役割	公認会計士監査法人朝日新和会計社札幌事務所
7	12月6日	青　木　雅　明	昭38	シンクタンクの研究実務	(株)日本総合研究所首席研究員

平成4年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	7月9日	澤　田　樹　徳	昭49	アジアにおける華僑資金の動向	(株)さくら銀行アジア部華僑室長
2	7月9日	平　賀　元　宏	昭37	損害保険の現状と課題ー現場の視点ー	安田火災海上保険(株)代理店業務開発部長
3	7月9日	桶　谷　喜三郎	昭41	ハイテクを巡る日米貿易摩擦の現状	富士通(株)商務部長
4	7月9日	高　木　晃　一	昭37	為替相場の変動と企業行動(英語講義)	財団法人　日本船舶振興会参与
5	7月10日	彦　坂　洋　二	昭40	電機メーカーのマーケティング戦略ー家電品の商品企画と流通コストー	三菱電機(株)販路部長
6	7月13日	久　保　孝　夫	昭42	電気事業におけるシステム開発の動向と課題	北海道電力(株)情報システム部情報システム課長
7	7月14日	菅　原　八　廣	昭44	道内中小企業の現状と対策	菅原総合研究所所長
8	7月14日	池　田　明　聡	昭38	職業会計人から見た企業会計の現状と問題点	池田公認会計士事務所公認会計士
9	7月14日	蠣　崎　哲　治	昭38	企業の人事管理と最近の話題	楢崎産業(株)取締役人事部長
10	7月14日	芳　賀　謙　治	昭41	企業内企業について	(株)ほくさん総合プランニングセンター取締役社長

平成５年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	6月11日	高　嶋　英　哉	昭61	企業会計における予算管理の重要性とその実務	(株)東芝本社主計部管理(予算)担当
2	7月5日	舟　本　秀　男	昭41	流通システム最前戦−ウオルマートにみるシステム化−	日本NCR(株)取締役流通システム事業部長
3	7月19日	岩　原　秀　雄	昭40	損保事業におけるシステムの有効性と課題	共栄火災海上保険(相)北海道総合開発部部長
4		鐘ケ江　邦　政	昭31	製品開発のコンセプトとマーケティング戦略	石黒ホーマー(株)取締役副社長
5	10月4日	前　田　次　啓	昭31	バブル崩壊後の日本企業のリストラクチャリング	日本発条(株)取締役副社長
6		高　木　晃　一	昭37	NGO(民間援助機関)の国際的活動について	(財)日本船舶振興会国際業務部長
7	10月21日	小　倉　裕　敬	昭39	自治体行政の昨今	北海道企画振興部 地域調整課長
8	11月1日	成　田　淳　司	昭51	円高と日本産業の空洞化	(社)国民経済研究協会主任研究員
9	11月2日	生　田　忠　秀	昭40	日本の官僚機関と行政改革	ジャーナリスト
10	11月10日	温　泉　和　也	昭33	我が社の経営理念と経営戦略	雪印乳業(株)取締役経営企画室長
11	12月1日	宮　下　佳　廣	昭41	人事管理をめぐる諸問題	出光興産(株)人事部次長

平成６年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	7月4日	山　崎　嘉　也	昭45	システムと経営	富士通北海道エンジニアリング(株)第3システム部長
2	7月8日	吉　田　広　志	昭52	リース会計の最近の動向	三井リース事業(株)経理本部経理室
3	10月27日	大　塚　義　幸	昭49	食品卸売企業の経営戦略	雪印乳業(株)営業企画部マーケティング・グループ課長
4	11月7日	水　谷　浩　二	昭45	企業経営と情報システム活用	日本IBM(株) ITコンサルティング事業部長主席コンサルタント
5	11月8日	鈴　木　裕　史	昭37	海上貨物運送保険の実務	日産火災海上保険(株)取締役　海上営業第2部長
6		高　木　秀　二	昭36	情報技術の役割(流通における技術革新)	(株)北酒連取締役　情報システム本部長
7	11月9日	佐々木　喜四	昭41	自治体は今、何を考えているか−札幌市の場合−	札幌市財政部長
8	11月24日	彦　坂　洋　二	昭40	電気メーカーのマーケティング戦略−価格破壊と商品企画−	三菱電機(株)静岡製作所副所長
9		増　田　　久	昭33	石油市場と多国籍企業	東亜石油(株)取締役経理部長
10	12月12日	金　子　義　之	昭54	高等学校における情報処理教育の現状と課題	深川東商業高等学校教諭
11	12月19日				

平成７年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	6月23日	小　林　達　明	昭35	国際商業会議所の活動について	国際商業会議所日本委員会事務局次長
2	7月10日	寺　尾　忠　明	昭36	北東アジア諸国の企業経営・企業交流	日製産業(株)理事・金属・化成品営業本部長
3		樽　谷　篤　知	昭53	〃	日本生命(相)ﾆｯｾｲ総合研修所能力開発室課長
4		山　元　克　美	昭49	データベースとその利用	(株)丸井今井情報システム室長
5	7月14日	西　村　勝　秀	昭42	公認会計士の社会的役割	朝日監査法人代表社員公認会計士
6	9月5日	小　島　則　明	昭42	雪印の流通戦略	(株)雪印アクセス営業部長
7	10月20日	萩　本　和　之	昭45	新しい情報システム(ﾒﾃﾞｨｱ)について	札幌ケーブルテレビジョン(株)
8	10月27日	中　山　正　光	昭47	組織における情報の有用性・重要性	(株)日立総合計画研究所主任研究員
9	11月1日	伊　藤　鴻　介	昭36	参入障壁とトラスト	松下電器産業(株)官公需営業本部営業推進部長
10		今　野　久　子	昭39	働く女性とともに	弁護士
11	11月10日	小　山　正　芳	昭36	新タイプの高校の現状と今後の課題	札幌国際情報高等学校校長
12	11月13日	三　村　孝　子	昭44	ソフトウエアと女性	(株)エムタック代表取締役
13	11月21日	津　山　廣　行	昭40	金融政策と商業銀行の経営	(株)北海道拓殖銀行調査部部長
14	12月8日	山　下　一　也	昭58	高校教育の現状	石狩高等学校教諭

平成８年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	6月21日	岩　佐　竹　治	昭36	日本のベンチャー・キャピタルの現状	ゼネラル・コーポレーション社長(元 日本合同ﾌｧｲﾅﾝｽ専務)
2	9月13日	木　田　敏　斌	昭42	松下電器の経営管理	松下電器産業(株)エアコン事業部経理部長
3	10月18日	石　田　隆　四	昭33	国際海運分野に於ける取引法について(不定期船及び定期船各分野に於ける契約類型を中心として)	三井近海汽船(株)代表取締役社長
4		高　辻　哲　哉	昭63	現代高校生気質	北海道工業高等学校教諭
5	10月21日	櫻　庭　秀　和	昭52	金融規制緩和と銀行の対応	さくら銀行西荻窪支店副支店長
6		沢　田　樹　徳	昭49	国際金融市場と日本経済	さくら銀行国際金融部プロジェクトファイナンスグループ次長
7	11月6日	伊　藤　鴻　介	昭36	規制改革と事業戦略	松下電器産業(株)官公需営業本部渉外部長
8	11月21日	温　泉　和　也	昭33	我が社の経営理念と経営戦略	雪印乳業(株)
9		野　島　和　夫	昭34	道内の地域計画動向など	(株)たくぎん総合研究所代表取締役社長
10	11月25日	牛　膓　訓　安	昭56	流通構造の変化と食品メーカーの対応	流通政策グループ長

平成9年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	6月11日	柏　崎　俊　雄	昭41	コンピューター会計と簿記	アイ・テイ・エス代表取締役
2	6月16日	田　中　雅　幸	昭50	味の素k.kの長期計画	味の素株式会社経営企画部部長
3	6月23日	新　田　純　一	昭47	信託銀行の現在と未来ー日本版「ビックバン」を迎えてー	三菱信託銀行大阪支店営業第3部部長
4	6月26日	海老名　　誠	昭43	アジアの経済発展と金融	富士総合研究所国際調査部長
5	9月9日	佐　野　　力	昭38	ネットワークコンピュータの社会に及ぼす影響	日本オラクル株式会社取締役社長
6	11月20日	小　原　芳　春	昭35	イトーヨーカドーの経営戦略	株式会社デニーズジャパン代表取締役社長
7	12月1日	吉　川　美　樹	昭59	三井物産をはじめとする企業内情報システムにおけるパソコン活用例	三井物産株式会社
8	12月4日	佐　藤　良　雄	昭49	労働市場の変化	キャリアバンク株式会社代表取締役

平成10年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	6月18日	永　井　恒　太	昭42	タイ経済の成長と発展	日本貿易振興会貿易開発部促進事業課APEC担当主幹
2	7月6日	武　田　充　広	昭48	ビール市場におけるアサヒビールの戦略	アサヒビール(株)首都圏関信越地区本部総務部長
3	7月10日	出　掘　健　夫	昭42	簿記会計教育と人事政策	日本ペイント株式会社人事部
4	7月14日	水　口　　武	昭43	監査の社会的役割	公認会計士・税理士　斉藤・水口会計事務所所長
5	9月9日	川　脇　光　男	昭36	わが社における分社化と再統合	共和紙業(株)会長
6	9月11日	岩　佐　竹　治	昭36	ベンチャーキャピタルからみた北海道企業	(株)日本合同ファイナンス常務取締役
7	11月2日	浦　島　　久	昭50	ベンチャービジネス入門　ー小さな企業の起こし方ー	(株)ジョイ・インターナショナル代表取締役
8	1月25日	牛　膓　訓　安	昭56	流通の変化と食品メーカーのマーケティング	味の素(株)調味料・油脂事業本部ギフト部専任課長
9	2月3日	荒　澤　建　一	昭38	日本の国際取引と私たちの生き方	三菱商事株式会社前監査部長

平成11年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月13日	石　田　朋　子	昭51	現代日本社会における男女共存のあり方ー夫婦のタテマエとホンネー	東京都環境科学研究所外部評価委員会委員,東京都保健医療協議会委員等
2	10月20日	菊　池　　剛	昭37	アジア諸国の投資環境ーｲﾝﾄﾞﾈｼｱのケースー	(社)海外コンサルティング企業協会理事, インドネシア投資調整庁投資顧問
3	10月27日	青　木　匡　光	昭33	21世紀を生きぬく魅力ある人間性づくり	アソシエイツ　エイラン代表
4	11月10日	佐　野　　力	昭38	外資とグローバルカンパニー	日本オラクル(株)代表取締役社長
5	11月17日	生　田　忠　秀	昭40	政治と行政の接点はどうなっているか	フリージャーナリスト
6	11月24日	高　橋　公　男	昭52	高齢社会における在宅介護サービス事業	(株)ジャパンケアサービス常務取締役営業担当兼在宅営業部長
7	12月1日	島　崎　憲　明	昭44	グローバル連結経営の深化による企業価値の創造と求められる人的経営資源	住友商事(株)取締役
8	12月8日	木　梨　芳　一	昭32	情報革命とマスコミ産業	北海道文化放送(株)代表取締役社長
9	12月15日	大　石　一　良	昭49	実務家がみた会計ビックバンー会計基準のｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ化ー	朝日監査法人代表社員、公認会計士
10	1月12日	佐々木　喜　四	昭41	21世紀の大都市行政	札幌市総務局長
11	1月19日	田　中　一　良	昭55	酒造業の面白さと将来性	田中酒造(株)代表取締役
12	1月26日	西　村　捷　敏	昭37	三橋時代の四国と徳島の元気印企業群	徳島大学総合科学部教授、大学開放実践センター長

平成12年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月4日	作　田　和　幸	昭30	高齢社会政策に欠けるもの	(株)CWE代表取締役
2	10月11日	奥　井　英　作	昭24	資金会計理論の考え方と効用　ーキャッシュフロー計算書に関連してー	公認会計士　奥井英作事務所
3	10月18日	山　田　章　一	昭31	初めて作られた札幌市のバランスシート	公認会計士　山田章一事務所
4	10月25日	高　木　晃　一	昭37	NPO(民間非営利組織)の経営論	シップ・アンド・オーシャン財団アドバイザー
5	11月8日	松　浦　英　雄	昭38	米国ビジネススクールの経験はどのように日常業務に役立ったか	(株)物産クレジット代表取締役社長
6	11月15日	水　谷　浩　二	昭45	企業はITをどう利用しているか　ーITによる経営変革ー	日本アイ・ビー・エム(株)取締役(ビジネス・イノベーション・サービス担当)
7	11月29日	浪　田　美智枝	昭45	異文化理解のめざすもの　ー交流から共生へー	北海道浅井学園大学非常勤講師
8	12月13日	岡　村　宏　平	昭44	21世紀の企業経営者像	日経BPソフトプレス　常務取締役編集本部長
9	12月20日	島　　雄　一	昭31	中高年の余暇生活は未開発　ー豊かな市民社会は到来するのか?ー	(財)日本レクリエーション協会公認余暇生活開発士
10	1月17日	下　川　哲　央	昭41	21世紀・北海道新時代をつくるーグローバル化、デジタル情報革命と地域企業のあり方ー	道銀地域企業経営研究所理事長
11	1月24日	平　山　幹　昌	昭28	北海道を絵に描く	画　家
12	1月31日	石　田　　守	昭50	リサイクル産業の現状と将来	三井物産金属原料(株)大阪支店支店長代理兼銑鉄スクラップ営業部長

平成13年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月9日	服　部　英　一	昭42転学	日本の不良債権問題　ー欧米諸国との比較を中心にー	ドイツ証券東京支社マネジング・ディレクター
2	10月16日	瀧　　滋	昭36	ペルー日本大使館人質事件の経験と危機管理上の教訓	元ペルー松下電器(株)取締役社長
3	10月23日	名　川　未知郎	昭61	インドネシアの政治経済危機をどのように理解したらよいか	三井住友銀行(株)国際法人営業部上席部長代理
4	10月30日	石　田　朋　子	昭51	地球の環境問題と東京都の環境政策	東京都環境科学研究所外部評価委員会委員
5	11月6日	川　村　泰　久		外交講座・ニューエコノミーにおける新たな挑戦	外務省経済局国際機関第二課長
6	11月13日	蜂　谷　　涼	昭58	世紀を超えるにんげんの仕事	作　家
7	11月20日	熊　谷　克　己	昭37	イラン革命における私の危機管理　ー経験と教訓ー	元大阪商船三井船舶(株)テヘラン主席在勤員
8	11月27日	早　川　好　寛	昭44	新時代の債券格付け　ー日本に相応しい格付けのあり方ー	(株)格付投資情報センター常務取締役
9	12月4日	水　越　和　幸	昭61	世界の中の北海道経済　ー製造業を中心にー	北海道新聞社東京支社政治経済部記者(財界担当)
10	12月11日	海老名　　誠	昭43	中国のWTO加盟と日本への影響	(株)富士総合研究所理事
11	12月18日	松　田　一　敬	平13院	21世紀の北海道の企業像	北海道ベンチャーキャピタル(株)常務取締役
12	1月15日	落　合　裕　介	昭61	中小企業経営の現状　ーインターンシップの受け入れ体験を交えてー	(株)落合専務取締役
13	1月22日	守　分　寿　男	昭32	私の演出論	元HBCディレクター
14	1月29日	関　崎　裕　一	平2	21世紀の情報産業(株)　ー情報の運用ー	(株)ソフトフロント副社長

平成14年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月8日	山　田　守　之	昭36	小樽の画壇と私の歩んできた道	洋画家
2	10月15日	高　雄　　稔	昭37	「ホンダ」という企業	(株)光明ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ　元本田技研工業(株)生販在物流管理部主幹
3	10月22日	丸　山　雄　三	昭43	創業とグローバリゼーション　ー ロックンローラーから経営者へ	イースト(株)代表取締役
4	10月29日	小　原　芳　春	昭35	流通業の課題(IYグループの例)	(株)デニーズジャパン相談役(前代表取締役社長)、(社)緑丘会理事長
5	11月5日	大　沼　伯　史	昭58	企業コミュニケーションがブランドにもたらすもの	(株)電通広報室企画部主幹兼VI事務局
6	11月12日	杉　原　大　作		外交講座・日本の経済外交とWTOー現場からの報告としてー	外務省在香港日本国総領事館領事
7	11月19日	渡　部　　猛	昭46	21世紀のモノづくり　ー松下電器の挑戦	松下電器産業(株)ｼｽﾃﾑｿﾘｭｰｼｮﾝ事業本部購買ｸﾞﾙｰﾌﾟ ｸﾞﾙｰﾌﾟﾏﾈｰｼﾞｬｰ
8	11月26日	高　橋　伸　夫	昭55	企業の境界を超えた組織の時代	東京大学大学院経済学研究科教授
9	12月10日	中　村　力　雄	昭46	北海道の良い企業、悪い企業	公認会計士(中村公認会計士事務所)
10	12月17日	近　藤　小　波	平1	拡大する女性の職場	富士通(株)　北海道支社　営業支援部
11	1月14日	佐　藤　憲　明	昭60	北海道経済の現状と経済産業局の取組み	経済産業省　北海道経済産業局総務企画課
12	1月21日	池　田　敏　也	昭63	異文化交流から生まれる新たな視点	札幌米国総領事館
13	1月28日	菊　池　　剛	昭37	私のアフリカ論　ーアフリカとどう向き合うか	ｴﾁｵﾋﾟｱ連邦民主共和国水資源省「地下水開発・水供給訓練計画」ﾁｰﾌｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ

平成15年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月14日	ｼﾞｬｯｸ野辺地真理子	昭45	変化する英国	会議通訳者・フリーライター・英国駐日公使夫人
2	10月21日	大　谷　和　広	平3	職業としての弁護士の魅力	弁護士　小黒芳郎法律事務所
3	10月28日	吉　村　　匠	昭59	ﾒﾃﾞｨｱとﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ ー成熟社会に向けた新しいﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞﾁｪｰﾝを目指してー	(株)トライ・ビー・サッポロ取締役
4	11月4日	上　原　孝　史		外交講座・ポケモン-japananimation-ほか	外務省大臣官房儀典官・儀典外国訪問室長
5	11月11日	相　蘇　恒　孝	昭45	札幌地区商圏の変化と三越の戦略	(株)三越札幌店店長代理
6	11月18日	服　部　統　幾	平13院	仏作って魂入れ“る”ーアントレプレナーシップー	日本政策投資銀行新規事業部調査役
7	11月25日	河　島　義　尚	平6	財務諸表監査についての基礎知識	公認会計士　朝日監査法人第3事業部
8	12月2日	鈴　木　宏一郎	平13院	ホットペッパー快進撃の秘密	(株)ﾘｸﾙｰﾄ狭域ﾃﾞﾋﾞｼｮﾝ仙台ｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｯﾄﾍﾟｯﾊﾟｰ仙台版編集長
9	12月9日	永　井　尚　子	昭53	税理士になりませんか	税理士　大萱生税理士事務所
10	12月16日	西　　祐一郎	平2	天気予報というビジネス	(株)ウェザーニューズ常務取締役
11	1月13日	大　沼　伯　史	昭58	企業コミュニケーション論	(株)電通コーポレート・コミュニケーション局　業務企画部主管
12	1月20日	荻　原　恵　理	平6	私と囲碁	ネッツトヨタ札幌(株)
13	1月27日	布　目　彰　秀	昭61	欧米大学院ビジネス・スクール事情	中小企業総合事業団調査・国際部　調査第一課調査役
14	2月3日	浅　元　薫　哉	平10	対日直接投資は日本を救うか?	日本貿易振興機構経済分析日本経済情報課

平成16年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月12日	森　田　松太郎	昭30	企業の見方	ARI研究所理事長
2	10月19日	増　岡　直二郎	昭36	企業におけるIT導入の実態と成功のための条件	ITｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ(前八木システムエンジニアリング代表取締役社長)
3	10月26日	大　森　正　志	昭41	雇用され得る人材の育成ーマーケティング発想に基づいてー	(社)茨城県経営者協会
4	11月2日	北　沢　寛　治		外交講座:ODAと評価	外務省経済協力局開発計画課企画官
5	11月9日	太　田　　尭	昭41	地域金融の経営戦略と役割	札幌信用金庫理事長
6	11月16日	齊　藤　慎　二	昭40	サッポログループの経営システム変革ー純粋持ち株会社体制への移行ー	サッポロビールホールディング(株)代表取締役専務
7	11月30日	溝　渕　新　蔵	平11院	革新的ﾋﾞｼﾞﾈｽﾓﾃﾞﾙの構築の方法論ーﾓﾃﾞﾙ設定による人生と仕事の創造・開発方法ー	アピアプリント(株)代表取締役会長
8	12月7日	小　川　　徹	平2	法曹をめざそう	弁護士(滋賀県)
9	12月14日	佐　藤　憲　明	昭60	北海道経済を活性化するためにー観光サービス産業からのアプローチー	北海道経済産業局産業部サービス産業室室長補佐
10	12月21日	入　江　健　夫	昭46	グローバル時代の異文化コミュニケーション	ｱｲ・ﾋﾞｰ・ｴﾑ・ｱｼﾞｱ・ﾊﾟｼﾌｨｯｸ・ｻｰﾋﾞｽ(株)　ﾊﾞﾝｷﾝｸﾞｲﾝﾀﾞｽﾄﾘｰ　理事
11	1月11日	秋　光　　実	昭48	グローバル企業における企業経営と情報化革命	伊藤忠商事(株)執行役員　IT企画部長
12	1月18日	坂　本　信　之	昭35	和魂洋才ーロンドン株式市場上場への道ー	(社)緑丘会理事会報委員　元日立クレジット(UK)
13	1月25日	山　田　二　郎	昭45	地域に貢献するソフトウェア会社を目指して･･･体験:起業家精神	(株)シーズ・ラボ代表取締役社長

平成17年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月11日	大　西　教　文	昭41	アイヌの人達から学ぶもの	前旭川北都商業高等学校教諭、アイヌ文化研究家
2	10月18日	佐　藤　充　弘	昭36	大空を駆ける夢　ー中部国際空港の開発に当ってー	(財)中部空港調査会元専務理事、現日本空港コンサルタンツ取締役
3	10月25日	土　井　尚　人	平16院	身近なチャンスをビジネスの成功に導く方法	(株)ヒューマン・キャピタル・マネジメント代表取締役
4	11月1日	谷　口　智　彦		外交講座・変わるアジアと岐路に立つ日本外交	外務省副報道官
5	11月8日	狩　野　知　代	昭63	一杯のコーヒーから広がる豊かな日々のために	GLAUBELL代表
6	11月15日	紀　国　郁　夫	昭37	決算トップ発表の秘訣と効果　−1980年経理部長就任時から上場会社で20年間決算トップを発表して−	(株)日立ハイテクノロジー　前代表取締役専務
7	11月22日	田　中　　誠	昭51	コンビニエンス事業とセイコーマート	(株)セイコーマート本部副社長
8	11月29日	長　田　忠　和	昭41	国際経営の理想と現実	International Business Communiucations,Inc社長
9	12月6日	馬　場　秀　治	昭40	ビジネス界を生き抜く知恵	ヤマト電機(株)監査役
10	12月13日	伊　藤　正　道	平2	魅力あるビジネスプランの描き方　ーバス会社が取り組む銭湯事業ー	北海道中央バス(株)関連事業部
11	12月20日	増　子　敬　恭	平14	若手社会人による業務報告と就職活動に関して	(株)野村総合研究所　T-STARプロジェクト
		伊　藤　未　来	平15		(株)日立製作所　金融システム事業部
		山　本　真　史	平15		みずほ銀行　青山通り支店
12	1月17日	野　元　美奈子	平10	年金制度/資産運用業務に関し	アライアンス・キャピタル・アセット・マネジメント(株)
13	1月24日	只　野　　宏	昭43	グローバル経済と日本の行方	アジア・パルプ&ペーパー　エグゼクティブ・ディレクター

平成18年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月10日	石　原　宏　治	平元	「記者の取材手法」	北海道新聞社余市支局長
2	10月17日	春　田　裕　明	昭50	「資産流動化ビジネスについて」　ー信託への期待と展望ー	三菱UFJ不動産販売(株)代表取締役副社長
3	10月24日	名　達　博　吉	昭46	マーケティング戦略の策定と実践	いすゞ自動車(株)上席執行役員
4	10月31日	小　野　優　子	平8	「伝えることと伝わること」	北海道テレビ放送(株) アナウンサー
5	11月7日	中　川　　勉		外交講座・日本の外交政策	外務省総合外交政策局政策企画室長
6	11月14日	高　島　健　一	昭46	「ホンダから学んだこと、伝えたいこと」	ホンダ企業年金基金理事長、ホンダ健康保険組合理事長
7	11月21日	栗　山　規　夫	平15	「社会人4年目」　ー働くことの意味を考えるー	(株)ディー・エヌ・エー
		林　　千　尋	平15		カゴメ(株)
8	11月28日	境　　雅　信	昭47	「学生時代の意義　ー小樽商大で育むもの、育まれるものは何かー	富士フィルムグラフィックシステムズ(株)　常勤監査役
9	12月5日	吉　本　平　史	平18院	ホスピタリティ・コミュニケーション	アー・アーカイブ代表
10	12月12日	石　積　尚　幸	昭57	IT業界動向「グローバル・オペレーションを可能にする強靭なIT」	日本ヒューレットパッカード株式会社　取締役副社長
11	12月19日	下　里　興　史	平6	「地域自治体における構造改革とは」	津島市役所市長公室企画政策課　行政経営グループ　主査
12	1月16日	大　石　一　良	昭49	「会計監査を取り巻く環境変化」　ー会計監査の厳格化ー	あずさ監査法人札幌事務所
13	1月23日	山　本　眞樹夫	昭47	「研究者の道を歩んで商学部・商学研究科で学ぶ事」	小樽商科大学理事(総務担当副学長)
		大　矢　繁　夫	昭47		小樽商科大学大学院商学研究科 現代商学専攻長
		李　　濟　民	昭60院		小樽商科大学大学院商学研究科　アントレプレナーシップ専攻長

平成19年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月9日	瀬戸口　孝　治	昭60	銀行規制の枠組み　ー邦銀の国際業務戦略ー	金融庁監督局銀行第一課課長補佐
2	10月16日	長　尾　吉　祐	平5	働くということ　ー人材ビジネスの現場からの教訓ー	㈱ジョブダイレクト　代表取締役社長 CEO(前　㈱リクルートGM)
3	10月23日	市　原　昭　一	昭57	バイオ燃料の現状と日本への導入課題　ー石油に代わるものー	住友商事㈱資源・エネルギー事業開発部バイオ燃料チーム長
4	10月30日	安　田　睦　子	昭49	北海道の地域まちづくりに関わって　ーデータの向こうに見えるものー	(有)インターラクション研究所
5	11月6日	松　永　文　夫		外交講座:国際文化交流の現場及び概要	外務省広報文化部長代理
6	11月13日	平　野　正　喜	昭61	NGNとBREWに見るインターネットとケータイの現状と将来 ーWeb2.0時代を超えて大きく進化するネットワークと携帯電話はビジネスをどう変えるかー	ランドッグ・オーグ平野正喜事務所　代表(執筆者・講使)
7	11月20日	伊　藤　直　紀	昭48	日本の金融機関の変遷とマーケットの変化 ー我が国の金融機関を取り巻く環境の変化と貯蓄から投資への流れの本質ー	みずほ投信投資顧問㈱代表取締役副社長
8	11月27日	鳴　沢　　隆	昭47	2015年の日本　ー大きく変貌する日本の社会と産業ー	㈱野村総合研究所代表取締役副社長
9	12月11日	中　村　亮　一	平15	東京で働くということ ー就職活動を通じて感じたこと、社会人になって気づいたこと−	㈱エス・オー・ダブリュー不動産・証券コンサルティング事業部
10		平　子　知　明	平15		ホンダ技研工業㈱
11		西　村　　歩	平18		㈱電通マネージメントサービス
12	12月18日	城　座　勝　明	昭41	雪印グループ企業不祥事の顛末　ー混乱と再建の実体ー	セントラルリーシングシステム㈱代表取締役社長(前　雪印種苗㈱代表取締役員)
13	1月15日	高　橋　直　樹	昭61 平18院	人に良くする仕事は人を育てる	北海道農業協同組合中央会　JA改革推進部 総合コンサル課調査役
14	1月22日	熱　田　洋　子	昭48	北海道の活性化のために　ー観光を中心として−	北海道庁　観光のくにづくり推進局長
15	1月29日	坂　本　信　之	昭35	経営戦略としてのM&A	緑丘会常務理事・会報委員長(前 日立キャピタル顧問)

平成20年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月14日	佐　賀　卓　雄	昭44	「金融システムの不安定性とサブプライム・ローン問題」	(財)日本証券経済研究所理事兼主任研究員
2	10月21日	漆　崎　博　之	昭59	「経営改革」	㈱フルキャスト　代表取締役社長
3	10月28日	奥　山　瑛　明	昭44	「第一線のヘッドハンターが語る、売れる人材と成功するキャリア形成」	サーチ・ファーム・ジャパン ㈱Executive Senior Director (1969年から2004年まで伊藤忠商事㈱)
4	11月4日	伊　藤　賢　穂	／	外交講座:「国際公務員になるには」	外務省総合外交政策局国際機関人事センター室長
5	11月11日	八　尾　稔　啓	昭56	「自己効力を高めるキャリア開発法」	(有)エイ・エル・ピー　代表取締役社長
6	11月18日	佐　藤　好　美	平8	「女性SE／カーナビ・ソフト開発に挑戦」	シーズ・ラボ㈱ナビ事業本部データベース開発部セクションマネージャー
7	11月25日	近　江　秀　彦	昭56	「北海道洞爺湖サミット道民会議の取り組み」	北洋銀行本店営業部融資部長
8	12月2日	中　村　嘉　成	昭62	「水産品における日本の流通システムと世界の消費動向」	㈱丸中しれとこ食品代表取締役社長
9	12月9日	成　松　郁　子	昭55	「ラジオと出会って」	コミュニティーFM　三角山放送局パーソナリティー
10	12月16日	岩　元　　洋	昭42	「品格ある緑丘人へ」	前　伊藤忠紙パルプ㈱　常勤監査役(「緑丘」会報委員)
11	1月13日	山　口　和　佐	平20	「待っている→自分から変える」	札幌市議会議員
12	1月20日	五十嵐　文　雄	昭60	「金融サービスとそれを支えるIT」	野村総合研究所システムコンサルティング事業本部　上席システムコンサルタント
13	1月27日	遠　藤　聡　史	平8	「小樽市の開発」	価値開発㈱不動産部営業部次長

平成21年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月13日	東　口　　豊	昭44	経営と情報セキュリティ	(株)日本情報セキュリティ認証機構　顧問
2	10月20日	石　田　建　昭	昭43	激動の金融界を生きる	東海東京ファイナンシャル・ホールディングス㈱代表取締役社長CEO 東海東京証券㈱代表取締役会長CEO
3	10月27日	永　井　克　郎	／	外交講座:テロに強い世界へ向けて－日本の国際テロ対策－	外務省総合外交政策局国際テロ対策協力室長
4	11月10日	三　浦　俊　一	昭48	外国為替:世界で最も洗練された金融商品	FXプライム㈱代表取締役社長
5	11月17日	大　塚　義　幸	昭49	日本のチーズ市場とマーケティング	チェスコ㈱代表取締役社長(前雪印乳業㈱常務取締役)
6	11月24日	須　川　正　啓	平18	公務員の仕事とワークライフバランス(アタック25優勝の話も含め)	総務省北海道総合通信局
7	12月1日	真　木　　明	昭46	ソフトウェア委託を通して観た中国(大連、藩陽)のエネルギー	東芝ソリューション㈱常勤監査役(前　東芝ソリューション㈱取締役常務経営企画部長)
8	12月8日	中　井　　令	平元	絵本を通して伝えたいこと	絵本作家
9	12月15日	林　　岳	平8	政府国際会議に参加して	農林水産省農林水産政策研究所　食料領域　主任研究官
10	12月22日	得　能　直　明	昭58	金融庁と金融検査	金融庁検査局総務課専門検査官(前　北海道拓殖銀行総合企画室主査)
11	1月12日	山　内　城　治	平8	ケータイビジネスと青少年保護問題	ピットクルー㈱取締役経営企画室長
12	1月19日	佐　藤　栄　一	昭60	都市のブランド化を実践する～札幌国際短編映画祭の現場から	㈲プランナーズ・インク　代表取締役
13	1月26日	渡　邊　克　仁	昭53	一灯照隅・万灯照国	銀嶺バス㈱代表取締役社長

平成22年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月12日	塩　野　寛　次	昭45	「化学品と総合商社」	大阪府商工労働部　大阪府ものづくりB2Bセンター　ネットワーク担当コーディネーター
2	10月19日	成　田　祐　樹	平8 平21院	「政治に関心を持たないと損をする」	小樽市議会議員
3	10月26日	鷹　栖　　博	昭54	「SEと会計～IFRSで会計ビジネスを変える!」	(株)シナンシャル・システム・コンサルティング　代表取締役社長
4	11月2日	柳　沼　雅　彦 柳　沼　聡　美	昭57 昭58	「地域と共に生きる」－大企業で働くこと,中小企業で働くこと－	(株)柳沼　代表取締役
5	11月9日	鹿　取　克　章	／	(外交講座)「最近のASEAN情勢と日本」	外務省研修所長
6	11月16日	藤　村　　隆	昭52	「目指せ!リーダー」	サッポロビール(株)常務執行役員首都圏本部長
7	11月30日	八　尾　稔　啓	昭56	「創造的に課題を乗り越える智慧」－健康心理学的にみるキャリア(生き方)開発の秘訣－	(現)有限会社エイ・エル・ピー代表取締役社長
8	12月7日	三　嶌　晃　弘	平11	「税金と税理士の仕事」	三嶌晃弘税理士事務所
9	12月14日	リチャード L.ギルフォイル	／	「Daniel B.McKinnon and Me」	コールマンジャパン株式会社 代表取締役社長
10	12月21日	斎　川　貴　代	平16	「ベンチャー企業での就業経験とセルフエンパワーメントについて」	株式会社　見果てぬ夢
11	1月11日	田　中　良　定	昭43	「変貌するアジアと日本」	マーケティング本部 (現)オリヒロ株式会社　顧問 (前)伊藤忠産機　代表取締役社長
12	1月18日	佐　藤　　等	昭59	「P.F.ドラッカーに学ぶ自己実現の方法」	佐藤等公認会計士事務所　所長
13	1月25日	海老名　　誠	昭43	「発展する東アジアと共に生きて行く」	小樽商科大学ビジネス創造センター長

平成23年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月11日	高　島　健　一	昭46	「経営の原点と変動に強い企業体質作り」	年金積立金管理運用独立行政法人　常勤監事
2	10月18日	齊　藤　幸　喜	昭62	「アメリカの会計について」	米国公認会計士　大島齊藤法律事務所代表
3	10月25日	熊　木　敬　悦	昭46	「中国経済の構造」("中国バブル"は崩壊するか?)	前　三井銀行天津支店長
4	11月1日	川　西　将　文	昭55	「日本の有料放送とこれからのテレビ」	スカパーJSAT(株)執行役員常務スカパー事業部門マーケティング本部長
5	11月8日	中　村　亮　一 平　子　知　明 須　川　正　啓	平15 平17 平18	25周年記念講義①:エバーグリーン講座の未来	㈱エス・オー・ダブリュー不動産・証券コンサルティング事業部 ホンダ技研工業㈱ 総務省北海道総合通信局
6	11月15日	米　光　啓　弥	昭32	「社)緑丘会・財)小樽商科大学後援会の公益法人化への取組み」	税理士米光啓弥事務所　公益法人小樽商科大学後援会監事
7	11月22日	石　積　尚　幸	昭57	「企業のグローバル化とそれを実現するIT」	日本オラクル(株)専務執行役員
8	11月29日	歌　原　邦　芳	平7	「松尾ジンギスカンの創業者が孫に伝えた7つの繁盛法則」	株式会社　マツオ　常務取締役
9	12月6日	山　本　千雅子	昭55	「政策評価やマーケティング,官民共同等に関するテーマ」	グラデュウス・マルチリンガルサービス(株)代表取締役
10	12月13日	佐　藤　時　朗	昭48	「会社の建て直しについて」(米国での会社再建)	住友商事北海道株式会社　代表取締役社長
11	12月20日	鈴　木　伸　明	昭59	商工会議所の活動と地域活性化	札幌商工会議所　国際部長
12	1月17日	近　藤　朋　子	昭56	「専業主婦が夢を実現,今税理士として充実した毎日を」	税理士法人杉下会計事務所
13	1月24日	中　村　哲　也	昭58	日本の投資信託の現状	野村證券株式会社所沢支店
14	1月31日	青　木　匡　光	昭33	25周年記念講義②:「香りある人になるために」－自立へのステップを踏み出そう－	アソシエイツ　エイラン　代表

平成24年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月10日	宮　下　佳　廣	昭44	「自然と人との関わり～病院緑化から地域再生へ～」	元出光興産取締役 苫小牧東部石油備蓄社長 千葉大学園芸別科大学院修士課程 同 大学院博士課程、農業博士学位 現 千葉大・園芸学科研究科博士研究員
2	10月17日	葛　西　さとみ	平22院ア	「会社設立から経営実務まで」「貴方も今から経営者」	有限会社 Kasai Office 行政書士　葛西さとみ事務所
3	10月24日	流　田　和　啓	平9	「商社人生奮闘記～もがき楽しめ」	住友商事株式会社 大阪産業インフラ・輸送機部 機械システム課 課長代理
4	10月31日	井　上　周　司	昭42	「監査役の役割　ー企業の健全な成長に資するためにー」	元 ユアサ商事常勤監査役 バンコク駐在、ユアサアメリカ代表経験
5	11月7日	久　保　俊　治	昭46短	著書「羆撃ち」について～狩猟生活と北海道の自然	牧場経営 ノンフィクション作家（「羆撃ち」ほか）
6	11月14日	野　村　文　吾	昭63	お客さま密着!地域に貢献する十勝バスの経営～ 40年ぶりの利用者数増加の実例 ～	十勝バス（株）代表取締役社長
7	11月21日	石　岡　久　和	昭54	銀行IT戦略の現在・過去・未来	太陽神戸銀行入行株式会社さくらケーシーエス常務執行役員
8	11月28日	小笠原　一　雄	昭50	「シルバーな人びと」（"温泉旅館・ホテル型デイサービス"と"ヘルパー付個人旅行"）	株式会社旅日記　代表取締役 有限会社ハーディズ代表取締役
9	12月5日	鹿　内　正　孝	昭54	「人生は出会い」	（株）玄米酵素　代表取締役社長
10	12月12日	秋　吉　英　彦	昭49	石油開発会社の勤務経験～小樽からアラビアへ	アラビア石油（株）常勤監査役
11	12月19日	田　畑　知　之	平成元	「報道の現場から～ファクトから先を見る～」	毎日新聞大阪本社　経済部副部長待遇
12	1月16日	中　野　　健	昭57	「地域経済と中小企業～仕事を通じて国益への貢献を考える～」	北海道経済産業局 産業部産業振興課長
13	1月23日	劉　　莎	平22 平24院	「留学は何が得られる」	小樽商科大学大学院博士後期課程
14	1月30日	滝　　浩　之	昭53	「インターネットサービスプロバイダー（ISP）の戦略～ニフティ，ヤフーなどの動向について」	富士通エフ・オー・エム取締役マーケティング本部長 兼地域営業本部長 名古屋大学大学院人間情報学研究科 博士後期課程満期退学

平成25年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月9日	小野寺　泰　男	昭46	非メイン事業の国際化	元東洋ゴム工業株式会社　顧問
2	10月16日	舟　本　秀　男	昭41	40年史観で見る"世界""日本""北海道"	株式会社財界さっぽろ代表取締役社長
3	10月23日	林　　春　美	平23 院ア	地方都市の歯科医院における経営戦略	医療法人社団林歯科医院　理事　歯科医師
4	10月30日	増　岡　直二郎	昭36	ドラッカー経営理論の評価、及び理解と実践の仕方	nao IT 研究所代表
5	11月6日	植　木　　宏	昭51	キリンビールの戦略　　ー組織活性化とそのポイントー	キリンビールマーケティング株式会社　代表取締役社長
6	11月13日	合　場　直　人	昭52	人を想う力。街を想う力。―共通価値の創造	三菱地所株式会社代表取締役専務執行役員
7	11月20日	阿　部　眞　久	平24 院ア	夢を力に	NPO法人ワインクラスター北海道　代表理事
8	11月27日	渡　部　成　人	平7院	グローバルに考え，ローカルに活躍しよう!	国土交通省北海道開発局開発監理部開発調整課事業調整専門官
9	12月4日	東　野　里　絵	平11	後悔しないキャリアの選び方	株式会社HBA 自治体システム本部 営業システム部 システム課 課長代理
10	12月11日	吉　村　　匠	昭59	クリエイティブな北海道をアジアに広げる取組み	一般社団法人北海道食産業総合振興機構（フード特区機構）出向 販路拡大支援部部長 NPO法人札幌ビズカフェ理事　副代表
11	12月18日	三　神　仁　美	平7院	社会で求められる人となるために～夢を描ければ何だってできる!	三神仁美税理士事務所
12	1月15日	澁　谷　　樹	平15院	私の経済法研究～消費者のための真の行政を考える～	（独）農林水産消費安全技術センター仙台センター業務管理課 専門調査官
13	1月22日	城　市　　猛	平2	就職体験（就職活動から今日に至るまで）	シティバンク銀行株式会社札幌支店長
14	1月29日	下　中　博　文	昭52	信用金庫と地域との絆～地域に信用金庫あり　小なれどその絆強し～	小樽信用金庫専務理事

平成26年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月8日	吉　田　理　宏	昭61	20代で成長し30代で輝くための、会社の選び方・働き方	WAYOUTカンパニー（株）代表取締役
2	10月15日	尾　形　　毅	平元	東日本大震災から3年、被災地・宮城の復興に取り組む	（株）仙台銀行経営企画部長，仙台緑丘会副会長
3	10月22日	下斗米　寛　泰	昭45	販売の最前線	札幌通運（株）代表取締役社長 元損保ジャパン
4	10月29日	沼　田　博　光	昭63	北海道を世界に売り込め!地方テレビ局の挑戦	北海道テレビ放送（株）営業局国際メディア事業部チーフマネージャー
5	11月5日	黒　川　博　昭	平27 院ア	会社の経営に関する失敗?中心の昔話	富士通（株）顧問，同社元代表取締役社長
6	11月12日	立　川　志の春 【ゲストスピーカー】	卒50周 年記念	（昭和39年度卒業生企画講演） 英語による落語講演　「世界に誇れる日本の笑い～落語～」	立川志の輔　門下　二つめ イェール大学卒業，三井物産勤務
7	11月19日	田　中　康　浩	平17 平19年	アセットマネジメント（資産運用）ビジネスとその使命～日本に長期投資は根付くのか～	DIAMアセットマネジメント株式会社投資顧問部門 業務開発グループ　課長
8	11月26日	小笠原　荘　介 （原　荘介）	昭38短	原　荘介のギターと唄人生 （湯の町エレジーから日本の子守唄まで）	ギタリスト
9	12月3日	中　山　晴　樹	昭46	企業人としての歩み、大学人としての歩み、企業と大学に共通する改革の成功事例	大阪成蹊大学マネジメント学部長（元松下電器産業（株），スペイン松下電器，松下ロジスティックス）
10	12月10日	加　藤　ひろみ	昭55	女性の生き方は自由自在	税理士法人アグス　　社員税理士
11	12月17日	昆　野　照　美	昭62	好きなことを形に～キャリアチェンジやワークライフバランス～	C.W.I（カラーコーディネーター　自営）
12	1月21日	西　　祐一郎	平2	Collective Intelligence（集合知）による新しい天気予報	株式会社ウェザーニューズ iCorner グループリーダー
13	1月28日	三　上　淳	平8	卒業までにゼッタイ身につけておいた方が良いビジネススキルベスト3	かもめソリューションズ　代表/プロコーチ
14	2月4日	岩　見　真　彦	平元 平27年院ア	ソニーは復活できるか?	みずほ銀行札幌支店　課長

平成27年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月7日	千　葉　勝　茂 (卒業50周年記念)	昭40	(昭和40年度卒業生企画講演) 私が経験した中国と貴方達が向き合っている中国	岡芹法律事務所　顧問(中国室) 元三井物産(上海)貿易有限公司総経理
2	10月14日	星　　功	昭39	私の体験したアメリカ社会:知られざるアメリカ	小樽後志消費者協会会長
3	10月21日	佐　藤　　司	平25	地域メディアとしてのローカル放送局の役割	札幌テレビ放送株式会社 総務局人事部長
4	10月28日	堀　内　康　平	平8	しごとのこと	七十七銀行
5	11月4日	渡　部　　猛	昭46	製造業における「物づくりの心」-物をつくるまえに人をつくる-	松下電器、大阪市教育委員会
6	11月11日	高　本　淳　子	平12	挑戦が夢・目標を生み、想いを自覚させてくれた	ダイゴー株式会社　商品アドバイザ
7	11月18日	朝　日　博　昭	昭54	私の履歴書	株式会社ヤマチマネジメント　ブランドソリューション部 ブランディング ディレクタークリエーティブ ディレクター
8	11月25日	中　村　弘　治	昭52	外食産業における安全安心の保証への取組み	株式会社イオンハート 代表取締役社長
9	12月2日	辻　　知　秀	昭37	これからの日本と若者のパワー　問われる挑戦力	執筆業 日本経済新聞社 同社社友
10	12月9日	山　谷　智恵子	平9	仕事を遊びに。遊びも仕事に	(株)アイム 専務取締役
11	12月16日	鷲　山　俊　男	昭42	少子高齢化が君たちに与える影響	(株)FPプラザ・アイ21　代表取締役
12	1月13日	竹　村　隆　宏	平7	アフリカビジネス最前線	味の素(東京)課長
13	1月20日	佐　藤　盟　信	平7	我が国の対アフリカ外交について	在タンザニア大使館 一等書記官/経済協力班長
14	1月27日	佐　藤　絵　美	平20	私が今までの社会人生活から農業を仕事にするまでと今の農業	農業

平成28年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月5日	高　橋　洋　一 【ゲストスピーカー】	卒50周年記念	(昭和41年度卒業生企画講演) 借金1000兆円の見方について	嘉悦大学教授
2	10月12日	小　林　裕　介 菊　谷　洋　介 寺　下　友香梨	平21 平24 平24	(30周年記念企画) 10年後のジブンを描く	日本デイリーネット株式会社 三菱重工業株式会社 株式会社リクルートコミュニケーションズ
3	10月19日	太　田　研　一	昭54	企業の求める人材とキャリア形成　～グローバル企業で仕事をするということ～	元東芝人事部等
4	10月26日	平　井　睦　雄	昭51	やれば出来るベンチャー企業から東証一部上場へ～起業するための企業選びのポイント～	株式会社進学会代表取締役　・会長
5	11月2日	水　越　和　幸	昭61	新聞をどう読み、活用するか	北海道新聞本社編集委員
6	11月9日	柴　田　康　幸	平14	私のキャリア論	株式会社マイナビ紹介事業本部第1営業統括部 北日本営業課 東北営業2課
7	11月16日	堤　　千夏子	昭63	コミュニケーション学　～社会人として必要なコミュニケーション学～	国立研究開発法人　日本医療研究開発機構
8	11月30日	渡　辺　玉　範	昭52	クボタグループのCSR経営の取り組み	クボタワークス(株)兼クボタサンベジファーム(株)代表取締役社長
9	12月7日	小　嶋　京　子	平5	会計専門職から考える職業意識	税理士法人セントラル代表社員(公認会計士・税理士)
10	12月14日	賀　茂　　隆	昭48	タイ国におけるカントリーリスクと投資	元タイ国NBCアジア株式会社代表取締役社長、新都山流尺八大師範 明暗尺八道友会師範及び理事
11	12月21日	櫻　庭　秀　和	昭52	同族経営は問題なのか　～企業というものを考える～	ミツワ電機(株)取締役
12	1月11日	北　風　いずみ	平13	女性だからこそできる一生涯の仕事につけた!夢をもって仕事できる喜びに感謝!	ノエビア　ビューティサロンgreen+caféオーナー
13	1月18日	北　崎　千　鶴	平27院	北海道のポテンシャルを仕事にする。～商大ビジネススクールから得たもの～	株式会社クリエイティブオフィスキュー執行役員
14	1月25日	塚　原　敏　夫	平2	職業の選択　～出会いから始まる仕事～	(株)三國プランニング代表取締役

平成29年度

NO	講義日	氏　名	卒年	テ　ー　マ	現　職　等
1	10月4日	小笠原拓哉 根　廻　早　紀 鎌　田　由　実	平23 平24 平26	(U-30企画)エバーグリーン講座と緑丘会ネットワークの活用法	三菱東京UFJ銀行 凸版印刷(株) 札幌市立中学校教員
2	10月11日	橘　木　俊　詔	昭42	(卒業50周年記念)一経済学者の回想一　私の転機と決断	京都大学名誉教授、京都女子大学教授
3	10月18日	阿　部　洋　介	平12	CFO(最高財務責任者)の仕事～経理キャリアの築き方～	パイオニアDJ㈱　管理統括グループエグゼクティブディレクター
4	10月25日	中　村　好　伸	昭62	農業におけるビジネスマインド:めげなければなんとかなる	新篠津つちから農業㈱　代表取締役
5	11月1日	外　園　知　代	昭57	A wonderful world through learning English (英語で広がる楽しい世界)	主婦
6	11月8日	横　山　美智子	平23	「挫折」から学んだ私の「成長」　:社会人として、親として	全国労働者共済生活協同組合連合(全労済)
7	11月15日	萬　　慎　吾	平15	キャリアパスと事業の見方,考え方	みずほ銀行釧路支店　支店長
8	11月22日	城　　隆　二	昭50	自動車事故紛争解決の変遷について	損害保険料率算出機構神戸自賠責調査事務所認定第1課長
9	11月29日	山　岸　紀　寛	昭57	広告マーケティングはおもしろい?好きこそ大事!	(株)電通執行役員兼電通イージスネットワーク中国CEO
10	12月6日	村　上　眞佐子	昭53	私の社会人七変化	(前)学校法人北海道鹿光学園青山工学・医療専門学校、(株)データクラフト等
11	12月13日	須　田　美　貴	平10 平2院ア	マーケと英語の仕事の話	株式会社ムーンショット・マーケティング 代表取締役
12	12月20日	白　石　友　柄	平10	これからの学び方～自尊感情やMIとアクティブラーニングとの関係	NPO教育支援協会北海道専務理事
13	1月10日	浅　井　　昌	平5	企業における人事の「しごと」	旭硝子株式会社人事部人財開発企画担当部長
14	1月17日	赤　間　　元	昭42	「小樽観光を考える」・・・過去・現在・そして未来へ	中央バス観光開発株式会社　参与

エバーグリーン実行委員より

柏崎俊雄（昭和 41 年卒）

「エバーグリーン講座」の企画を聞いた時、小樽商大にとって素晴らしい企画だと感じると共に、札幌の窓口として是非お手伝いをさせてもらいたいという思いで運営に参加させていただきました。実学を旨とする大学にとって、まさしく現場で実績を積んだ OB・OG 諸氏の講義は資産であり、運営をしっかりとやり長く続く事が可能ならば小樽商大の特徴である実学の一助になり、加えうるに緑丘会と大学の連携がより濃くなる講座に成るだろうと思いました。

あれから３０年、運営にはいくつかの課題も出てきました。当初は未知の講座でもあり、受講される学生も少なく、講師の先輩諸氏に対し申し訳ない場面もあり、学長自ら学生の招集に奔走していただいたこともありました。このような努力の中に、単位取得講座への取り組みが大変大きかった事が挙げられます。学外者としてはさほど難しい事とは捉えていませんでしたが、実施に当たっては大きなハードルが有ったようであり、学長はじめ教授陣の絶大なる協力がなければ難しかったであろうと思われます。受講者も多くなり最近では２５０名を超える学生の受講があり、毎週受講者の評価を担当教授が半年間行うことはほぼ不可能でしたが、大学側で担当教授陣を複数化し対応していただき可能になりました。

最近ではインターネットを活用し概要を事前に受講生に流して質問を受け、講義に加味していただく工夫等もあり、また講師に協力を戴き、講義後に直接講師と生徒の交流の場をも作っていただく等の工夫もされています。

運営をサポートするために札幌では１０数年前から、委員会（非公式）を立ち上げ、講師の選出の為に広い世代の情報を集めやすくし、また最近では全国の支部の協力を戴き、広く全国からの講師の推薦を戴くようにもしています。より広い分野からの講師の選出についても成果が出てきています。長く続くための工夫へと昨年からは正式に札幌支部内に「エバーグリーン実行委員会」を作り、緑丘会トータルで組織化を行い支援していく体制も作りました。

講師の多様化は大変良い事でしょう。若い講師を多くし、講義を身近に感じていただくことも必要でしょう。一方で質の高い講義の追求も必要です。魅力ある講義の提供が「エバーグリーン講座」を長く続かせる大きな要因でもあります。大学は今、グローカルを目指しております。海外や地域で活躍されている学内外を問わない講師の登壇も必要ではないでしょうか。教育の原点は常に高みを提供できる事でもありましょう。運営に当たり忘れてはならないことです。

講師を受けていただいたＯＢの皆様には深く御礼を申し上げます。皆様は等しく母校で講義することが出来たことを喜び、学長と対話することで母校への関わりと後輩学生達への熱き思いを膨らませ帰途に着かれます。まさしく大学と緑丘会を結ぶ連携事業ではないでしょうか。

最後に３０周年を迎えた「エバーグリーン講座」が尚一層充実し、母校の実学の一助にと、オール緑丘のご支援を願い未来永劫なることをお祈りします。

エバーグリーン実行委員より

舟本秀男（昭和 41 年卒）

20 年近く、本講座のお手伝いをさせて頂きました。この間 200 名を超える卒業生各位にお願いし、講師をお引き受けいただきました。各位に深く感謝申し上げます。

私の入学時の学長は加茂儀一先生で、卒業の時に「とかく学問をする人間は実利に陥りやすい。経済や商業の学問はもともと実利を目標に置いたものだけに、考え方を一歩誤るとそれこそ末世観に堕することになる。実利だけの目的であればあえて高度な学問をする必要はない。それどころか邪魔にさえなる。」という言葉を遺されました。本学の三本柱は「品格」「語学」「実学」ですが、実学は経済学・経営学などの学問がその基礎にあり、その上に業務・社会経験及び個人の研鑽が加わったものであると理解しております。エバーグリーン講座は卒業生による真の「実学」を学生に伝えるものであり、大きな役割を果たしてきていると思っております。

これからも「エバーグリーン講座」が学生の「実学」向上に資し、更なる発展をすることを祈念しております。

山田二郎（昭和 45 年卒）

エバーグリーン講座が開講して 30 年を迎えました。昭和６２年（１９８７年）の初夏に第１回が開講されました。この年は 39 歳になったばかりの私が３月末に・・・札幌育ちの妻と横浜で生まれた５人の子供達を連れて・・・北海道に U ターンした年でした。

「二郎君　母校の学生たちに実社会の動きを伝えるエバーグリーン講座という企画を始めることになったから U ターンして戻るなら地元でこの企画を応援し手伝ってくれたまえ」

グリークラブの先輩でもあり東京地区で緑丘エレクトロニクスの会でも親しくお世話になった３青木（匡光さん・鎮夫さん・雅明さん）先輩の一人である鎮夫先輩に言われたのが
ご縁の始まりでした。

当時と現在との違いを考えてみると以下のような事柄が頭に浮かびます。
単位化されていない。
勿論シラバスには載っていない。
同窓生が勝手にやっていて非常勤講師扱いではない。
講義は主に集中講義の空コマで。
あるいは好意を持っていただいた先生がご自分の講義時間を空けてくれて実現した。
講師への「学長記念盾」なし。昼食もなし。
聴講する学生数に大きなバラツキがある。学生１人の時もあった。
講義を聴いての感想等講師へのフィードバックなし等々。

エバーグリーン実行委員より

しかしながら 30 年間の講義を毎年地元の世話役として１つ２つ必ず聴いてきた私の記憶では、講師として登壇した OB･OG の講義の「品質と想い」は今も３０年前も変わらないと思います。この「品質と想い」が「高く」そして「崇高なもの」であったが故に３０年間続いてきたし、関係者の並々ならぬ協力と努力を得て、エバーグリーン講座のかたちが「あるべき姿」に徐々に改変されていく力になったのだと思うのです。嬉しいではありませんか。「継続は力なり」とは正にこのことです。しかしながら、この 30 年間、幸いにも同窓会の企てが役に立ってきましたが、…勿論、大学の主役は学生たちですから…、OB・OG の押し付けではなく、これからも時代の要請にこたえて若い世代の同窓の皆さんが「継続は力なり」を信じてこの企てを続けてくれることを心から願っております。

終わりに・・・私も２回登壇させてもらいました。２回目の時には２００名を超える学生からの講義感想文を後日頂きました。その後何度も読み返した記憶があります。

その度に学生たちから大いに励まされ背中を押してもらえたという記憶があります。

これは正に私の宝物です。

鈴木伸明（昭和 59 年卒）

母校のエバーグリーン講座が創設 30 周年を迎えたことは大変喜ばしく、謹んでお祝い申し上げます。30 年もの長きに亘りこの講座が受け継がれ発展して来たことに改めて感慨を覚えますとともに、創設に奔走された諸先輩方、運営に携わって来られた皆様、また 300 名を超える卒業生講師の方々のご尽力・ご協力に敬意を表します。

身近な存在である卒業生から社会での多様な経験談を聞けることは、学生達にとってとても貴重な機会です。しかも、我が国・北海道を代表する企業・機関で活躍する方々の生の話を直接聞けるのですからなおさらです。10 年、20 年、30 年先の自分の姿を講師に重ね合せ、進路を具体的に考えるのに大いに役立っていると信じています。

この大学とＯＢ会一体の取組みは、単科の商大なればこそ円滑に運営できているとも言えますが、私はそれよりも、こうして卒業生の皆様の貢献により講座が発展的に継続しているのは、開学 100 年を超えて連綿と受け継がれている商大人の、学問だけでなく人間としての素養のＤＮＡがあるからこそと思っています。卒業生の方々と接して、「私」よりも「公」への貢献心、誠実さ、責任感など、良い意味で人間としての均質さを感じるのは私だけでしょうか。

100 年を超えた今も変わらず全国の企業が商大生を求めるのは、「紳士・淑女たれ」と、開学以来こうした人格・品格を大切にしてきた商大の理念が文化として根底に流れ続けているからだと思います。エバーグリーン講座を通じて、学生たちは先輩方の生き方に学び、またそれを次代に受け継いで行く。講座は、目に見えなくても、こうした商大の尊い文化を繋ぐ場でもあり続けて欲しいと思います。

エバーグリーン実行委員より

佐藤憲明（昭和 60 年卒）

エバーグリーン講座に関わるようになって、もう２５年になろうか。霞ヶ関勤務から札幌に戻り、伸長目覚ましい情報産業振興を担当していた時に、山田二郎氏（昭和 45 年卒：現緑丘会札幌支部長）から言われた「お前さんも手伝え」の一言で実行委員の末席に座ることになった。職業的に、多くの経済人、産業人との接点があることを期待されていたからかもしれない。

経済界をはじめ、各界で卒業生が活躍されていることは認識していたものの、当時の記憶では、佐野力氏（昭和 38 年卒：元日本オラクル社長）の存在感に圧倒されてしまい、レジェンド級の方々と面識を持つことも難しい中で、未だ未だ人脈も無く、推挙しろと言われてもどうして良いか分からない状況が続いた。

転機は、平成１４年度の開講の際に、講師として立つ機会を得たことである。そうなると、現役学生諸氏がどのような内容を期待するのか、同時に自らがどういうメッセージを伝えられるのか等々、思い巡らすことになる。

どちらかというと、業務的には、一方通行的に「説明」することに力点が置かれがちであったが、学生向けに語るとなると、単なる説明ということにはならず、社会人としての実体験を学生目線で分かりやすく、時間内にどう伝えていけば良いのかの難しさがあることに気づかされることになる。その意味では、良い経験をさせて頂いたと感謝している。

これ以降は、業務上知り得た、緑丘人で個性のある方々をブックマークし、開講年度のラインナップに応じて、記憶の引き出しから「とっておきの講師」として推挙するようになった。

私が重要視しているのは、学生が関心を示しそうな業種、業務経験であるが、何よりも重要なのは「伝える力」が感じられるかである。実際にお会いしてみて、学生諸氏に直接語って欲しいという方を自信を持って推挙することに注力している。それにより、多士済々による連続講義という一種の番組がより魅力あるものなるのではと考えている。

自らも講師を経験することにより、依頼する際において、具体的なお願いが出来ることは大きな意味を持つことは当然ながら、講師として同じ経験を持つという、妙な連帯感も生まれるという副次効果もあるように思う。現役学生とＯＢが繋がる、さらにはＯＢ同士が繋がる空間を創り出すエバーグリーン講座の仕組みを築いた先輩諸氏に改めて感謝申し上げたい。

エバーグリーン実行委員より

昆野照美（昭和 62 年卒）

エバーグリーン講座 30 周年おめでとうございます。30 年という長い期間、在校生の将来の職業を選択するためのヒントや今後の人生の指針という観点で、多様な価値観を実行委員として提供できたことをとてもうれしく思います。

学生たちの取り巻く環境は、時代ともに、刻一刻と変化しています。最近は、より一層社会環境が厳しくなり、奨学金貸与の問題や経済状況のため、恵まれた学習環境ではない学生もいるでしょう。そしてそれに伴い、学生が、就職を考えるうえで必要な情報も時代とともに変化していく可能性もあります。全体の割合が増加した女子学生のためには、どのような講義内容が必要なのでしょうか？また、道内志向が増加しつつある学生にはどのような視点での話があるのでしょうか？

諸先輩たちの志を大切につなぎながらも、エバーグリーン実行委員としては、柔軟な視野に立ってより学生に魅力的な講義を聴いてもらえる機会を作っていただけたらと考えます。

いまだ実行委員としては能力不足ですが、可能な限り先輩たちの足を引っ張らないように、地道にお手伝いできたらと思っています。

山谷智恵子（平成 9 年卒）

私自身は委員になるまで小樽商大の OB の方達と関わりがほぼありませんでした。私に委員ができるのかが不安なことのほうが大きかったのですが、「頼まれごとは試されごと」と思い切って受けてみました。

小樽商大の OB の方は多種多様、いろんな分野で日本で世界で活躍されていました。中には、ギター奏者や熊撃ちまで。私が普通にただ働いていては決して会えないし、話を聞くことなどできない方達ばかりでした。そして、どの卒業生のみなさんも、学生に仕事について、熱く語ってくれます。人間は自分で勝手に自分の枠を作ってしまいがちですが、この先輩方の話を聞くと、ぶわっ～と自分の中の世界が広がります。

一つのことを極めてもカッコイイし、何度転職したって、自分に逢う仕事にめぐり合うこともできる。そのために学生時代に何ができるか、考えることもできる。

なんという贅沢な場でしょう。私自身、刺激的であるとともに、とっても勉強させていただいています。後輩のために、仕事を楽しんで、人生を楽しんでいる素敵な先輩との出会いをこれからも作っていければと思っています。

小樽商科大学
エバーグリーン講座
30 周年記念誌

平成 30 年 9 月 28 日　印刷発行

Impressions

発行人　公益社団法人　緑丘会　理事長　島崎憲明（昭 44）
編集人　エバーグリーン実行委員長　小椋俊秀（昭 58）
発行所　小樽商科大学同窓会緑丘会　札幌支部
〒060-0005　札幌市中央区北 5 条西 5 丁目 7 番地　SAPPORO55 ビル
電話・FAX　011-231-6900
ホームページ　http://www.ryokyukai.com/
メールアドレス　ryokyukai@galaxy.ocn.ne.jp
制作・印刷　株式会社アイム
〒063-0062　札幌市西区西町南 19 丁目 4-10
ホームページ　http://www.aimry.co.jp

禁無断転載